国際日本文化研究センター
NICHIBUNKEN
International Research Center for Japanese Studies

世界の日本研究 2019

Japanese Studies around the World

楠 綾子 編
Edited by KUSUNOKI Ayako

ISBN 978-4-901558-97-6

世界の日本研究 2019
JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD

楠 綾子 編
Edited by KUSUNOKI Ayako

国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

© 2020 International Research Center for Japanese Studies
ISBN 978-4-901558-97-6

All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.
No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission,
except for brief quotations embodied in critical articles and reviews.

First edition published in 2020
by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Goryo Oeyama-cho, Nishikyo-ku, Kyoto 610–1192 Japan
Telephone: (075) 335-2222 Fax: (075) 335–2091
URL: http://www.nichibun.ac.jp/

目　次
Table of Contents

トルコにおける日本研究——歴史的俯瞰と現況
ジラルデッリ青木美由紀　4

高麗大学校の日本研究の現況と課題
——国際研究交流と国際学術誌を中心として　鄭 炳浩　32

韓国における大学の「日本研究所」の現状と課題　金 容儀　41

Going West to Reach the East: A New World Source
for an Episode in the Earliest Japanese Edition of *Tales of Isopo*
Lawrence MARCEAU　52

韓国近代文学研究の現況——2000 年以後を中心に　朴 眞淑　63

Japanese Studies at Miami University of Ohio　Noriko T. REIDER　74

中国における日本研究の現状——歴史・文化を中心に　孫 春日　85

中国における日本古代史研究の現状と課題　王 海燕　91

中国の社会学領域における日本研究　楊 春華　99

悠久なる故郷の響き——黄檗声明の中国的要素　周 耘　109

編集後記　楠 綾子　119

トルコにおける日本研究
――歴史的俯瞰と現況――

ジラルデッリ青木美由紀

はじめに

国際交流基金による2017年の調査では、現在トルコ共和国には全国に中等教育6、高等教育19、学校教育以外で12、全国で合計37の機関で日本語教育が行われている。このうち、日本語日本文学、日本語教育の専門課程が置かれているのは、アンカラ大学、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、内陸部カイセリのエルジエス大学で、カッパドキアのネヴシェヒル・ハジ・ベクターシュ大学は日本語日本文学科が新設され、2017年9月から26名の学生を受け入れている。

大学院のあるのはアンカラ大学（博士、修士課程）、エルジエス大学（修士課程）である。日本研究に限られないが、アジア学で修士号を授けるアジア学センターが近年ボアジチ大学に設立された。

選択科目として日本語の講座を開講しているのは、中東工科大学、ビルケント大学、ハジェテペ大学、トップ経済大学、アトゥルム大学、アンカラ社会科学大学、イスタンブル工科大学、イスタンブル商科大学、ボアジチ大学、ナームック・ケマル大学、バフチェシェヒル大学、イズミル経済大学、イズミル工科大学、ヤシャール大学、エーゲ大学、アクデニズ大学の16機関あるが、講座名があるだけで実態として開講されていないところもある。

現在、トルコにおける学術的な日本研究は、これらの高等教育機関を中心に展開されている。本稿では、歴史的背景を踏まえながら、広くトルコの一般に影響力のあった日本に関する知識の紹介、出版物、日本をテーマにした創作など、日本イメージの拡散も含め、現代に至る過程をまとめてみたい。

1. 中世からオスマン帝国時代の日本への関心と研究

トルコ共和国（1923年建国）の母体となったオスマン帝国（1299年建国）、さらに、それより以前のトルコ民族による日本への関心にまで遡れば、最初に言及されるのは、11世紀の有名なトルコ系の学者、カシュガーリー・マフムード

（Kaşgari Mahmud, 1008–1103、4年頃）による地図である。トルコ系のカラハン朝出身のマフムードは、これもまたトルコ系のセルチュク朝支配下にあったバグダッドのカリフのために、同時代のトルコ系言語の最初の辞書を書いた。Dinan-i Lügat-i Türk またはDīwān Lughāt al-Turkの名で知られる本書には、トルコ系諸民族の居住地域の現存最古の地図が附されており、専門家によれば、この地図の中に日本が言及されている。本地図は現在イスタンブルのトルコ国立図書館に所蔵されている。

オスマン帝国になってからの日本への関心は、中国に付随したもの、あるいは中国の代替品としてはじまる。セリム一世時代（1465–1520）に書かれ、同スルタンの死亡により後継のスレイマン一世（1494–1566）に献呈されたアリ・エクベル（Ali Ekber）によるペルシャ語の著作『ヒターイの書』（*Hıtayname*, 1515）が知られている。本書は、16世紀ムラト三世時代（1546–1595）にオスマンル語に翻訳され、オスマンル語の題は『Kânunnâme-i Çin-ü Hıtâ（チン［中国］とヒターイ［契丹］の法律書）』、文献によっては『Tercüme-i Târih-i Nevâdir-i Çin ü Maçin（チン［中国］とマチンの珍しい歴史の翻訳）』として言及される。ヒターイ（Hitay、トルコ語でHıtay）とは契丹を意味し、ヨーロッパ語で中世に中国北部を指したCathaiと同根の言葉だが、ペルシャ語でも同じ言葉で表現されていた。また、マチン（Maçin）は、中国に属する、東トゥルキスタンの砂漠とタリム川南西部に居住するトルコ系の民族で、人類学的にはモンゴロイドとアーリア人の混血とされている。

ビルギン・アイドゥン（Bilgin Aydın）によれば、本書は、同時代の明朝の法制、宗教、生活習慣、共同体の生活、商業や農業生活、絵画芸術、祭礼、歴史的事件、軍人と市民の生活、宿場町、中国のムスリム、ムスリム達の宮殿、都市での生活、役人達など広範にわたる情報を提供しており、さらに、中国と近隣諸国との関係について言及している[1]。すなわち、日本のことが付随的に登場する。

一方で、時を同じくして、オスマン帝国の政府中枢が置かれたトプカプ宮殿では、古陶を含め、中国磁器を珍重する文化が存在し、現在トプカプ宮殿に保存される陶磁器コレクションがこの時期に始まっている。オランダ東インド会社その他の経路を通じて中東にもたらされた中国陶磁はオスマン宮廷及び有力

1　Bilgin Aydın, XVI. Yüzyıl Osmanlı Seyahatnameleri Hakkında ir Değerlendirme, *Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies*, XL, 2012, pp. 435–51.

者に好んで購入され、実用に供するとともに、高価な宝物として保管された。宮廷コレクションには、直接購入の他、戦利品としての入手経路が知られている。コレクションには、同時代の明代のもののみでなく、中国青磁・染付では最高とされる宋元代の古いものも多く含まれることから、オスマン帝国には、他の宝物同様、中国陶磁に関しても、古物を収集する文化があったといえる。

日本はここでも、中国の代替的存在として登場する。17 世紀、景徳鎮窯の一時的機能停止によって東インド会社が仕入れ先を日本の有田にシフトしたのに伴い、トプカプ宮殿にも有田を主とする日本の陶磁器が入ることになる。トプカプ宮殿には、現在、約 1 万点の中国陶磁、700 点ほどの日本陶磁が所蔵され、質・量ともに世界有数のコレクションとして知られている。

日本の陶磁器がオスマン宮廷に入ったとほぼ同時期、17 世紀に、日本はオスマン帝国の知の見取り図の中で、初めて独立した位置を得た。オスマン帝国時代の最大の知性の一人とされるキャーティプ・チェレビ（Kâtip Çelebi, 1609–1657）は、その代表作『Cihannuma（ジハンヌマー；世界の展望台の意）』で、日本の支配体制、政治、経済、宗教、言語、商業、芸術、道徳習慣、伝統について記述し、地図で示した。本書は、アブラハム・オルテリウス（Abraham Ortelius, 1527–1598）やメルカトル（Gerardus Mercator, 1512–1594）、ロレンツォ・ディ・カラブリアなど西洋の地理学の最新の成果と、Takvim al-Buldan, Avzah al-Masalik, Nuzhat al-Muştak, Nuzhat al-Kulubなどのイスラーム地理学の成果の両方を集大成したものとされ、オスマン帝国の地理学に画期的な転換をもたらしたとされる。手書き写本の写しが多数存在し、トプカプ宮殿博物館、パリ国立博物館、大英博物館をはじめとして各地に所蔵されている。写本は 1732 年、イブラーヒム・ミュテフェリカ（İbrahim Müteferrika）によって地図が加えられ、28 + 698 ページで出版された。日本は、キャーティプ・チェレビの別の著作『Tuhfat al-Kibar fi Asfar al-Bihar』にも言及されている。手書き写本がイスタンブル大学、パリ国立図書館など各地に所蔵され、本書も 1729 年にイブラーヒム・ミュテフェリカによって出版された。キャーティプ・チェレビの著作は、日本に特化した研究ではないが、最初の学術的言及という意味で重要であり、20 世紀になってから、オルハン・シャーイク・ギョクヤイ（Orhan Şaik Gökyay）によって再版され（1973 年、1980 年）、普及という意味では最もよく知られた作品である。

18 世紀になると、中国に関するペルシャ語著作のオスマンル語訳が進められ

る。ティームール朝のパトロンのために書かれたホジャ・グヤーセッディン・ナッカーシュ（Hoca Gıyaseddin Nakkaş）による『Hıtay Seyahatnamesi（ヒターイ［北中国］旅行記）』（1422 年）は、ペルシャ語による中国旅行記のうち最古のものとして知られる。本書は、1728 年にクチュックチェレビザーデ・イスマーイール・アスム（Küçükçelebizade İsmail Asım）によってオスマンル語に翻訳されている。

2. 19 世紀以降のオスマン帝国の日本への関心

オスマン帝国の人々が、「日本」に本格的に関心を持ち始めるのは、幕末の開国前後のことである。オスマン帝国上層部及び知識人は主に同時代のヨーロッパの新聞報道や、フランスを主とするヨーロッパ諸国で出版された外交官の日記・旅行記などから、日本の鎖国、日本の銀価格と世界の相場の格差、徳川慶喜による外国使節の饗応、孝明天皇の突然の死、葬儀の様子、その後の明治天皇の即位などについて情報を得ている。また、19 世紀末世界の主要都市各地で開催された万国博覧会はオスマン帝国にとって日本の情報を得る大きな機会となった。オスマン帝国は最初の 1851 年ロンドン万博から欠かさず参加していた。初期の万国博覧会では、ヨーロッパの外交官や商人を通じて日本品も少量展示されていたので、当然、知識は到達していた。将軍徳川慶喜の 14 歳の弟昭武が将軍名代として開会式に出席し、江戸幕府と別途薩摩藩、肥前藩が参加して物議を醸した 1867 年パリ万博は、オスマン帝国史の文脈では、スルタン・アブドゥルアジーズ（1861–1876）がオスマン帝国スルタンとして初めて征服以外の目的で外国へ旅行したことで知られる。この旅行には、アブドゥルアジーズの二人の弟で、のちにそれぞれスルタンとなる王子ムラトとアブドゥルハミットも同行しており、日本の文物を見ている。

明治天皇と使節を送りあったのちのスルタン・アブドゥルハミット二世は、少年期から日本への関心がことに高かったことが知られている。1872 年、ウィーン万博に日本が参加することがヨーロッパの新聞で報じられると、王子アブドゥルハミットは、ウィーンとゆかりの深い自分付きの侍医マヴロコルヤーニに特に命じて、日本についての調査をさせたことが、侍医の日記から判明している[2]。

2　Ziya Şakir, *Abdülhamit ve Mikado*, İstanbul, 1943.

その後のアブドゥルハミット二世の日本への関心は知られるとおりである。1887年小松宮彰仁親王が日本の皇族として初めてイスタンブルを訪問、答礼として、アブドゥルハミット二世は軍艦エルトゥールル号を日本へ派遣した。これは、見方を変えれば大掛かりな日本調査隊であり、無事に生還すれば日本についての大きな調査結果となるはずだったが、知られるように、同船は1890年9月、帰路に和歌山県串本沖で遭難、約600人の乗組員中生存者は59名のみという大惨事となった。

3. オスマン帝国末期の地理学書に見る「日本」の記述

エルトゥールル号派遣（1890年）より以前に、日本について言及する著作は、地理学書の中に散見される。

筆者が追跡した限り、最も早い時期のものは、1869年出版の『Fenn-i Coğrafya（地理の科学）』[3]がある。著者のガーズィー・アフメット・ムフタール・パシャ（Gazi Ahmet Muhtar Paşa, 1839–1918）は、歴史、宗教、天文学の分野に通じた知識人で、軍人としてのキャリアを積み、1912年に一時期大宰相も務めた。宇宙、政治、自然の三部に分けて地理を述べた本書は、地球上の五大陸、大陸上の国々、各国の自然、政治的地理、国内の行政区分、主要都市について述べられており、日本への言及がある。各国ごとに、その国の行政単位と都市の人口と面積を示すグラフ、陸海軍の装備を示すグラフが付されている。

翌1870年には、19世紀にオスマン帝国で出版された地理学書の中で最も重要なものの一つとされる『Hulāsa-i Coğrafya（地理学概要）』[4]が出ている。本書は、教育省によって中学校の教科書として出版され、12版を重ねた。 著者のスレイマン・シェヴケット・パシャ（Süleyman Şevket Paşa, 生没年不明、1892年に健在）は1860年にミュヘンディスハーネ（現イスタンブル工科大学の前身）を卒業し1892年の時点で第五軍隊少将だった軍人で、本書は1巻の中に3部が含まれる形で構成されている。第1部は地理学概要180ページとヨーロッパ、第2部はアジア、アフリカ、第3部がアメリカとオセアニアに割かれ、地理的特徴や歴史概要が説明されるが、記述内容や分量は平等でなく、ヨーロッパ諸国

3　İstanbul, 1286/1869, 2+228 sayfa, taş basma, 11 x 16 (8.5 x 13) cm.

4　第1巻 : Mukaddeme ve Avrupa kısmı: İstanbul, Tophane-i Amire Matbaası, 1286/1870, 6Ş268 sayfa, 第2巻 : Asya ve Afrika kıtaları kısmı: aynı matbaa, 1287/1870, 202 sayfa 第3巻 : Amerika ve Okyanusya kısmı: aynı matbaa, 1288/1871, 92 sayfa, 11 x 16 (8.7 x 13) cm.

に重点が置かれている。この点から、オスマン帝国の知識人の西洋至上主義がこのころから始まっているとの評価がある[5]。

スルタン・アブドゥルハミット二世から大使として派遣されインド・アフガニスタン地方の旅行記の著作もあるシルヴァンル・アフメット・ハムディ（Şirvanlı Ahmed Hamdi）による1875年の地理書『Usül-Coğrafya-yı Kebīr（大地理学書）』[6]には日本への言及がある。本書はフランスの地理学者ウージェーヌ・コルタンベール（Eugène Cortambert, 1805–1881）の著作の翻訳に著者による補強が入り、単なる翻訳を超えたものとされる。

1882年以前、各種学校で地理学、地相学教師を務めたヒュセイン・ヒュスニー（生没年不明、1892年ごろ健在）による『Coğrafya-yı Umumi（地理学総論）』が執筆されており、手写本の原本がイスタンブル大学に保存されている[7]。イスタンブルのウスキュダル生まれ、ボスニアのイダーディー（高等学校）初代卒業生の一人でイスタンブル・ハルビエ陸軍士官学校卒のヒュスニーは、陸軍学校の最終学年カリキュラムに適するものとして本書を執筆した。本書は、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ、オセアニアの順に詳述され、日本への言及がある。士官学校の教科書として作成されたことから、政治・経済の地理への言及が多く、社会や風俗習慣についての記述は少ない。地理学者によれば、形式から見て、何か元になる本の翻訳書である点は明らかだが、原典が何かは明らかになっていない。本書はのちに手を加えて1882年に『İcamāl-i Coğrafya（地理学要約）』として2巻本が執筆され、1883年に出版された[8]。手写本はイスタンブル大学に所蔵されている[9]。

中等教育の教科書として編纂・出版され、日本への言及が確認されるものと

5　Ekmeleddi İhsanoğlu, ibid., p. 307.

6　別名 *Nuzhat al-Buldān li Tanşīt al-Azhān*, 第1版 : İstanbul Şeyh Yahya Efendi Matbaası, 1292/1875. 6*664 sayfa, 16 x 24 (11 x 20.5) cm.

7　İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 4191: rika ile 132 yaprak, 17.2 x 25.9 cm (11 x 19) cm, 23 satır, müellif tarafından II. Abdülhamid devrinde istinsah deilmiştir.

8　İstanbul, Aramya Matbaası 1300/1883, 276 sayfa, 15 x 23 (11 x 18.5) cm.

9　İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 6617: birinci cilt, 99 yaprak, rika ile, 15.3 x 21.3 (9.8 x 15.5) cm, 14str, Müellif tarafından H.1300 yılında İstanbul'da istinsah edilmiştir. İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 6618, ikinci cilt, İcmal-i Coğrafya-yı Umumi Atlası, 35 adet yazısız haritadan meydana gelir. 46 yaprak, 20 x 27.2 cm. İstinsha müellif tarafından H. 1300 yılında.

して、1883年にエディルネのルシュティエ・メクテビ（中学校）教師ルファット・エフェンディ（Rıfat Efendi）による地理書『Kı'āt-ı Hamse Taksīmātı（五大陸分類）』、『Taksīmāt-ı Çoğrafya-yı Husūsī（地理学詳論）』[10]、1890年出版のデルヴィシュ・パシャ・プレヴェゼリ（Derviş Paşa Prevezeli）による『Coğrafya-yı Asğar（最小限の地理学）』[11]などがある。

1886年には政府高級官僚でカスタモヌ県知事なども務めたクドゥシー・ザーデ・メフメット・アーキル（Kudsī-Zāde Mehmed Ākil, 1870–1898以前没）が高等学校に在学中フランス語から翻訳した『Muhtasar Çoğrafya-yı Umumi（短編地理学総論）』[12]が出版されており、本書にも日本への言及がある。本書は、フランスの高校地理学教師ジャン・レオン・サニ（Jean Léon Sanis, 1801–1879）の著作の翻訳で、授業形式で記述されたものである。

陸軍士官学校の歴史教師で、歴史・地理の分野で少なくとも七つの著作が知られるアリ・テヴフィク（Ali Fevfik, 1911年に健在）が1888年に出版した『Yeni Coğrafya（新地理学）』[13]は、中等軍事学校の3年、4年生の課程に適するよう準備された世界地理で、日本への言及がある。3版を重ねている。

同年1888年にファズル・ネジプ・セラーニクリ（Fazlı Necib Selanikli, 1863–1932）によって中学校の教科書として出版された『Coğrafya-yı Tabii ve Politiki（自然と政治の地理学）』[14]は図版・地図入りの世界地理学書で、日本への言及がある。フランスの地理学者コルタンベール やルヴァスール（Pierre Émile Levasseur, 1828–1911）の著作が参考にされている。文中、オスマン帝国では5年に1冊くらいのペースで地理の教科書が出版されるが、当時の頻繁な国境の変化に対応できていないとの記述がある。巻末に、ヨーロッパの鉄道・馬車道

10　第1巻：İstanbul, Mihran Matbaası, 1300/1883, 14 x 19 (9 x 13.5) cm, 297 sayfa, 第2巻：İstanbul, Mihran Matbaası, 1298/1880, 12.5 x 19 (9 x 13.5) cm, 128 sayfa.

11　İstanbul, Mahmud Bey Matbaası 1307/1890, 37 sayfa, 12 x 18 (8.5 x 16) cm.

12　İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1303/1886, 144 sayfa, 12 x 18 (7.5 x 12.5) cm, 34 harita.

13　第1版：İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1305/1888, 14 x 20 (8.5 x 15) cm, 4+260 sayfa, 第2版：İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1307/1890, 13 x 19 (8.5 x 15.5) cm, 2+283 sayfa, 第3版：İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1328/1912, 12 x 18 (8.5 x 14) cm, 2+406 sayfa] resimli.

14　İstanbul, A. Maviyan Matbaası, 1305/1888, 14 x 20 (9 x 16) cm, 92 sayfa, resimli ve haritalı.

の距離、ヨーロッパ諸国の航海船、軍艦、商船の重量比較、ヨーロッパ主要国の面積、主要国（英国、ロシア、中国、アメリカ、フラジル、オスマン帝国、フランス、ドイツ）の人口と人口密度比較、五大陸の主要都市の人口比較などのグラフが付されている。

著作の正確な年は不明だが、メフメット・レシッド（Mehmed Reşid, 生没年不明、1898 年に健在）による 7 巻本の地理学書『Kıtalar Coğrafyası（大陸別地理学)』[15] があり、ここにも日本への言及がある。1898 年の時点でエディルネの中学校フランス語教師だった著者は、在職当時に本書を執筆し、書体から 1890 年代と同定される手写本が、イスタンブル大学に所蔵される。日本への言及があるのはアジアに割かれた第 4 巻で、ロシア、オスマン帝国のアジア地域、イラン、トゥルキスタン、アフガニスタン、バルチスタン、インド、中国帝国、ビルマ（現ミャンマー)、シャム（現タイ)、安南帝国（現ベトナム）とともに、日本の地理、政治、経済などに言及がある。

日本に言及のある地理学書の系統としては、1892 年にハルビエ（陸軍士官学校）卒業の地図製作者アリ・シェレフ・パシャ（Ali Şeref Paşa, ?–1907）による『Coğrafya Umūmī Atlası』[16] がある。1862 年にパリのオスマン人用学校メクテプ・イ・オスマーニー（Mekteb-i Osmani）に地図製作習得のために派遣され、1868 年にフランスの地図製作を参考にした 22 点のカラー版『Yeni Atlas』を出版した。この時点では、フランス地理学協会会員であった。フランス地理学委員会製作の地図を翻訳した『Coğrafya Umūmī Atlası（地理学総論地図)』は、35 点の地図からなり、23 番目が日本と韓国の地図である。

同 1892 年、オスマンザーデ・ヒュセイン・ヴァッサフ（Osmanzade Hüseyin Vassaf, 1872–1929）は、世界を網羅した地理学書『Hulasa-i Coğrafya-ı Umumi』[17] でアジアの国々の一部として日本に言及している。著者は、オスマン帝国で活動した 2000 人余りのスーフィー（イスラームの修行者）の伝記を 23 年かけて記

15　İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 4160-4166: rika ile 1. Cild: 28 yaprak, 2. Cild: 103 yaprak, 3 cild: 68 yaprak, 4. Cild: 42 yaprak, 5. Cild: 30 yaprak, 6. Cild: 36 yaprak, 7. Cild: 13 yaprak, 20.8 x 26.2 (14.5 x 23.3) cm, 26 str. İstinsahı müellif hattı ile H. XIV. Asrın başlarındadır.

16　第 1 版 : İstanbul, Matbaa-i Amire, 1309/1892, 24 x 39 (21 x 33) cm, 2+39 sayfa, 第 2 版 : İstanbul, Matbaa-i Amire, 1312/1894, 23 x 39 (21 x 33) cm, 2+39 sayfa.

17　İstanbul, Hakkak Serviçen Taş ve Hurufat Matbaası, 1309/1892, 12 x 18 (8.5 x 14) cm, 111 sayfa.

録した『Sefine-i Evliya-yı Ebrar（偉大な聖者たちの本）』の著者として有名な知識人である。

地理学について6点の著作が知られ、軍事学校教師であった可能性の高いセイイド・イスマイル・ハック（生没年不詳、1912年に健在）による総合的地理学書の手稿『Coğrafya（地理学）』[18]は、大部の著作の部分とみられているが、現存する残存部分に日本への言及がある。手稿はイスタンブル大学に所蔵されている。また、同著者による1893年出版の『Müntehab Coğrafya（地理学選）』[19]は、イスタンブル、ベシクタシュに所在のハミディー学校（Hamidi mektebi; アブデュルハミット二世創立の普通科軍事科併設の高等学校）の教科書として準備されたもので、日本への言及がある。英語・フランス語からの翻訳として知られている。

同年1893年、クリミア半島出身の教育者・新聞人ガスピラル・イスマーイル（Gaspiral İsmail, 1851–1914）は、ロシアのムスリムに基本的知識の普及を目的として『Atlaslı Cihannāme（地図入り世界地理）』[20]を出版した。著者はモスクワ軍事学校在学中、クレタ島のギリシャ人山賊と交戦のため出奔、オデッサで逮捕され、のちパリ、イスタンブルで語学教師・通訳・文筆家として活動、27歳で故郷へ戻り、バフチサライ市長となる。1883年に新聞『Tercüman Gazetesi』（のちの日刊新聞『Tercüman-ı Ahval-i Zaman』）を発刊。ロシア・ムスリムの啓蒙、歴史などについて図書多数。オスマンル語、ロシア語、フランス語の文献を参考にして地図、図版入りで刊行された本書は、地理学の定義、解説、効用、地図の書き方、地球の形、地図についての説明、方位、陸地と海の状態、土と水、人種、宗教、宗派、政府についての情報を提供するもので、世界の他の地域・国々と共に、日本への言及がある。

1896年にケヴァーキビザーデ・アブドゥルハーリク・ミドハト（Kevākibī-Zāde Abdülhālik Midhat, 1868–1911）によって出版された『Coğrafya Muallimi

---

18 *İstanbul Üniversitesi. TY, nr. 2469: eserin ilk cildi, rika ile 191 yaprak, 15.7 x 23.5 (8.7 x 16) cm, 15str. Müellif müsveddesi olmalı. Yap. 11b-108b Avrupa, 11a–154b Asya, 155a–166a Afrika, 166–187a Amerika, 187b-191a Okyanusya.

19 第1版：İstanbul, Şirket-i Mürettibiye Matbaası, 1311/1893, 13 x 19 cm, 186 sayfa, 第2版：İstanbul, Şirket-i Mürettibiye Matbaası, 1316/1898, 12 x 18 (8.5 x 15) cm, 155+1 sayfa.

20 Bahçesaray, Tercüman Taş ve Hurufat Basmahanesi, 1893, 7 atlas, 36 x 23 (20.5 x 30.5) cm, 14 sayfa.

（地理学教本）』[21] は、第 2 巻アジアの部分が写真入り、地図入りで刊行された。写真入りという点で画期的である。著者は文化教育省に長く務めた後、イスタンブル法律学校（İstanbul Hukuk Mektebi）の副校長となった人物である。本書は、アジアの地理的特徴、経済状況、産物、政治体制、地域区分、主要地域、民族、人種、文明、言語、宗教、宗派などを詳述し、政治概況、日本を含む各国詳細は、面積、人口、主要な特徴などのほか、歴史概観と最新の重要な時事事件などについても述べている。アジア地域の交通、陸路、鉄路、海路についても言及がある。アジアについてまとめた本書に、オスマン帝国領内のアジア地域への言及はなく、別の巻の計画があったと考えられている。

4. 単独の日本研究書の登場――1890 年代

エルトゥールル号事件が起こった 1890 年、オスマン帝国では単独に日本をテーマにした本が出ている。メクテビ・イーダーディ・ミュルキイェ・イ・シャーハーネ（高等学校）のフランス語卒業生でオスマン政府翻訳課勤務のメフメット・ゼキ（Mehmet Zeki, 1890 年に活動）による著作『Japonya'nın Māzisi, Hāli, İstikbāli（日本の過去、現在、未来）』[22] は、日本の歴史と地理についてのものである。日本の地理区分、島、自然の特徴、日本人の民族的特徴、生活様式、政治制度、主要都市、歴史などについて述べられている。日本がいかに中世的社会から当時の先進国として発展したかを考察し、西洋列強の抗いがたい力に対し、オスマン人の間で、当時賞賛の的であった日本が、どのようにして、どんな理由から発展したか、また、それに対しオスマン政府がなぜ遅れをとったかを説明しようと試みた作品である[23]。これは、日本のみをテーマにした最も早い時期の著作と言える。

翌 1891 年には、経歴不詳の翻訳者メフメット・サフヴェット（Mehmet

21　İstanbul, Alem Matbaası, Ahmed İhsan ve Şürekası 1314/1896, 11.3 x 16.8 (8.5 x 13.5) cm, 138 sayfa, şekilli.

22　İstanbul, Mahmud Bey Matbaası, 1308/1890, 13 x 19.5 (8.5 x 16) cm, 131 sayfa, 2 harita.

23　Ekmeleddin İhsanoğlu(ed.), Haz. Ekmeleddin İhsanoğlu, Ramazan Şeşen, M. Serdar Bekar, Gülcan Gündün, A. Hamdi Furat, *Osmanlı Çoğrafya Literatürü Tarihi (History of Geographıcal Literature During the Ottoman Period)*, Cilt I ve II, İslam Tarih, Sanat ve Kültür Araştırma Merkezi (IRCIA), İstanbul, 2000, p. 288–89.

Safvet）による『Japonya Seyahatnamesi（日本旅行記）』[24] が出版されている。フランスの文学者ピエール・ロティ（Pierre Loti, 1850–1923）の日本旅行記の翻訳で、本書中では日本の歴史的旧跡、自然の美、伝統習慣などに触れられている。この時期での日本をテーマにした著作の翻訳書の存在は、オスマン帝国における日本研究が、西洋語の文献からも多くを吸収していたことを示している。また、学術的な研究だけでなく、文学などの一般に親しむことのできるレベルで関心が保たれていたことがわかる。

エルトゥールル事件の生存者帰還から約1年4ヶ月後の1892年4月、アブドゥルハミット二世は一人の調査員を日本へ派遣した。出発前はイエメンのサナア市長だったオスマン帝国官僚ムスタファ・ビン・ムスタファである。この人物は、アデンから出発、ムンバイ、カルカッタ、セイロン、シンガポール、ジョホール、サイゴン、香港、広州、中国内陸部、上海を経由後横浜へ到着し、東京、神戸、大阪、京都、長崎を訪問した。全行程は約2年弱、日本では約70日滞在している。ムスタファは自身の見聞を旅行記『Aksâ-yı Şark'ta Bir Cevelân（極東逍遥）』にまとめてアブドゥルハミット二世に献呈し、現在イスタンブル大学稀覯書図書館に保存されている。旅行は日本に特化されたものではなかったとはいえ、管見の限りでは、オスマン帝国人による最古の日本見聞記である。ムスタファの旅行は、エルトゥールル号で果たせなかった東南アジア・東アジア地域のムスリムの動向を探るアブドゥルハミット二世の意向が背景にあったと考えられる[25]。旅行記はアフメット・ウチャル（Ahmet Uçar）によって2010年に公刊されている[26]。

1893年には、日本人野田正太郎と山田寅次郎の日本語学生だった士官学校生ピヤーデ・ミュラーズム（Piyade Mülazım）、ムスタファ・アースム（Mustafa Asım）が、『Mecmua-i Lügat, Türkçe, Japonca, Fransızca（辞書雑誌、トルコ語、日本語、フランス語）』という題名の辞書を編纂した。公刊されたかは不明だが、

24　İstanbul, Matb'a-i Eb'z-Ziyā, 1309/1891, 10 x 14 (7 x 12) cm. 408+4 sayfa.

25　詳しくは、ジラルデッリ青木美由紀「亜細亜東西合鏡――オスマン帝国の官僚ムスタファ・ビン・ムスタファの見た明治と明治の官僚渡辺洪基の見たオスマン帝国」、第53回日文研国際研究集会「世界史のなかの明治／世界史にとっての明治」（2018年12月14日～16日）予稿集、1–10頁。

26　Mustafa bin Mustafa, Ahmet Uçar (ed.), *Bir Osmanlı Bürokratın Uzak Doğu Seyahati*, Çamlıca Yayınları, İstanbul, 2010.

この著作は、トルコ語による最初のトルコ語・日本語辞典といえる[27]。

この時代、伝統的にトプカプ宮殿に収集されていた中国・日本の磁器とは別に、ヨーロッパのジャポニスムの流れを受けて、宮廷の調度品にも日本趣味が現れた。分量としては依然陶磁器が最も多いが、家具、照明、煙草用品、服地、傘など多様な日本品が現存している。これらは、日本からの直接の輸入品とともに、ヨーロッパから輸入されたもの、あるいはヨーロッパ製の日本風製品も含まれる。宮廷では、柿や竹など日本の植物、日本の鳥類なども輸入され、飼育栽培された。

20 世紀になると、オスマン帝国人の日本についての著作には、軍人が目立つようになる。前後して、外国語文献からの翻訳による日本研究が登場するようになる。メフメット・ヒルミー（Mehmet Hilmi）によるおそらく英語からの翻訳歴史書『Mühim bir Ders-i Tarihî（歴史からの重要な教訓）』[28]（1900 年ごろ）が出ており、日本への言及がある。著者はトッテンハム（Totenham）と表記があるが、原典は不明である。

1901 年、義和団の乱で過激化した中国ムスリム軍団と対話するべくドイツのヴィルヘルム二世から要請され、アブドゥルハミット二世が上海に派遣したエンヴェル・パシャ以下 5 名のオスマン帝国の代表団は、帰路、長崎に停泊し、将校のコルアアス・ナーズム・パシャ（Kolağası Nazım Paşa）は、長崎についての短い覚書を日記に記している。

1903 年、中央アナトリアの街ビレジック出身という以外経歴不詳のナームク・エクレム・アーヤンザーデ（Namık Ekrem, A'Yan-Zāde, 生没年不詳、1912 年に健在）は、“Kont Bovoir”の日本旅行記を翻訳し、新聞『Musavver Terakki Gazetesi（絵入り進歩新聞）』に連載、のちに単行本『Japonya Sularında（日本の水辺で）』を出版している。オスマンル語の文献に登場する著者「Kont Bovoir」は、1865 ～ 1867 年に世界旅行をしたフランス貴族のルドヴィク・ド・ボーヴォワール公爵（Comte Ludvic de Beauvoir, 1846–1929）と考えられる。同公爵は、オーストラリア、インドネシア、タイ、中国、日本を訪問し、旅行記

27　Kurşun 2010, p. 192 と注 13　公刊されたかは不明の著作の原本は、İBB, Atatürk Kitaplığı Bel-Yz K.000751 の番号で登録されている。

28　Totenham, Mehmet Hilmi (çev.), Mühim bir ders-i tarihî, Dersaadet, İstanbul, 1900?

を出版しているが[29]、オスマン帝国では、日本の部分のみが抜粋されて出版されている。ナームク・エクレム名義の著作としては、本作の他に『Faideli Türkçe Sarf. Hicran ve Makalat-ı Güzide』、『Anadolu'da bir Cevelan（アナトリア旅行）』の2作が知られている。

5. 日露戦争以後

オスマン帝国の日本への関心が劇的に高まるのは、日露戦争で日本が辛くも勝ち取った勝利の後である。見学将校として同戦争に参加したペルテヴ・パシャ（後の名をペルテヴ・サイート・デミルハン Pertev Sait Demirhan, 1871–1964）が執筆し、アブデュルハミット二世に献呈した報告書が知られる。報告書は何度も再版され、メルトハン・デュンダル（Merthan Dündar）、ドルック・アクユズ（Doruk Akyüz）などによって現代でも数種再版されている[30]。ペルテヴ・デミルハンは日土国交が正式に樹立される前の非公式の大使とも言える存在で、日露戦争当時2ヶ月日本に、満州に1年近く滞在し、見聞を詳細に報告した他、著作活動や講演なども行い、専門家として日露戦争を分析したにとどまらず、日本社会をオスマン帝国に紹介した人物として知られる。1931年に退役後、三期国会議員を務めた政治家でもあり、トルコ語、ドイツ語、英語による16の著作がある。

1904年には、フランスの絵入り新聞『Le Tour de Monde』に掲載されたフランス人Mojによる日本旅行記が、アリ・ムザッフェール（Ali Muzaffer）による翻訳で『Japonya'da Seyahat（日本の旅行）』[31]として刊行されている。フランスでは1855年の中国、2年後の日本への旅行が連載されたが、オスマンル語訳では日本の部分だけが抜粋された。Mojとは、1858年、フランスと江戸幕府の間にかわされた日仏友好通商条約の締結のため、シャルル・ド・シャッソン

---

29 Le Comte Ludovic de Beauvoir, *Voyage autour du monde: Australie, Java, Siam, Canton, Pékin, Yeddo, San Francisco*, Paris, Plon, 1867.

30 Doruk Akyüz, *Bir Osmanlı Kurmayının Gözüyle Rus-Japon Harbi: Miralay Pertev Bey'in Gözlemleri*, Dergah Yayınları, İstanbul, 2017, A. Merthan Dündar, *Rus-Japon Harbinden Alınan Maddi ve Manevi Dersler ve Japonların Başarlarının Sebebi*, Gece Kitaplığı, 2016.

31 İstanbul, Hanımlara Mahsus Gazete Matbaası, 1322/1904, 13.5 x 18 (6 x 12.5) cm, 60 sayfa.

（Charles de Chasson, 1818–1871）、グロス男爵（ Baron Gros, Jean-Baptiste Louis Gros, 1793–1870）に同行したフランスの外交官アルフレッド・ド・モージュ侯爵（Marquis Alfred de Moges, 1830–1861）と思われる。本書翻訳者の経歴は不詳だが、同名の著者によるエチオピアに関する著作『Habeşistan Hakkında Malūmat-ı Mücmele（エチオピア要報）』（1903 年）が知られている。

また同年、中学校の地理学・科学教師、文化教育省管理職などを歴任したメフメット・アーリフ（Mehmet Arif, 1868–?; 1911 年に健在）による日本についての著作『Musavver Yeni Japonya（絵入り新日本）』[32] が出版されている。日本の歴史、宗教、社会構造、地理についての著作で、日本の地理、歴史概観、農業、1895 年の日清戦争、その結果植民地として得た台湾の地理的特徴、北海道、軍事状況、交通・通信手段、一般的教育、初等教育を中国人から学んだこと（すなわち漢文の素養）、現存の学校数と生徒数、日本陸海軍の状況、日本人の信仰、商業、工業などについて、挿絵・地図入りで述べられている。日本、日本人についての先行著作を数多く参考にしており、近代日本の登場について言及した点で画期的とされる。

日露戦争関係としては、同年、著者名・出版社は不明ながら、アラビア語の書籍『Mucemü'l-lisan fi harbi'r-Rus ve'l-Yaban』がベイルートで出版されている。

ドルマバフチェ宮殿アブドゥルメジット・エフェンディ図書館には、日本の文化、歴史から日露戦争日本海海戦の時事刻々の船の位置までを詳述した 5 巻本『Musavver Rus Japon Seferi（図解日露戦争）』[33] が所蔵されている（所蔵番号 Inv.no. K16）。著者は、オスマン帝国海軍の二人の将校オスマン・セナーイー少佐（Osman Senai (Erdemgil)）とアリ・フアッド大尉（Ali Fuad (Erden)）である。第 1 巻はロシア帝国、日本帝国についての概要で、日本の社会構造、歴史、地理、陸海軍、日本文学、文化、芸術について、第 2 巻は東郷元帥の紹介、8 月 10 日の戦い（1904 年の黄海海戦、日本艦隊のロシア旅順艦隊との交戦）その他の戦闘について、第 3 巻は旅順港とその守備、図版・地図入り、第 4 巻は戦闘について、第 5 巻は対馬海戦とバルチック艦隊の最後、ポーツマス条約関連につい

32　İstanbul, Şirket-i Mürettibiye Matbaası 1322/1904, 14 x 20 (9.5 x 16) cm, 112 sayfa, resimli.

33　Osman Senai (Erdemgil), Ali Fuad (Erden), Musavver Rus Japon Seferi, Kitabhane-i İslam ve Askeri, İstanbul, 1321/1905–06.

て述べられている。

1909年には、シミノフ（Siminof）という人物によるロシア語の原典の英語訳からM・ムヒッディン・ハサン（M. Muhyiddin Hasan）によるオスマンル語への重訳という形で、日露戦争の海戦についての書物『Coşima deniz meydan muharebesinde: Moskof donanmasının perişanlığı（ジョシマ〔筆者による訳注：対馬〕海戦で：モスコフ艦隊の惨敗）』が出版されている。著者は、ロシア軍バルチック艦隊艦長のウラディミール・スミノフ（Vladimir Semenov）で、彼自身が参戦した1905年の対馬海戦の記録である。同著者は、1904年の黄海海戦も率いた人物であり、オスマンル語による出版は未確認だが、この海戦についても記録が出版されている。翻訳者は、テサロキニキの港湾局長との肩書きがある。

同著者による別の著作『Kaptan Vladimir Semenof'un Ruznamesi ve çuşima muhârebe-i bahriyesi（ヴラディミール・セメノフ船長の日誌とチュシマ［対馬］海戦）』[34]も、別の翻訳者ナヒッド（M. Nahid）のオスマンル語訳によって1912年に出版されている。翻訳者のナヒッドは、トゥルグット・レイス・ズルフ・ヒュマーユーン（オスマン海軍）の技術者との肩書きがある。

大変興味深いのは、1911年にニューヨークで、おそらくトルコ人と思われる著者アフメット・ファズル（Ahmed Fazlı）による、日本の近代化についてのオスマンル語の著作『Kitabu Sırrı Tekaddümi-l Yaban（日本の発展の秘密の本）』[35]が出版されている点である。

1912年出版の2巻本『Coğrafya-yı İktisadi（経済地理学）』[36]では、第1巻がオスマン帝国、イラン、アフガニスタン、モロッコの経済地理、第2巻が英国、アメリカ、ドイツ、フランス、オーストリア、ハンガリー、ポルトガル、ルーマニア、ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ギリシャ、ブラジルとともに、日本が取り上げられている。オスマン帝国と直接関係のある近隣諸国、世界経済の主要国とともに日本が取り上げられている点、注目に値する。著者のメフメット・フルハネッディン（Mehmed Burhaneddin, 1868–1941）は、オスマン帝国財務省に長く務めるかたわら高校で地理学を講じ、トルコ共和国でも財務監

34　Vladimir Semenov, M. Nahid (çev.), Kaptan Vladimir Semenof'un Ruznamesi ve çuşima muhârebe-i bahriyesi, İstanbul, 1328 R 1912 M.

35　Ahmed Fazlı, *Kitabu Sırrı Tekaddümi-l Yaban*, New York, 1329H 1911M, 152s, 12res.

36　İstanbul, Edeb Matbaası 1328/1912, 732 sayfa.

察長官、関税監察長官、トルコ中央銀行の役職などを歴任した人物である。

トルコ人による直接の日本研究ではないが、アブドゥルメジット・エフェンディ図書館には、坪内逍遥『浦島』のフランス語訳本（1912年刊）も所蔵される。フランス語や英語、ドイツ語などヨーロッパの言語を介して日本についての情報を得ていたことを示す歴史的証拠として注記できる。

タタール系ロシア人でのちにオスマン帝国国籍を取得し、イスタンブルを拠点として日本についての著作をした人物として、イスラーム教の宗教家、イスラーム法学者、政治活動家、ジャーナリスト、旅行家のアブドゥルレシット・イブラヒム（Abdülreşid İbrahim, 1857–1944）がいる。帝政ロシア統治下でのムスリム政策に対する政治活動後、各国を経てオスマン帝国国籍取得、オスマン帝国人として伊土戦争、バルカン戦争、第一次世界大戦を経験し、ロシア革命後ロシアに帰国、大日本帝国陸軍のムスリム政策とも大きく関わった人物である。1907年に中央アジアのブハラ、サマルカンド、セレミチエへの旅、1908～1909年にシベリア、モンゴル、満州、日本、韓国、中国、シンガポール、インドネシア、インド、ヒジャーズ（アラビア半島の紅海沿岸地方）をめぐる旅行をし、著作『Âlem-i Islâm（イスラーム世界）』（第1巻1910年刊、第2巻1913年刊）として纏（まと）めた。アブドゥルレシット・イブラヒムは、日本の汎アジア主義者たちと繋がりがあり、ハサン波多野烏峰（1882–1036）執筆の小冊子『危機に瀕する亜細亜』を、1912年、日本人メフメット・ヒルミ・ナカヴァ（Mehmed Hilmi Nakava）と共訳で出版している[37]。ロシアではペレストロイカ以降、トルコでは1987年にメフメト・パクスによるトルコ語訳が刊行されて以降、研究が盛んになった[38]。約半年滞在した日本について概ね肯定的に詳述されており、本書の日本イメージが各国のムスリム読者に与えた影響は大きかったという。イブラヒムは1933年日本政府に招かれて日本に再渡航、1938年に設立された東京ジャーミイの初代イマームとなり、東京で没した。彼の日本滞在記は、1991年小

37　Hatano, (çev.) Mehmed Hilmi Nakava (Japonyalı), Abdürreşid İbrahim, Asya tehlikede, İstanbul, 1328R 1912M.

38　小松久男「国際シンポジウム　アブドゥルレシト・イブラヒムとその時代――トルコと日本の間の中央アジアユーラシア空間」報告、東京外国語大学（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/nihu/meeting/2014/20140524/index.htm）。

松香織・小松久男によって日本語にも翻訳されている[39]。

短期間で近代化し、日露戦争でロシアに勝利した「日本人を見習え」という風潮は、サティ・ベイの講演録『Büyük Milletlerden Japonlar, Almanlar: İki konferans（偉大な国民より、日本人、ドイツ人：二つの講演）』[40]に反映されている。また、外国語の翻訳から情報を得る試みは続き、イティジカヴァ（İticikava）なる人物によるドイツ語文献『Japonya tarih-i siyasisi（日本の政治史）』が、ムバーハット（Mubahât）によって翻訳され、1914年に出版されている。

1910年代にオスマン帝国内で発行された日本関連の著作には、ほかに雑誌『Genç Kalemler（若き筆）』に掲載された末松謙澄（1885–1920）の論文オスマンル語訳『Garp Medeniyetinin Japonya'ya Dühulü（西洋文明の日本への導入）』がある。これは、1905年に末松が英国で出版した論文集『The Risen Sun』[41]に掲載の論文「The Introduction of Western Civilization into Japan」の無記名の筆者による導入とまとめを入れて、1911年に3回掲載された[42]。のちに逓信大臣、内務大臣を歴任、伊藤博文の娘婿でもあった末松は、英国大使館付一等書記官見習いとして英国に留学、ケンブリッジ大学で法学士の学位を取得した人物で、源氏物語の最初の英訳者、英文による源義経＝ジンギスカン説の提唱者として知られる。ロンドン留学中は、国史編纂の責任者重野安繹の命により、英仏歴史編纂方法の取り調べに従事し、傍らで日本の歴史や文化について早い時期から英語で発信していた人物である。翻訳された論文は、日露戦争時のもので、日本の勝利によって日本への興味が喚起されたものと見て良いだろう。翻訳者は不明である。

中等・高等教育における地理学教科書中の日本への記述も、この時期依然として続いている。1911年出版、経歴不詳のメムドゥフ・スレイマーン（Memduh Süleyman, 生没年不詳、1912年に健在）による『Mufassal Yeni Coğrafya-yı

39　アブドゥルレシット・イブラヒム『ジャポンヤ』小松香織・小松久男訳、第三書館、東京、1991年。

40　Satı Bey, Büyük Milletlerden Japonlar, Almanlar: İki konferans, Desaadet, İstanbul, 1329/1913.

41　Suematsu Kencho, The Risen Sun, London, Constable, 1905.

42　川原田喜子「国交樹立以前の文献からよみとくトルコ人の日本観、日本人のトルコ観」東京外国語大学、2009年、19頁。

Umūmī（章別地理総論）』[43] は、中等学校、王立学校の最終学年向けに書かれたもので、日本への言及がある。2巻本で、第1巻が自然と地形、ヨーロッパ地理、第2巻がアジア、アフリカ、アメリカ、オセアニアの構成である。どの地域についても、自然地形、国々の政治、社会、経済、国境、人口、面積、地形について触れてある。

筆者の探索には限りがあるので、今後、オスマン帝国で行われた日本研究、この時代に出版された文献について、諸氏のご教示を仰ぎたい。現時点で、以上の限られた情報からオスマン帝国時代の日本研究を概観すると、最初期の17世紀ごろから、地理学の分野で研究が始まったことがわかる。オスマン帝国において地理学は、イスラーム科学の伝統と西洋の地理学の両方の成果を受けて独自に発達した分野であり、自然科学、測量学、地図学だけでなく天文学や政治学、経済学、歴史学とも結びつく「世界を把握する方法」であった。日本はその中で、他の国々とともに、世界を構成する国々の一つとしてオスマン帝国の人々に認識された。

19世紀後半になると、このころ整備された近代的な中等・高等教育制度の中で、中・高等学校の地理学教師、あるいは軍事学校教師による研究が大きな役割を果たしていたことがわかる。ことに地理学教科書中で取り扱われた日本についての情報・分析は、他の国々とともになされるものであったにせよ、知識を広く一般に広める効果があったと考えられる。

日本について独立した関心が芽生えるのはむしろ遅く、1890年代ごろを境にしている。これは、その前後に始まった日本との直接の接触、外交関係樹立の試みとともに、日清日露の戦争を経て、近代国家として短期間のうちに国際社会で頭角を現した同じ東洋の国としての認識からである。

日本に関する情報は、最初は主に英語・フランス語の文献から入っており、直接の情報収集は日露戦争前後までは見られない。単独に日本に関する著作も、フランス語・英語・ドイツ語など西洋語の原典からの翻訳から始まっている。少数とは言え、メフメット・ゼキ、ペルテヴ・サイート・デミルハン、アブドゥルラシット・イブラヒム、メフメット・アーリフらの仕事は、日本を分

43　第1巻：İstanbul, Matbaa-i Hukukiye, 1329/1911, 13 x 19 (9.5 x 15) cm, 312 sayfa, 第2巻：İstanbul, Matbaa-i Hukukiye, 1330/1912, 13 x 18.5 (10 x 16) cm, 277 sayfa.

析する独自の試みとして注目に値する。

6. トルコ共和国初期の日本研究

オスマン帝国が崩壊し、トルコ共和国の建国は、第一次世界大戦後ローザンヌ条約（1923年）を経て国際社会に認められ、翌1924年、日本とトルコはようやく対等な関係で国交を結んだ。トルコにとって国事多難だった1920年代には、日本研究に関する著作は、管見の限り、見つけることができなかったが、ここに日土関係は新たな段階に入る。国交樹立の翌年1925年には東京にトルコ大使館が、イスタンブルに日本大使館がそれぞれ開設、日土貿易協会が創立され、さらに翌1926年には、日本側で日土協会が発足した。日本からの発信であるが、1930年に、この日土協会がおそらくトルコ人向けに『Bugünkü Japonya（今日の日本）』[44]というトルコ語冊子を発行している。また、おそらくキリスト教のミッション系と思われるが、キリスト者で協同組合の提唱者賀川豊彦についての小冊子が同年トルコ語で出版されている[45]。

この頃、学術研究というよりは、オスマン帝国崩壊後の荒廃・疲弊した産業構造を革新するべく、両国の合弁による最初の産業提携・共同事業が立ち上がった。西本願寺の元門主・大谷光瑞によって立ち上げられた事業は3都市・3事業ある。ブルサの旧家メンドゥフ・ベイ（のちのギョクチェン家）の間に絹織物染色工場、アンカラのアタチュルク農場で香水工場、イスタンブル・カラキョイに貿易会社が存在した。日本から技術者や若い学生を定住させてトルコ語を学ばせ、日本の技術を伝えた。ブルサでは、トルコ国内市場向けヨーロッパの絹織物ジャガードやシフォンなどのみならず、少量ながら羽二重、山谷織、金波織など日本の絹織物も生産された。その意味では、産業提携は、トルコ側にとっても日本を「研究」する生きた機会でもあった。事業は、1928年から1932年までの短い間続いた[46]。

1930年代、トルコ政府関係機関による日本関連研究の出版が目立つ。ラフミー・ユルドゥルムオウル（Rahmi Yıldızoğlu）による『Soya: sınai bitkilerden

---

44 Türk-Japon Cemiyeti, Bugünkü Japonya, Tokyo, (yayınevi belirsiz), 1930, 45–2 sayfa.

45 Galen Fisher, Kagawa Japonya Metruklarının Dostu, Selamet Matbaası, İstanbul, 1930 Kagawa Toyohiko, 13s.

46 Minako Mizuno Yamanlar and Şüküfe Gökçen (eds.), *The Turkish Japanese Factory 1928: History Woven in Bursa*, Ege Yayıncılık, Istanbul, 2015.

soya fasulyesi-Japonfasulyesi: (soya hispida Moench)（大豆：産業的植物としての大豆―日本豆）』[47] は、1936 年、食物、農業、畜産業省の種苗研究所から、また、日本の人口についてのイノウエマサジ（アジア主義者の井上雅二, 1877–1947?）の著作[48] が、1938 年にトルコ統計庁から出版されている。

日本側からの働きかけか、トルコ側の自発的な動きによるものかは不明だが、トルコに日本を紹介する著作も、トルコの出版社から 1933 年に一つ[49]、ファイク・サブリ・ドゥランによる『Bugünkü Japonya（今日の日本）』[50] が 1938 年に、いくつか相次いで見える。

同年、著者不明ながら、子供向けの日本のおとぎ話がトルコ語で出版されている[51]。子供向けおとぎ話は、1944 年にケマル・カヤ（Kemal Kaya）著の世界のおとぎ話集[52] の中でも、ドイツ、フィンランド、デンマーク、ベルギー、イタリア、ラップランド、ミクロネシアとともに日本が取り上げられており、第二次世界大戦後も、ケマル・チャーダシュ（Kemal Çağdaş）翻訳の『Dünya Çocuk Masalları（世界のおとぎ話）』（1949 年）でも、日本の話が収録されている[53]。日本のおとぎ話を収録したものではなく、日本を舞台にしたトルコ人による創作物語として、「日本への旅（Japonya'ya Seyahat）」が、「中国の旅」、「チベットで何を見たか」、「シベリアでの三ヶ月」とともに 1932 年に出版されている[54]。

直接的な「日本研究」ではないが、日本が舞台のオペラ、プッチーニのマダ

---

47 Rahmi Yıldızoğlu, Soya: sınai bitkilerden soya fasulyesi-Japonfasulyesi : (soya hispida Moench), Gıra, Tarım ve Hayvancılık Bakanlığı Yeşilköy Tohum Enstitüsü, İstanbul, 1936 fotoğraflı, 43 s.

48 Inoue Masaji, Osman Derinsu (çev.), Japonya Nüfusu, Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü, Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü Neşriyet no. 118, Tetkikler Serisi Sayı 65, Anlara, 1938.

49 Bugünkü Japonya, Muallim Ahmet Halit Kitaphanesi, İstanbul, 1933, 103 s.

50 Faik Sabri Duran, Bugünkü Japonya, Yedigün, İstanbul, 1938 32s.

51 (Yazar belirsiz), Japon efsaneleri : I. kamo - Yamato nasıl imparator oldu? - II. cesur asilzade ve korkunç ejderha - III. beş fırçalı sihirbaz - IV. prenses pembe gül - V. ejderhalar kıralın sarayında, Kanaat Kitabevi, İstanbul, 1938.

52 Kemal Kaya, Dünya çocuk masalları : Alman, Danimarka, Fin, Flâman, İsveç, İtalyan, Japon, Lâpon, Mikronez masallarından seçmeler I, İbrahim Berkalp Yayınevi, Ankara, 1944.

53 Kemal Çağdaş (çev.), Dünya Çocuk Masalları, Berkalp Yayınları, Ankara, 1949.

54 Kanaat Kütüphanesi, Çin'de seyahat, Kanaat Kütüphanesi, İstanbul, 1932.

ム・バタフライのテクストが『Madam Batrflay: bir Japon kızının trajedisi: opera 3 perde（マダム・バタフライ：ある日本娘の悲劇：オペラ三幕）』[55] としてトルコ語訳され、国立オペラ・コンセルヴァトワールから出版されている。

日露戦争関係の出版物も、1930～40年代を通じて出版され続けている。1932年にはH・ウィルソンなる人物[56]、「イイムラ」なる人物[57]による日露戦争についての著作が相次いでアンカラで出版され、海軍提督・作家のセルメット・ギョクデニズ（Sermet G,kdeniz, 1905–1979）による日露戦争の本『Rus-Japon Harbi: 9-Şubat-1904–5-Eylül-1905（日露戦争　1904年2月9日～1905年9月5日）』（1944年）[58] は、トルコ軍からの出版である。同戦争の見学将校ペルテヴ・デミルハンによる著作『Japonların Asıl Kuvvetleri: Japonlar niçin ve Nasıl Yükseldi?（日本人の底力：日本人はなぜ、どのようにして発展したのか？）』（1938年）[59]、『Rus-Japon Harbi 1904–1905（日露戦争 1904–1905）』（1943年）[60] も、版を重ねて出版されている。

1937年には、トルコ政府供出金によるエルトゥールル号慰霊碑が完成し、除幕式と2年繰り上げの遭難50周年追悼祭が同時に開催された。在日本トルコ大使館は、この機会に『土耳其軍艦エルトグルル号』（駐日土耳古大使館編、1937年）を刊行、本書は同内容のものがフランス語でも出版された。

ドイツの軍人、政治地理学者で知日家、親ナチ派として影響力の大きかったと言われるカール・ハウスホーファー（Karl Haushofer, 1869–1946）の日本についての著作『Japan baut sein Reich（日本とその国民）』[61] が、ドイツで出版され

55　Giacomo Puccini (1858–1924), Madam Batrflay : bir Japon kızının trajedisi : opera 3 perde = (Madame Butterfly), Devlet Konservatuvarı Opera Metinleri Neşriyatı, Ankara, 1941.

56　Wilson, H. Rus-Japon Harbi, Büyük Erkanıharbiye Reisliği Matbaası, Ankara, 1932.

57　İimura, Rus-Japon Harbi 1904–1905: İimura'nın Tenkitleri, Büyük Erkanıharbiye Reisliği Matbaası, Ankara, 1932 26s., İimura, Rus-Japon 1904–1905 harbine dair verilen Konferans, Büyük Erkanıharbiye Reisliği X. Şube, Ankara, 1932 38s.

58　Sermet Gökdeniz, Rus-Japon Harbi: 9-Şubat-1904–5-Eylül-1905, Genelkurmay Başkanlığı IX. Şube, (Yayın yeri yok), 1944.

59　Pertev Demirhan, Japonların Asıl Kuvvetleri: Japonlar niçin ve Nasıl Yükseldi?, Cumhuriyet, İstanbul, 1937 93 s.

60　Pertev Demirhan, Rus-Japon Harbi 1904–1905, Matbaa-i Ebüzziya, İstanbul, 1943.

61　Karl Haushofer, *Japan baut sein Reich*, Zeitgeschichte-Verlag Wilhelm Undermann, Berlin, 1941.

た同じ年に、トルコでもガーリップ・ケマリ・ソイレメズオウル（Galip Kemali Söylemezoğlu, 1873–1960）によるトルコ語訳で『Japonya ve Japonlar（日本及び日本人）』[62] として出されている。このスピードは当時の国際的政治状況の中で日本への関心の高さを知るうえで興味深い。翻訳者は1930年までギリシャ、イラン、ロシア大使を歴任した外交官で、上記のエルトゥールル号記念式典と出版を行なった当時の駐日トルコ大使ヒュスレヴ・ゲレデ（Hüslev Gerede）は、娘婿である。

1943年にはジャーナリスト・文筆家・歴史家のズィヤー・シャーキルが読み物『Abdülhamit ve Mikado（アブドゥルハミットとミカド）』を出版、翌年には岡倉天心『茶の本』のトルコ語訳が、医師で作家・詩人のアリ・スハー・デリバシュ（Ali Süha Delibaşı, 1887–1960）により出ている[63]。

7. 第二次世界大戦以降——国交断絶を超えて

第二次世界大戦では、末期の1945年になって両国は国交断絶、アンカラの日本大使館は閉鎖、トルコは日本に宣戦布告した。断絶は戦後も数年間続き、1952年になってようやく再開している。

第二次世界大戦前後には、日露戦争関連の出版とともに、日本を敵国として、あるいは成功した軍事国家として研究する著作が散見される。ムスタファ・アカンセル（Mustafa Hakkı Akansel）は、『日本の奇跡、そしてそこから我々が学べる教訓』[64] で、日本の軍国政策を分析し、トルコが見習うべき点を議論している。

1945年には、ボルシェヴィキの活動家グレゴリー・ビエンストック（Gregory Bienstok, 1884–1959）による英語の著作『太平洋戦争への葛藤（The Struggle For The Pacific）』[65] のトルコ語訳[66] がトルコ軍事省から出ており、翻訳者は不明なが

---

62 Haunhafer, Geueral, çev. Galip Kemali Söylemezoğlu, Japonya ve Japonlar, Ahmet Sait Matbaası, İstanbul, 1941.

63 Okakura Kakuzo, Ali Süha Delibaşı (çev.), Çayname, Remzi Kitabevi, İstanbul, 1944.

64 Mustafa Akansel, Japon Mucizesi, Çınaraltı Yayın, İstanbul, 1943.

65 Gregory Bienstok, *The Struggle for The Pacific*, Allen and Unwin, London, 1937.

66 Gregori Bienstok, H. Gürgüç (çev.), Pasifik için Mücadele, 1-2, Genelkurmay Başkanlığı, Ankara, 1945.

ら、日本の柔術を紹介する書籍『柔術：自分自身を守る芸術』（翻訳者不明）[67] も出版されている。本書は副題に「世界中の軍隊、スポーツクラブ、学校で授業カリキュラムに取り入れられている有名な日本のスポーツの奥義と適用法」とある。

1950 年代になると、日本に関して、第二次世界大戦を総括する書籍が登場する。シェレフ・カラプナル（Şeref Karapınar）による『日本は第二次世界大戦にどう進んでいったのか』（1954 年）[68]、ファヒル・アルマオウル（Fahir Armaoğlu）による『日米関係の 10 年　1931–1941』[69] がある。1952 年のトルコの NATO 加盟を受けての動きと見ることができる。ルース・ベネディクト『菊と刀』のトゥルキャン・トゥルグット（Türkan Turgut）の翻訳による刊行[70] も、この流れで見ることができる。

広島・長崎への原爆投下は、世界の他の地とトルコの社会一般にも大きな衝撃を与えた。世界的に著名なトルコの左翼詩人、ナーズム・ヒクメット（Nazım Hikmet）の仕事には、「Kız Çocuğu（少女；日本では「死んだ女の子」の題名で知られる）」（1956 年）、「Japon Balıkçısı（日本の漁師）」、「Bir Kız Vardı, Japonya'da（一人の少女がいた、日本に）」、「Radyoaktiviteli Yağmurlar Üstüne（放射能の雨の後に）」（1963 年）など日本に関連した詩作が知られる。特に、1956 年作の「少女」は、各国語に翻訳された。

トルコでは、音楽家、俳優、詩人、政治家のズルフ・リヴァネリ（Zülfü Livanli, 1946–）がこの詩に曲をつけた「Nazım Türksü（ナーズム哀歌）」を作曲して発表し、のち世界中で歌われるようになる。アメリカではロック・フォークバンドのザ・バーズ（1966 年）、フォークバンド、ディス・モータル・コイル（1991 年）、歌手ピーター・シーガー（1999 年）によってカヴァーされた。日本では、

67　Alfred Bauman, Jiu Jitsu: kendi kendini müdafaa sanatı :bütün dünya orduları, spor klüpleri ve okulları tarfından ders programlarına kabul edilen meşhur Japon oyunlarının incelikleri ve tatbik şekilleri, Güven Yayınevi, İstanbul, 1945, 63s. resimli.

68　Şeref Karapınar, Japonya İkinci Dünya Harbine Nasıl Girdi, Deniz Kuvvetleri Komutanlığı, Anlara, 1954.

69　Fahir H. Armaoğlu, Amerikan Japon Münasebetinin on yılı, 1931–1941, Ankara Üniversitesi Siyasal Bilgiler Fakültesi, Ankara Üniversitesi Siyasal Bilgiler Fakültesi Yayınları, 1956, IX, 242s.

70　Ruth Benedict, (çev.) Türkân Turgut, Krizentem ve Kılıç, Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, Ankara, 1966.

元ちとせ（2006年）、高石友也（1967年）などが歌っており、映画『キャタピラー』（若松孝二監督、2010年）の主題歌にもなった。ナーズム・ヒクメットによる原詩は、被曝の10年後に少女のまま亡くなった佐々木禎子に触発されたとされる。直接の日本研究ではないが、トルコにおける日本関連の活動として、おそらく現在までに最も大きな影響力のあったものと言える。この文脈で、長田新『原爆の子――広島の少年少女の訴え』が、アラアッティン・ビルギ（Alaattin Bilgi）によってトルコ語訳され、『Atom Bombası Çocukları』[71] として1968年に出版されている。

1960年代以降、川端康成、三島由紀夫など日本文学の翻訳本の出版が目立つ。これは川端康成のノーベル文学賞受賞（1968年）を受けてのことだが、英語やフランス語版からの重訳で、文学において日本語からの直接訳の登場は1990年代頃まで待つことになる。それ以前にも、L. Sami Akalın による翻訳で『Japon şiiri tarih ve antoloji（日本の詩歌選集）』[72]、ソンメズ・カトマン（Sönmez Katman）による翻訳で日本・中国・インドの文学選集である『Kokinshu（古今集）』（1965年）[73]、外交官のユルマズ・チョルパンによる演劇についての著作『日本の演劇 中国の演劇』（1964年）[74] がある。

チョルパンの著作の表題は、子供でも知っているトルコの古い語呂合わせで、性関係の暗喩に使われる「Çin işi Japon işi（中国細工、日本細工）」の語呂を踏まえたもので、日本はトルコ人にとって、オリエンタリズムの対象として性的なユートピアとして見られる一面もあった。その文脈の著作として、ギュネル・アルトゥンタシュ『Çin işi Japon işi: Erotik şiirler（中国細工、日本細工：エロティック詩集）』（1974年）[75] があり、最近ではこれを文化人類学的に分析したタイフン・アタイの著作『Çin işi Japon işi: Cinsiyet ve Cinsellik Üzerine Antropolojik Değiniler（中国細工、日本細工：性と性関係についての語呂合わせの

71　Arata Osada, Alaattin Bilgi (çev.), Atom Bombası Çocukları, Sol, Ankara, 1868.

72　(Yazar Adı yok), L. Sami Akalın (çev.), Japon şiiri tarih ve antoloji, Varlık Yayınevi, İstanbul, 1962.

73　Ki, Tsurayuki, Sönmez Kantman, Kokinshu: Japon, Çin ve Hint Edebiyatı ile bir Çevir Denemesi, Yenilik Basımevi, İstanbul, 1965.

74　Yılmaz Çorpan (der.), Japon Tiyatrosu Çin Tiyatrosu, İzlem Yayınları, İstanbul, 1864.

75　Günel Altıntaş, Çin işi Japon işi: Erotik şiirler, Seçme Kitaplar, İstanbul, 1976.

人類学)』(2012年)[76]が出ている。

日本の高度成長期以降の発展をトルコ近代化の例とする傾向の著作は1960年代にも見られる。オカ・マサヨシ(岡正芳?)他による『日本の復興とトルコ』[77]が文学者・詩人・批評家・出版人のフェティ・ナジ(Fethi Naci)によって翻訳されている。タイヤール・サードゥックラール(Tayyar Sadıklar)による『発展の途上における日本の例とトルコ』(1971年)[78]、高度成長に伴う日本の都市化ついての先駆的な研究として、アスマン・チェジック『日本における都市化と構造変化』(1973年)[79]が政府機関の国家計画組織から出ている。

日本研究ではないが、日本に関してトルコの社会一般に多大な影響を与えたものとして、アメリカのテレビドラマ『将軍』(1980年9月15日〜9月19日)が挙げられる。ジェームズ・クラベルによる小説をテレビドラマ化したもので、三船敏郎や島田陽子が出演し、日本でも同年劇場版が公開、1981年にテレビドラマが放映された。トルコでも、1980年クーデタ後の軍事政権でテレビに1チャンネルしかなかった時代に放映された。本作の影響力は絶大で、トルコの一般大衆の日本イメージはこのドラマによって形成されていると言っても過言ではない。

1980年代には、老舗新聞『ジュムフリエット(共和国)』の主筆で政治犯として何度も投獄・拷問された知識人、イルハン・セルチュク(İlhan Selçuk, 1925–2010)が出所後発表したエッセイのタイトルが『Japon Gülü(日本の薔薇)』(1988年)で、当時の知識人の困難な状況を、冬の厳しさ、寒さにじっと耐えて最後に花を咲かせる「日本の薔薇」に例え、トルコの「日本の薔薇」は、どこにいるのか?と呼びかけている。この文脈で「日本」は、困難にじっと耐える存在、最後まで希望を失わないものの隠喩として使われている。ちなみに、トルコ語でJapongülüとは一般的に芙蓉のことを指すが、ここでは、冬の寒さに

---

76 Tayfun Atay, Çin işi Japon işi: Cinsiyet ve Cinsellik Üzerine Antropolojik Değiniler, İletişim, İstanbul, 2012.

77 Oka Masayoshi, L. Perceval, (çev.) Fathi Naci, Japon Kalkınması ve Türkiye, Gerçek Yayınevi, İstanbul, 1966.

78 Tayyar Sadıklar, Kalkınma Yolunda Japon Örneği ve Türkiye, Ayyıldız Matbaası, Ankara, 1971.

79 Asuman Çezik, Japonya'da kentleşme ve yapısal değişme, Devlet Planlama Teşkilatı, Ankara, 1973.

耐えるという特徴から、しばしば同じ名で呼ばれる木瓜（ぼけ）の花を指すものと思われる。

8. 本格的日本研究の登場——1980年代以降

以上のような文脈と並行して、学界では、日本についての本格的な研究が始動する。1976年には、日土婦人友好文化協会がトルコで最初の日本語講座を開講、1978年アンカラ大学中国語学科で選択科目として日本語が開講、1986年、アンカラ大学にトルコで初めて日本語日本文学科が開設された。80年代には、イスタンブルのボアジチ大学、アンカラの中東工科大学にも選択科目として日本語が開講した。このころから、学術的な意味で日本研究を専門とする専門家が登場し始める。

最初期の日本研究者として、アンカラ大学日本語学科設立に寄与したプラット・オトカン（Pulat Otkan, 1942–2014; 中国学）、同大学の ボズクルト・ギュヴェンチ（Bozkurt Güvenç; 人類学）、人文科学の分野でトルコ人として初めて京都大学で博士号を取得した中東工科大学のメテ・トゥンジョク（Mete Tuncoku; 経済学）、ボアジチ大学のセルチュク・エセンベル（Selçuk Esenbel; 日本史）が挙げられる。

現代では、言語学、歴史、文学などの分野で研究者の活躍が盛んである。言語学ではアイシェ・ヌル・テクメン（Ayşe Nur Tekmen; アンカラ大学）、アイシェギュル・アタイ（Ayşegül Atay; エルジエス大学）、アイドゥン・オズベッキ（Özbek Aydın; チャナッカレ大学）、ナゲハン・アヴダン（Nagehan Avdan; アンカラ大学）などがいる。

文学では、万葉集・紫式部日記の現代トルコ語への翻訳者であるエシン・エセン（Esin Esen; アンカラ大学）、芥川龍之介など日本近代文学研究のオウズ・バイカラ（Oğuz Baykara; ボアジチ大学）、夏目漱石研究のハビーベ・サルアール（Habibe Salğar; アンカラ大学）、大江健三郎研究のヌーライ・アクデミル（Nuray Akdemir; アンカラ社会科学大学）、現代文学研究で村上春樹の翻訳者アリ・ヴォルカン・エルデミル（Ali Volkan Erdemir; エルジエス大学）、トルコ文学史における日本語を研究するエミネ・シジム・カプラン（Emine Sicim Kaplan; セルチュク大学）などがいる。

政治・経済では日土の比較研究をするイブラヒム・オズトゥルク（İbrahim Öztürk; マルマラ大学）、バハドゥル・ペフリヴァントゥルク（Bahadır

Pehlivantürk; トルコ経済技術大学)、戦前戦後の日本の経済政策研究のアリ・アクケミック（K.Ali Akkemik; カディル・ハス大学)。

数少ない哲学研究者として、西田幾多郎・京都学派研究のイブラヒム・ソネル・オズデミル（İbrahim Soner Özdemir)。

社会学では日本とトルコの比較研究のバシャック・コジャ・オゼル（Başak Koca Özer; アンカラ大学)、テレビドラマ研究のジェレン・アクソイ・スギヤマ（Ceren Aksoy Sugiyama; アンカラ大学)。

考古学では日土の頭蓋骨比較研究のイスマイル・オゼル（İsmail Özer; アンカラ大学)、和歌山県串本沖に沈没した軍艦エルトゥールル号の海中発掘のトゥファン・トゥーランル（Tufan Turanlı; ボドルム文化芸術財団）などがいる。

歴史学では、明治期から第二次世界大戦までの近代史研究が盛んである。長年日本研究を手がけ、トルコにおけるまとめ役とも言える存在のセルチュク・エセンベル（ボアジチ大学)、日本とトルコの言語政策研究のギュルデミル・オズレンク・アイドゥン（Gülzemin Özrenk Aydın; 通訳、トルコ言語研究所)、福沢諭吉研究のシェイマ・ナルバント・アイハン（Şeyma Nalbant Ayhan; アンカラ大学)、大谷光瑞研究のエルダル・クチュックヤルチン（Erdal Küçükyalçın; ボアジチ大学)、日露戦争から戦間期にかけて精力的に著作のあるメルトハン・デュンダル（Merthan Dündar; アンカラ大学)、トルコ文学における日本への関心を研究するバフリエ・チェリ（Bahriye Çeri）などの研究がある。

最後に、美術史学で、日本人だがトルコを拠点とする筆者ジラルデッリ青木美由紀（Miyuki Aoki Girardelli; イスタンブル工科大学）も、オスマン宮廷の日本趣味研究で「トルコにおける日本研究」の末席に名を連ねることとする。

おわりに

以上、オスマン帝国時代から現代までを概観すると、特にこの 20 年ほど、インターネットの発達とともにトルコにおける日本研究は長足の進歩を遂げていることがわかる。研究内容も、単なる文化の紹介やトルコ国内啓蒙向けの内容から、より専門的で国際的レベルでの研究へと変貌した。特に若い世代の研究者たちは、日本一国の研究にとどまらず、よりグローバルな視点から研究を発展させている点に注目できる。

大学間の交換留学やトルコ経済の向上、航空運賃の値下げなどのおかげで、学生のレベルでも、日本に実際に行ってから興味を持つ者、日本へ留学する学

生の数も増え、間口は広がっている。近年では、若い世代の日本への興味は、インターネットゲーム、アニメや漫画などの影響が大きい。しかし、中国語や韓国語に押され、日本語講座が閉鎖された大学もある。また、現在の日本研究全体を俯瞰（ふかん）すると、歴史学も含めて、研究テーマが近・現代に偏重しており、一人を除いて、古代・中世の研究者がほとんどいない点は、これからの課題と言える。

日本とトルコは多くの点で類似しており、比較研究も盛んだが、近年のグローバリゼーションの流れは、一国研究、一国対一国の比較研究に止まらない新たな視点を必要としているように思われる。今後の発展に期待したい。

（じらるでっり あおき みゆき　トルコ・イスタンブル工科大学 准教授補）

高麗大学校の日本研究の現況と課題
――国際研究交流と国際学術誌を中心として――

鄭　炳浩

はじめに――韓国における日本教育と研究の現状

1945年、韓国が日本の植民地から解放されて以降1965年に日本と国交が正常化されるまで、両国の外交的・文化的・人的交流は言うまでもなく、韓国における日本研究もほぼ空白期に近かったと言わざるを得ない。

韓国における日本関連教育と研究は1961年に初めて日本語科（韓国外国語大学校）が設置されてから公式化したという議論もあるが、この時期の日本教育は実用的言語知識の習得に重点が置かれていた。この意味で、韓国の日本研究は1972年に韓国日本学会、1978年に韓国日語日文学会が設立されてから本格的に軌道に乗ったといえる。一方、1980年代に入るとソウルの高麗大・中央大・漢陽大、地方の釜山大・慶北大・全南大・全北大を含め韓国の多くの大学に日語日文学科が開設され日本教育の底辺拡大とともにその研究の成長期を迎えるようになる。

とりわけ、1990年代には韓国に多くの日本関連学会が新たに設立されており、日本で留学を終えて帰国した日本研究者の数が漸増し韓国の日本研究論文の数量も飛躍的に増加する。韓国では1998年度から韓国研究財団が論文引用索引（KCI）の登載制度を設けている。日本学関係の学会誌としては韓国日本学会の『日本学報』が2002年度に初めて登載誌になって以来現在に至るまで、日本関連学会や大学の日本関連研究所で刊行する20種以上の学術誌が登載誌もしくは登載候補誌となっている。このうち日本の歴史、政治・経済、日本語教育を専門とする3、4つの雑誌以外に、ほとんどの学術誌は日本政治・経済・歴史・思想・文学・語学・文化など日本研究全般を対象としている。この中で2、3の学会を除けばそのほとんどが1990年代に入り創立されたもので、韓国における日本研究が1990年代からいかに活発化したのかがうかがえる。

また、韓国における日本文学研究と関連して注目すべきところとして、様々な大学の日本関連研究所が挙げられるが、この研究所も中央大学日本研究所（1979）、東国大学日本学研究所（1979）を除くとそのほとんどが1990年代ある

いは2000年代に設立された。この日本関連研究所の場合もそのほとんどが日本関連学術誌を刊行しているが、その中でも高麗大学グローバル日本研究院、ソウル大学日本研究所、翰林大学日本研究所は韓国研究財団が研究所育成を目的とした大型プロジェクトを行っており、もっとも活発だといえる。

以上の日本教育・研究機関の概況からわかるように、韓国の日本文学研究も1960、70年代から大学の日本関連学科の設置と学会の設立に伴って徐々に制度化の過程を経て定着した。1980年代に入ると日本研究のための様々な環境が整って日本研究も安定の軌道に乗り、1990年代からは量質ともに飛躍的に発展したといえる[1]。

1. 高麗大学校における日本教育及び研究機関の設立と現況

このような環境の中でも、韓国で比較的に歴史が長く規模の大きいソウル大学校、延世大学校、梨花女子大学校、成均館大学校などには日本関連学科が設けられていない。近代期における日韓の特殊な関係など様々な理由から、いわゆるソウル地域の主要大学と言われるこれらの大学には日本関連の学科が設置されずに、ソウル大学のみに国際大学院に日本研究所が設置されている。その中でも高麗大学校には比較的早い時期である1983年度に日語日文学科が開設されており、大学院の修士・博士課程や日本語教師養成の特殊大学院である教育大学院に日語専攻も設置されている。高麗大学校には日語日文学科が設置された文科大学だけではなく、政経大学、師範大学、国際学部や研究機関であるグローバル日本研究院と亜細亜問題研究所でも日本学を専門とする専任教授が教育や研究に携わっている。

その中でも日本関連教育は主に日語日文学科が担当しており、この学科では単に日本語学や文学だけではなく、日本政治や経済、歴史、文化なども教育している。高麗大学校の国際的研究交流は日本の様々な大学、台湾大学と結んでいる学部生の交換学生制度を除けば、主に大学院の中日語文学科（日本語学・日本語教育専攻、日本文学・文化専攻、中国語学専攻、中国文学専攻、中日比較文化専攻から構成）とBK21Plus中・日言語文化教育・研究事業団を中心に実施されている。まず、中日語文学科はドイツのボン大学、日本の筑波大学と3大学によるTEACH（Transnational European and East Asian Culture and History）プログ

1　鄭炳浩「韓国の日本近現代文学研究と課題」『日本学報』第91輯、2012.5、pp. 35–43参照。

ラムを運営しているが、このプログラムは修士課程2年の中で1年は高麗大学校で外の1年はボン大学と筑波大学で半年ずつ修学し、共同学位を獲得する制度である。

一方、BK21Plus中・日言語文化教育・研究事業団は2006年度に大学院日語日文学科と中語中文学科が合併して中・日語文学科となり、この学科が運営しているプロジェクト事業団である。BK（Brain Korea）21事業は1999年から韓国の教育部が実施する大学院生育成の大型プロジェクトとして、基本的には7年間の事業としてデザインされているが、高麗大学校の中・日語文学科は事業の2期目（2006–2013）からこのプロジェクトに選抜され現在3期目の事業（2013–2020）を営んでいるところである。この事業で大学院生には奨学金と短期・長期の海外研修、国内外の学会参加などを支援しているが、このようなプロジェクトをとおして多くの国際学術交流を行う機会を作り出している。たとえば、中国の北京日本学研究センター、台湾の政治大学日語系、筑波大学とともに11年に渡って毎年定期的な「東アジアの次世代日本研究フォーラム」を開催しているが、このフォーラムでは東アジア三つの地域を巡回し所属教員のシンポジウムと院生の共同発表会を開いている。また、2015年からは立命館大学及び中国／台湾の大学と「ソウル－京都 東アジア次世代研究フォーラム」をも京都とソウルを行き来しながら毎年開いているが、このフォーラムは単に日本学のみならず中国学や韓国学をも含めてこの地域における東アジア研究の交流を目指している。2015年には早稲田大学文学部とも研究交流協定を結んで集中講義やワークショップを開いている。博士課程の院生には日本の様々な大学に訪問研究員として半年から1年間現地で研究する機会をも与えている。

このように国際研究交流は日本を含めて東アジアの様々な地域の研究者と交流を深め、また大学院生が自分の研究テーマをめぐって海外の研究者と議論できる経験が積めるという意味で、ひいてはあえて留学に行かなくても海外の大学で修学しまた学位の取得も可能になるという意味で、所属の大学院生に学問的に非常に大きな刺激を与えていると評価される。

2. 研究機関としての「グローバル日本研究院」の活動

高麗大学校には、このような学科とは別に「グローバル日本研究院」が1998年度に附設されて以来、高麗大学校の日本研究機関としてその役割を果たしている。この機関は1998年度に「日本学研究所」として創立されたが、2007年

度には韓国では初めて日本関連研究所の専用建物である青山・MK 文化館が竣工し、研究所名も「日本研究センター」へと拡大改編した。このような過程で同じく 2007 年度に韓国の政府の研究所育成の大型プロジェクトである「HK 海外地域事業団」に選定された。一方、この事業を行う過程でよりグローバルな眼差しから日本を研究する必要が生じ、2015 年度に「グローバル日本研究院」へと改名され今に至っている。この研究機関の主な活動や業績を示すと次の通りである。

(1)「HK 海外地域事業」の実施

HK（Humanities Korea：人文韓国）事業は、人文学の危機が頻繁に議論されつつあった 2000 年代半ばに韓国社会における人文学の衰弱という現状を打開し人文学研究に活気を取り戻すために、2007 年度から始まった研究所向けの大型プロジェクトである。韓国の日本関連研究所としては初めて2007年に選定されたこの HK 事業は、研究所が一定の研究アジェンダを設定し、共同研究の遂行、専任教授を初め研究人力の養成、国際的学術交流、社会一般への人文学の普及、叢書刊行などを推進する 10 年間のプロジェクトである。高麗大の「グローバル日本研究院」は「日本研究の世界的拠点構築」というアジェンダを通して、国際的なネットワーク作り、共同研究、日本叢書刊行などの事業を行ってきた。韓国には今まで研究所に専任教授を採用する制度がなかったが、このプロジェクトをとおして研究院には現在 5 人の専任教授が所属しそれぞれ活動している。

(2) HK 事業の成果を担う「研究センター」の設置

グローバル日本研究院は、HK 事業を通してそれぞれの分野別に得られた成果に基づき、2015 に四つの研究センターを設けている。日本文学・文化研究者から構成された「日本語文学・文化研究センター」、日本語学・日本語教育研究者から構成された「グローバル言語政策研究センター」、日本歴史思想研究者から構成された「東アジア平和センター」、日本政治・経済・文化研究者から構成された「社会災難・安全研究センター」である。これらの研究センターでは研究院の専任教授と高麗大における日本研究者が共同研究を行い、また様々な研究プロジェクトを遂行している。この外にもグローバル日本研究院は「日本翻訳院」や「情報資料院」という組織をも設けて、外国学研究や紹介に重要な役

割をもつ翻訳事業や図書館運営、資料のデジタル化などを進めている。

(3) 日本学関連学術誌と日本研究叢書の刊行

グローバル日本研究院がHK事業を実施しながらもっとも力を入れた領域は、共同研究と日本研究叢書の刊行である。2006年から始まったこの叢書刊行事業は、日本研究と関わる研究書である「日本学叢書」、日本の名作や主な文学・文化分野の著作を翻訳した「日本名作叢書」、日本研究と関わる基礎資料集である「日本資料叢書」、現代日本の政治・経済・歴史に関する「現代日本叢書」、日本関連事典刊行事業である。この叢書刊行事業は日本の様々な分野を扱い、現時点で300冊以上が刊行されており、研究者のみならず一般読者にも成果を発信している。

また、この叢書以外に韓国学術誌引用索引（KCI）の登載雑誌である査読誌『日本研究』という学術誌を年2回刊行しており、国際誌として『跨境――日本語文学研究』も2014年から定期的に刊行しているが、この学術誌については後で詳しく説明する。

(4) 日本研究デジタル・アーカイブの運営

高麗大学校グローバル日本研究院では、日本専攻の研究者は言うまでもなく、一般人も日本や日本研究と関わる資料と情報を容易く閲覧できるデジタル・アーカイブを構築してきた。日本研究院では膨大なDB検索システムを設けて、約5万件に及ぶ植民地期の朝鮮半島と中国旧満州地域で刊行された日本語文献の全目録、所蔵先やその書誌情報を提供しており、著作権解除済みの原文資料も2642件（約4000枚）を公開している。また、日本研究院で刊行した日本学叢書、現代日本叢書、日本名作叢書、資料叢書などの単行本の目次も公開しており、グローバル日本研究院が刊行する国内専門学術誌『日本研究』、国際専門学術誌『跨境――日本語文学研究』の成果も公開し、その研究内容を世界に向けて発信している。また文字資料に限らず、グローバル日本研究院が実施する特別講演会、コロキウムにおける講演者の講演内容の記録や写真などをもアーカイブに公開し日本研究の普及に努めている。

(5) 日本研究プロジェクトの実施

グローバル日本研究院は、2007年下半期にHK事業の中で唯一の日本研究事

業団に選定され、以後「世界的な日本研究の拠点構築」を目標に多様な共同研究を推進してきた。この事業以後もグローバル日本研究のそれぞれの研究センターでは様々な形の研究プロジェクトを遂行している。例えば、植民地時代朝鮮半島と旧満州地域の日本語文献・資料の目録・目次構築事業、朝鮮半島と旧満州地域の日本伝統詩歌資料集刊行事業、在朝日本人情報人物事典刊行事業、朝鮮総督府機関紙『京城日報』のデータベース構築事業、東アジアにおける災難叙事研究、民間刊行日本語新聞の文学資料目録化事業などがそれにあたる。

3. 国際誌『跨境――日本語文学研究』の刊行とその意義

高麗大グローバル日本研究院の中で、日本語文学・文化研究センターは2014年から「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」とともに、国際誌『跨境――日本語文学研究』（*Border Crossings: The Journal of Japanese-Language Literature Studies*）を刊行している。この雑誌は2014年6月に創刊され、2019年末までに第9号が刊行されており、本文言語は主に日本語で、要旨文は英語の形を取る、年2回刊行する国際査読学術誌である。

(1)「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」の創立と定期的な国際的学術交流

一方、この学術誌を共同で刊行する「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」は日本研究院の提案により日本、中国、台湾、韓国など東アジア地域の日本文学研究者が2年あまりの議論をとおして設立した学術団体である。このフォーラムは「東アジアという視座を持つ、韓国・中国・台湾・日本・香港の日本研究者が集まり、それぞれの国における日本近代文学体験の特殊性及び歴史性を互いに比較しながら研究の地平を拡げ、日本近代文学を東アジアの観点から再構築する企画」であり、「政治、経済、歴史、文化などの分野において、相互に密接な交渉関係を有している」東アジア地域で、「一国中心の国文学研究」を乗り越えて、基本的には「開かれた連帯としての東アジアにおける疎通を促す」（このフォーラムの創立趣旨文）という考え方に基づいている。

このフォーラムは2013年10月ソウルの高麗大学校で「東アジアにおける雑誌の流通と植民地文学」をテーマとした創立大会を開いて以後、第2回「大衆化社会と日本文学」（中国北京師範大学、2014年10月）、第3回「翻訳文化と日本文学」（台湾・輔仁大学、2015年11月）、第4回「集団の記憶、個人の記憶」（日本・名古屋大学、2016年10月）、第5回「言語圏とディアスポラ文学」（韓国・高

麗大学、東国大学、2017年10月)、第6回「「レンタル」と東アジア近現代文化」(中国・上海復旦大学、2018年10月)国際学術大会をそれぞれ開催しており、2019年10月には第7回大会を台湾の政治大学と東呉大学で「海洋文化と東アジア文化」というテーマで開催した。

このように、このフォーラムは一定のテーマを決め、日本、韓国、中国、台湾を毎年巡回しながら国際学術大会を開催するだけではなく、東アジアの大学院生を中心とした若手研究者フォーラムも同時に設け、東アジアの次世代日本研究者を共に育成していくことにも気を配っている。これ以後はさらに視野を広げて2020年の第8回フォーラムはインドネシアで、2021年の第9回フォーラムはオーストラリアで開催し、このフォーラムを単に東アジア地域にとどまらず、アジア・太平洋地域へと広げていくことを目指している。

(2) 国際誌『跨境――日本語文学研究』の創刊

この「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」が創立された際、問題意識の一つは、いかにして東アジアの日本文学研究者が持続的な学術交流を続けるかであった。この地域において日本研究の分野でも学術交流がかなり増えており様々なかたちの学術大会が頻繁に開催されていることも事実である。しかし、その交流は一回性の学術発表会にとどまる場合がほとんどであり、素晴らしい問題意識のある内容があってもそれを外部に向けて発信するケースは極めて稀であった。「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」もそのような形になれば、せっかく軌道に乗ったその試みもどこまで持続できるのかは相当疑問であった。当初、そのフォーラムで発表されたものを単行本や論文集の形で出版しようという議論もあったが、地域別に事情が異なるので多少無理だということが分かった。

そこで、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」を通して持続的な学術交流を活性化させ、またその成果を東アジア地域、ひいては世界各地の日本研究者に発信するため、このフォーラムと高麗大グローバル日本研究院はこの分野初めての国際査読誌である『跨境――日本語文学研究』を刊行することになったのである。

『跨境――日本語文学研究』は編集委員と査読委員から構成されているが、このメンバーには日本、中国、台湾、韓国など東アジア研究者は勿論、アメリカ・ドイツ・フランス、オーストラリア、イギリス、カナダなど欧米の日本研究者、

インドネシアなど東南アジアの日本研究者、ブラジルなど南米の日本研究者が参加し、編集・査読を共同で進行させている。特に、この学術誌は専用のウェブサイトを構築してその内容を公開しており、また雑誌は日本の笠間書院をとおして委託販売されている。

韓国の場合は韓国内の学術誌が韓国学術誌引用索引システム（KCI）登載制度を実施しており、また大学もこのシステムを積極的に受け入れて大学の業績評価に利用している。このため、このシステムに登載されていない学術誌の論文は主な評価から排除される。海外の学術誌は人文学の場合アメリカのClarivate Analyticsが構築した国際学術論文引用索引データベースであるA&HCI（Arts and Humanities Citation Index）やElsevier出版社の国際誌引用索引データベース、Scopusに登載されたもののみ、業績評価の主な対象となる。このような現象は中国や台湾でも同様のようである。そのため、グローバル日本研究院でも『跨境――日本語文学研究』がそのような現状に対応できるように、英語論文でなくてもインデックスできるScopusに登載するための様々な努力をしているところである。

結論――これからの課題

韓国では2010年代から日本関連学科の人気が急速に下落している。勿論、人文学関連学科の人気の低迷は最近になって浮上した現象でもないが、その中でも最近数年間韓国における「日語日文学科」の人気下落は著しかったと言わざるを得ない。1980年代から2000年代まで韓国の日本教育機関と研究機関が著しく拡大したことを振り返ってみればまさに隔世の感がある現象である。

このような影響もあって、韓国には最近どの分野をも問わずに日本研究を目指す大学院生の数が減っており、大学院に入っても以前のように日本に留学に行こうとはしない。この現象は韓国の大学院教育がある程度充実したという事実を表すことでもあるが、前で見たように韓国の大学が評価する主な研究業績の中に日本の学術誌が入っていないという事情とも関係がある。

このような意味で、韓国の日本教育と研究は以前よりも国際的学術交流がもっと重要となるといえる。大学院生は日本などに短期・長期研修の機会を模索し、この機関で研究のための十分な資料を集める必要があり、または国際的学会や共同発表会に参加し様々な地域の研究者と討論する過程で自分の研究の立脚点を確かめる必要がある。また、最近韓国における日本学の人気が落ちたと

しても、同じ東アジアの隣国としてその研究の必要性や需要がこれからも続くというのは当然のことである。韓国の日本学分野では2000年代以後日本を含めて、東アジア、あるいは世界の様々な地域と国際的交流が非常に増えてきた。これからはこのような国際交流を単発的な行事で終えずに、いかにして持続的な交流へと繋げるかが非常に重要だと考えられる。このような国際交流に次世代研究者の軸である大学院生をも交えて、持続的な交流を増やすことで上記の問題もある程度乗り越えていけるであろう。

（チョン ビョンホ　韓国・高麗大学校日語日文学科 教授）

韓国における大学の「日本研究所」の現状と課題

金　容儀

1. はじめに

韓国は、日本と隣り合っているということもあって、日本研究者も少なくなく「日本研究」がかなり盛んな状況にある。韓国における「日本研究」の現状については、これまで韓国や日本で出された研究機関の紀要や学会誌に様々な形で報告された。例えば国際日本文化研究センターから出版されている『世界の日本研究』には、韓国人の研究者によって多様な分野やジャンルが取り上げられ、数度にわたって報告されたこともある[1]。

しかし、それらの報告では、韓国の大学に設立された「日本学科」[2]や日本研究者の学術活動の拠点としての「日本学会」[3]だけが取り上げられてきた。大学に設立された「日本研究所」[4]が注目されたことはほとんどない。

1　例えば、次のような報告がある。李応寿「韓国における日語日文学関連学会の現状と問題点」『世界の日本研究 2001――コリアにおける日本研究の現在』2002 年、29–38 頁。金己大「近現代の日本と朝鮮の比較研究・若干の考察――コリアにおける日本研究の原点について」『世界の日本研究 2001』、39–79 頁。趙寛子「1990 年代以降の韓国の日本研究――制度と視線の変化」『世界の日本研究――日本研究の新しい動向』2013 年、43–58 頁。張寅性「ソウル大学の日本研究――「人文韓国支援事業」(2008–2018 年）の研究成果を中心に 1」『アジアの日本研究』17、2017 年、195–203 頁。

2　大学によって「日本学科」、「日語日文学科」、「日本文化学科」、「日本言語文化学科」など、様々な名称が使われている。便宜上、ここではまとめて「日本学科」と呼ぶことにしたい。

3　筆者の調査によると、現在韓国には次のような「日本学会」がある。便宜上、ここではまとめて「日本学会」と呼ぶ。韓国日語日文学会、韓国日本学会、大韓日語日文学会、東アジア日本学会、日本史学会、韓国日本語文学会、韓国日本近代学会、韓国日本文化学会、韓国日本思想史学会、韓国日本語教育学会、日本語文学会、韓国日本語学会、韓国日本言語文化学会、現代日本学会、韓国日語教育学会（全部で 15 学会)。

4　研究所の名称には「日本研究所」、「日本学研究所」、「日本研究センター」、「日本文化研究センター」などが使われている。ここではまとめて「日本研究所」と呼ぶ。

筆者は、これからの韓国における「日本研究」の成果は、「日本研究所」の活性化によって左右されるだろうと見込んでいる。「日本研究」が成果をあげ、蓄積されていくためには、「日本研究所」の役割がますます重要になる。なぜなら、研究環境の変化と専門性の欠如に伴い、これまで「日本研究」の主軸を担ってきた「日本学科」や「日本学会」における研究の蓄積が今後は容易に期待できないと思われるからである。

2011 年の東日本大震災以降、韓国における「大学の危機」という国内事情とも絡んで、大学の「日本学科」には厳しい状況が続いている。そのため、学科の廃止や縮小あるいは学科の名称の変更を余儀なくされた大学も多数存在し、今もそのような状況が続いている。

また「日本学会」は、15 もの学会があるにもかかわらず、多くの学会が主に日本語、日本文学、日本学（日本語と日本文学を除いた分野という意味で使われることが多い）という、三つの分野の研究者の「寄せ集め」のような形で運営され、あえて言うなら「日本学会」としての専門性に欠けている場合が多い。要するに、ある特定のテーマやトピックに限定した、本格的な議論の場を設けるのがなかなか難しい状況にある。

このような現状を考慮すると、今後の韓国の「日本研究」において「日本研究所」が担うべき役割はますます大きくなり、「日本研究所」の活性化が必要になってくるものと思われる。つまり「日本研究所」の活性化は、韓国における「日本研究」活性化の方法でもある。

本稿では、韓国における「日本研究」のあり方を模索するひとつの手がかりとして、韓国の大学に設立された「日本研究所」の現状と課題について考察したい。主に研究分野の特性化と集中化、専門的な研究資料の収集と集積、研究者同士のネットワークの構築、研究成果の拡散と社会的還元という四つの点を念頭に入れて論じることにする。

2. 韓国の大学に設立された「日本研究所」の現状

韓国における「日本研究」は、1980 年代に入ってから全国の大学に「日本学科」が設けられたことからはじまり、様々な「日本学会」が組織されるなど、特に量的な面で飛躍的に発展したと言えよう。この点に関しては、様々な統計資料から説明できる。例えば、研究者のための政府の支援機関である韓国研究

財団に登載された「日本学」についての学術誌は22種にものぼる[5]。これらの学術誌は、いわゆる「登載（候補）誌」と呼ばれ、韓国政府がその学術性を認めたものである[6]。発行機関は、主に「日本学会」や「日本研究所」である。

それでは、量的な面で飛躍的に発展したと見られる韓国の「日本研究」において、「日本研究所」はどのように位置づけられ、どのような役割を果たしているのか。この点を確認するために、まずそれぞれの研究所で出版されている学術誌と「研究叢書」[7]を中心に、その活動を検討することにしよう。「日本研究所」で行われた学術活動の成果は、最終的には学術誌や「研究叢書」の出版という形でまとめられるからである。

表1は、筆者が韓国の大学に設立された「日本研究所」を調査して、研究所の名称、設立年度、所属大学、学術誌の出版、主な学術活動などを示したものである[8]。

表1を見ると、韓国の大学には、合わせて13の大学に日本学研究所が設立されている。その活動があまり目立たない研究所は**表1**に含めなかったが、それでも合わせて13もの「日本研究所」が存在する。研究所が設立された順に並べると、日本研究所（中央大学校）、日本学研究所（東国大学校）、国際地域研究セ

5　筆者が確認した韓国の「日本学会」で刊行されている学術誌は以下のとおりである。『日語日文学』（大韓日語日文学会）、『日本文化研究』（東アジア日本学会）、『日本歴史研究』（日本史学会）、『日本語文学』（日本語文学会）、『日本近大学研究』（韓国日本近代学会）、『日本文化学報』（韓国日本文化学会）、『日本思想』（韓国日本思想史学会）、『日本語教育』（韓国日本語教育学会）、『日本語文学』（韓国日本語文学会）、『日本語学研究』（韓国日本語学会）、『日本言語文化』（韓国日本言語文化学会）、『日本学報』（韓国日本学会）、『日語日文学研究』（韓国日語日文学会）、『日本研究論叢』（現代日本学会）、『日本語教育研究』（韓国日語教育学会）。

6　「登載（候補）誌」のシステムについては、次の論文を参照のこと。趙寛子（2013）「1990年代以降の韓国の日本研究――制度と視線の変化」『世界の日本研究――日本研究の新しい動向』、47–50頁。

7　叢書の名称は、「日本研究所」によって、それぞれ「日本学叢書」、「日本研究叢書」、「学術叢書」などと異なっている。ここでは、まとめて「研究叢書」という名称を使用することにする。

8　調査方法は、主に研究所のホームページに掲載された資料を参考にした。研究所によってホームページの内容が充実したところとそうではないところがあった。また研究所から出される学術誌に掲載された「彙報」を参考にし、一部の研究所は電話を利用して設問調査を行った。

表１　韓国における大学の「日本研究所」の現状（筆者調査。2018 年現在、13 カ所）

研究所の名称	創設	所属大学	学術誌	創刊年度	主な学術活動 （学術叢書出版など）
日本研究所	1979	中央大学校	日本研究	1980	国内・国際シンポジウム
日本学研究所	1979	東国大学校	日本学	1981	国内・国際シンポジウム 研究叢書、翻訳叢書
国際地域研究センター 日本研究所	1990	韓国外国語大学校	日本研究	日本文化研究（1985）から変更	国内・国際シンポジウム 日本研究叢書
日本学研究所	1994	翰林大学校	翰林日本学	1996	国内・国際シンポジウム 翰林新書叢書、日本学研究叢書
日本研究センター	1999	高麗大学校	日本研究	2002	国内・国際シンポジウム 日本学叢書、日本名作叢書、現代日本叢書など
日本研究所	2000	釜山大学校	未刊	1982	日本学叢書、翻訳叢書
日本研究所	2002	壇国大学校	日本学研究	1997	国内・国際シンポジウム 日本研究所叢書
日本学研究所	2002	国民大学校	日本空間	2007	人文社会科学融合研究所、 国内・国際シンポジウム、 日本研究論叢
日本問題研究所	2002	明知大学校	未刊		1988 年に開始
日本研究所	2003	ソウル大学校	日本批評	2009	国内・国際シンポジウム 日本学研究叢書
日本研究センター	2003	東西大学校	次世代人文社会研究	2005	国内・国際シンポジウム、 韓日次世代学術フォーラム（2018 年、15 回）
日本文化研究センター	2004	全南大学校	未刊		国内・国際シンポジウム 研究センター叢書
日本学国際比較研究所	2009	漢陽大学校	比較日本学	2009	国内・国際シンポジウム

ンター日本研究所（韓国外国語大学校）、日本学研究所（翰林大学校）、日本研究センター（高麗大学校）、日本研究所（釜山大学校）、日本研究所（檀国大学校）、日本学研究所（国民大学校）、日本問題研究所（明知大学校）、日本研究所（ソウル大学校）、日本研究センター（東西大学校）、日本文化研究センター（全南大学

校)、日本学国際比較研究所（漢陽大学校）の順である[9]。

まず合わせて13もの「日本研究所」が設立されているのは、量的な面から考えてみると、決して少ないとはいえない。このことは例えば日本の大学に設立された「韓国研究所」の現状と比較してみるとすぐわかる。日本の大学には、現在7カ所に「韓国研究所」が設立されている[10]。単純に研究所の数に限って考えると、日本の「韓国研究」よりも韓国の「日本研究」のほうが、ニーズが多く盛んであると言えよう。

日本研究所が設立された年度を見ると、1970年代後半に2つ、1990年代に3つ、2000年以降に8つの研究所が設立されている。この点からすると、特に2000年代以降「日本研究所」の設立の必要性と「日本研究」のニーズが急増したことがわかる。「日本研究所」を、所在する地域によって分けるとソウルの大学に9つ、他の地域に4つで、ソウルに集中している。

また**表1**によると、多くの「日本研究所」が学術誌を出している。ほとんどの学術誌は、韓国研究財団に登載された「登載（候補）誌」である。中央大学校の『日本研究』、東國大学校の『日本学』、韓国外国語大学校の『日本研究』、翰林大学校の『翰林日本学』、高麗大学校の『日本研究』、檀国大学校の『日本学研究』、国民大学校の『日本空間』、ソウル大学校の『日本批評』、東西大学校の『次世代人文社会研究』、漢陽大学校の『比較日本学』である。

言うまでもないが、それぞれの研究所が刊行している学術誌は、研究者の研究活動のためのひとつの拠点として重要である。したがってほとんどの研究所から「登載（候補）誌」が出されていることは、非常に望ましいことと評価してもいいであろう。また今後も韓国研究財団に登載される学術誌はさらに増えることが予想される。

それらの学術誌の内容や特色について少し触れたい。それぞれの学術誌に掲載された論文を、テーマや内容を基準にして大別するならば、主に「日本語文

9　他にも、西江大学校東亜研究所、西京大学校韓日文化研究所、世宗大学校韓日古代語研究所、蔚山大学校の日本研究所、中央大学校の韓日文化研究院などがある。ここでは、調査の不備、活動有無の確認不可などの理由で、対象から除外した。

10　列挙すると次のようになる。九州大学韓国研究センター、立命館大学コリア研究センター、静岡県立大学現代韓国朝鮮研究センター、早稲田大学現代韓国研究所、早稲田大学現代朝鮮文化研究所、京都大学朝鮮韓国学教育ネットワークである。また2010年6月に東京大学に現代韓国研究センターが設立されている。

学」についてのものと、そうではないものという、ふたつに分けて考えることができる[11]。

前者の場合は、主に2000年以前に設立された日本研究所の学術誌に著しくみられる傾向である。例えば中央大学校の『日本研究』、韓国外国語大学校国際地域研究センター日本研究所の『日本研究』、高麗大学校日本研究センターの『日本研究』があげられる[12]。これは、韓国の大学における日本研究と日本教育が長い間、「日本語文学」を中心に据えて、展開されてきたことに因る。つまり少なくとも 1990 年代までの日本関連学科は、そのほとんどが「日語日本学科」という名称で開設され、「日本語文学」を中心に研究と教育が進められてきたのである。現在から振り返ってみると、それは一種の学問的な偏向であり、ある意味「異常」であったとも言える。

後者の場合は、主に 2000 年代以降設立された「日本研究所」の学術誌に見られる現象である。これは、2000 年代以降に設立されたいくつかの日本研究所が、既存の日本語文学を中心に据えた日本研究の偏向性を批判的に受け入れ、意識的にその限界を克服しようと努めた結果である。例えば 国民大学校日本研究所の『日本空間』は、「人文社会科学融合型研究所」を標榜していることからもうかがえるように、学術誌に掲載された論文のテーマと内容が人文社会科学のほとんどの分野を網羅している[13]。またソウル大学校日本研究所の『日本批評』には、日本語文学についての研究があまり見られない。そして 東西大学校日本研究センターの『次世代人文社会研究』の場合は、様々な分野の次世代を担う韓国と日本の若手研究者に多くの紙面を提供している。

日本研究所の学術活動において、学術誌に次いで重要なのは「研究叢書」であろう。学術誌の傾向からもうかがえるが、「研究叢書」の目録には、その研究所が志向する研究方向などがよく表れている。それぞれの日本研究所が主催した様々な学術大会や学術集談会、共同研究、講演会、翻訳などの成果が研究叢

11　本稿では便宜上、大まかに「日本語文学」中心の学術誌とそうでない学術誌に区分した。学術誌の内容に関しては、研究者の専門分野、論文のテーマ、企画特集によって、具体的な統計を確認してみる必要がある。これに関しては、別の機会に確認したい。

12　高麗大学校日本研究センターの『日本研究』の場合は、最近「日本語文学」だけではなく、「日本学」についての論文が増える傾向を示している。

13　例えば、2007 年に刊行された創刊号では企画特集として「日本の経済回生」というテーマを取り上げた。掲載されたほとんどの論文は社会科学分野のものである。

書にまとめられている。

それらの「研究叢書」のなかから、いくつか紹介してみよう。東国大学校は「研究叢書」・「翻訳叢書」、韓国外国語大学校は「日本研究叢書」、翰林大学校は「日本学叢書」・「日本学研究叢書」などを刊行している。高麗大学校は「日本学叢書」・「日本の名作叢書」・「現代日本叢書」というように、3種類に分けて叢書を刊行している。檀国大学校は「学術叢書」、国民大学校は「日本学叢書」、ソウル大学校は「日本学叢書」、全南大学校は「日本文化研究センター叢書」を刊行している。

それでは、それぞれの日本研究所から刊行されている「研究叢書」は、韓国の日本研究者の間でどのように受け入れられ、またどのように評価されているのであろうか。一律に評価することはなかなか難しいが、長期的な眼目で特化した「研究叢書」を企画する必要があるという点には異論がないであろう。現在日本研究所から刊行されている「研究叢書」の中には、量的にも質的にも本格的に軌道にのったものもあれば、現在まだ企画の段階にとどまっているものもある。例えば翰林大学校日本研究所で刊行される「翰林新書日本学叢書」は、1995年から人文社会科学の様々な分野にわたって、かなりの叢書が蓄積され、他の「日本研究所」や多くの研究者によい刺激を与えたものと評価されている。

3. 韓国の大学に設立された「日本研究所」の課題と展望

韓国の大学に設立された「日本研究所」の中には、国内学術大会や国際学術大会の開催、学術誌の発行、「研究叢書」の出版などの学術活動を通じて、研究所が設置された大学だけではなく地域的にも、「日本研究」を行なうひとつの拠点としての役割を果たしているところが多い。またそのような学術活動が現在は軌道に乗っていなくても、今後の活動が期待されるところもある。どちらにしても、これから「日本研究所」を拠点にして、本格的に研究活動を進めていかなければならないであろう。つまり「日本研究所」としての在り方が問われ、多くの課題をかかえているのである。筆者は、これからの「日本研究所」の課題として次のようなことを強調したい。

第一は、研究分野における特性化及び集中化を図ることである。言うまでもないことであろうが、研究所が必要な理由や根拠は、何よりも研究成果をあげて対外的に発信することである。特に韓国の大学に合わせて13カ所もの「日本研究所」が「乱立」している現実を考えると、その研究分野における特性化及

び集中化を図ることが切実に要求される。

その具体的な方法としては、今までどおりの学問の分類に基づいて日本語・日本文学、政治、社会、経済、文化、歴史、民俗などに細分化して、特性化及び集中化を図るのもよいであろう。また韓国と日本で繰り返して取り上げられる「歴史問題」などに集中し、長期的に成果をあげていく必要もある。例えば、毎年８月が近づくと、両国で急に関心が高まり、繰り返して議論される「靖国神社問題」を取り上げてみよう。「日本研究所」の特性化及び集中化を図るための一環として、「靖国神社問題」に関して集中的にデータを収集し、共同研究などを行ない、その成果を学術誌や「研究叢書」を通じて発信していく必要がある。そのような研究活動によって、日本における「靖国神社問題」へのアプローチや認識とはどのように違うのかを明らかにし、日本の研究者とも議論を交わす機会を設けるのである。これは研究者の社会的な貢献という側面からも必要な研究活動であろう。

他にも、例えばこれまでの韓国社会における日本大衆文化へのニーズを考慮するならば、日本大衆文化の研究に集中して、「日本大衆文化叢書」などを企画し、研究の成果をまとめていく必要があるだろう。十数年前から韓国社会に幅広く広まっている日本の食文化を見ていると、「日本食文化叢書」などを企画しても多数の人の興味を引くのではなかろうか。

第二に、研究資料の持続的な収集及び集積である。これは研究分野における特性化及び集中化の問題とも密接にかかわっている。このような活動は、日本研究所として当然行うべき一種の「義務」でもある。本稿の「はじめに」で述べたように、このような学術活動は、もう「日本学会」や「日本学科」では進めていくのが難しくなり、「日本研究所」にだけ期待される領域である。

それぞれの日本研究所が特性化と集中化を意識しながら、それに相応しい研究分野の資料を持続的に集積して、その分野の研究者に提供するシステムの構築を急がなければならない。その具体的な方法としては、日本研究所の特性化及び集中化を図るための方法と同じく、既存の学問分類に基づいた、細分化した資料の集積もいいであろう。また韓国と日本で繰り返して取り上げられる「歴史問題」や「社会問題」についての資料を蓄積していかなければならない。

第三に、研究者同士のネットワークの構築である。それぞれの日本研究所が重点的に推進しようとする研究分野にかかわる研究者ネットワークを構築することによって、さらに専門的かつ生産的な研究活動が可能になるだろう。その

ネットワークの活用を通じて、斬新な研究テーマの提案ができ、新たな研究領域を開拓することもできる。また最近の研究動向についての情報交換にも有利である。

ところで、充実した研究者同士のネットワークの構築には、何よりも外部の研究者が利用しやすいシステムを作らなければならない。研究所の所属大学の研究者だけではなく、国内、国外を問わず、関連分野の研究者が容易く参加できるネットワークの構築が要求される。例えば、既にいくつかの日本研究所が実行しているように、まず韓国に設置された日本研究所と日本に設置された「日本研究所」あるいは「韓国研究所」の間に、ネットワークを構築して人的交流を拡大していくのも現実的かつ生産的なひとつの方法として望ましい。

第四に、研究成果を社会に還元し、大衆に広めていくことである。これは、これまで日本研究所が推進してきた様々な活動の中で、最も遅れているようである。冒頭で述べたように、韓国は日本と隣り合っているということもあって、研究者だけではなく、一般の人々の日本の歴史、文化、社会、文学、経済などへの興味も非常に高い。韓国社会では「日本学」に対する社会的なニーズが多いわけである。それも一時的なニーズではなく、つねに求められていると言える。

しかし、われわれ日本研究者がそのような社会的なニーズに充分応えているとは限らない。これから日本研究所が先導的役割を果たして、研究成果を社会に発信し、積極的に広めていくべきである。より具体的に言うなら、一般の人々を対象とした市民講座の開設、日本探訪、日本についての「教養叢書」の刊行などを挙げることができる。

4. おわりに

以上、韓国における「日本研究」のあり方を考察するための手がかりとして、大学に設けられた「日本研究所」の位置づけ、「日本研究所」が果たすべき役割、これからの課題などについて述べ、今後の活動の方向を提示した。

もちろん本稿において、筆者が強調した問題提起が全く新しい問題提起であるとは言えない。また「日本研究所」に限られた問題でもないであろう。しかし、このような問題提起は、学問的・制度的実践が重要であるため、誰かが機会あるたびに繰り返して強調する必要があると思う。これは言わば研究者同士のコミュニケーションの問題でもある。

本稿において行った問題提起は、ある個人や研究所が主導して、物理的に進めていくべき事柄ではない。それぞれの「日本研究所」が長期的かつ自主的に、専門化と集中化を図ろうとする過程において、自然な流れで役割を分担していくのが望ましい。必要があれば、韓国に「日本研究所連合会」のような組織を結成し、様々な視点から議論してみるのもいいであろう。

国際日本文化研究センターは、「日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究する」「世界の日本研究者を支援する」[14] 機関として知られている。国際日本文化研究センターの主催によって、「世界の日本研究所の現状と展望」のようなテーマが取り上げられ、国際的な視野から眺めることができたら、非常に興味深いものになるだろう。

参考文献

金己大「近現代の日本と朝鮮の比較研究・若干の考察――コリアにおける日本研究の原点について」『世界の日本研究 2001――コリアにおける日本研究の現在』国際日本文化研究センター、2002 年。

李応寿「韓国における日語日文学関連学会の現状と問題点」『世界の日本研究 2001――コリアにおける日本研究の現在』国際日本文化研究センター、2002 年。

趙寛子「1990 年代以降の韓国の日本研究――制度と視線の変化」『世界の日本研究 2013――日本研究の新しい動向』国際日本文化研究センター、2013 年。

張寅性「ソウル大学の日本研究――「人文韓国支援事業」(2008–2018 年) の研究成果を中心に」『世界の日本研究 2017――国際的視野からの日本研究』国際日本文化研究センター、2017 年。

高麗大学校日本研究センター編『日本研究』高麗大学校日本研究センター。

国民大学校日本学研究所編『日本空間』国民大学校日本学研究所。

檀国大学校校日本の研究所編『日本学研究』檀国大学校の日本研究所。

東西大学校日本研究センター編『次世代人文社会研究』東西大学校日本研究センター。

ソウル大学校日本研究所編『日本批評』ソウル大学校日本研究所。

中央大学校日本研究所編『日本研究』中央大学校日本研究所。

韓国外国語大学校日本研究所『日本研究』韓国外国語大学校日本研究所。

翰林大学校日本研究所編『翰林日本学』翰林大学校日本研究所。

韓国日本学会編『日本学報』第 39 集、1997 年。

韓国日語日文学会編『한국의 일본어교육 실태（韓国の日本語教育の実態)』1999 年。

東北アジア歴史財団『한일 역사현안 관련 야스쿠니신사 : 연구논저 목록（韓日の歴史

14　国際日本文化研究センターのホームページに掲載された小松和彦所長の「所長のごあいさつ」から引用（http://www.nichibun.ac.jp/pc1/ja/about/)。閲覧日：2019 年 1 月 20 日。

懸案関連靖国神社：研究論著目録)』2009年。
ソウル大学校日本研究所『일본비평 심포지엄-한국인의 일본인식 100년（日本批評シンポジウム――韓国人の日本認識100年)』2010年。

＊本稿は、韓国日本語文学会の『日本語文学』46（2010年）に掲載された拙稿「日本学研究の現況と課題――国内大学の「日本学研究所」を対象にして」の一部を加筆・修正したものである。

（キム ヨンイ　韓国・全南大学校 教授）

Going West to Reach the East: A New World Source for an Episode in the Earliest Japanese Edition of *Tales of Isopo*

Lawrence MARCEAU

Japanese scholars have long recognized the existence of episodes in both the "Life of Aesop" section and the "Fables" section of *Isopo monogatari* 伊曽保物語 that are not found in the presumed "source" editions of the work, inaugurated by Heinrich Steinhöwel's 1476/1477 Latin/German bilingual edition, *Vita Esopi fabulatoris clarissimi e greco latina* (etc.).[1] In his extensive series of studies, Endō Jun'ichi 遠藤潤一 identifies two episodes from the "Life of Aesop" (I-14 and II-7) and four fables (III-13, III-17, III-28, and III-34) from the "Fables" section.[2] Subsequent scholarship has determined that some of these are included in 16th-century Spanish editions of the *Fables*, as well as in such works as the *Fabulae* by Odo of Cheriton, a 12th-century preacher who lived for a time in Spain, and whose collections of sermon source tales were transcribed into Spanish.[3]

One episode, found in the "Life of Aesop" section, has eluded identification as to a possible source. This is episode I-14 and runs in English translation as follows:

No. 14 A Groom and a Samurai in a Dispute over a Horse[4]

A certain groom (J. *chūgen* 中間) had mounted his master's horse and was

1 *Isopo monogatari* was published in multiple moveable-type editions between ca. 1615 and 1639, followed by a woodblock-printed edition (and its reprints) first published in 1659.

2 Episode and fable numbers include the fascicle number (I, II, III) followed by the entry number (1-20 for Fascicle I, 1-40 for Fascicle II, and 1-34 for Fascicle III). See Endō Jun'ichi 遠藤潤一, *Isoho monogatari daini-shu bon no honkoku to honmon kenkyū* 伊曽保物語第二種本の翻刻と本文研究, Tokyo: Kazama Shobō 風間書房, 1993: 218–22, for a chart comparing the *Tales of Isopo* with the 1476 Latin/German and 1489 Spanish editions from the Steinhöwel line of Aesopic texts.

3 See, for example, Itō Hiroaki 伊藤博明, "*Supeingo-ban 'Isoppu gūwa shū' to kokujibon* Isoho monogatari" スペイン語版「イソップ寓話集」と国字本『伊曽保物語』(Aesop's fables in the Spanish version and 'Isohomonogatari'), *Saitama Daigaku kiyō (Kyōyō gakubu)* 53-2 (2018): 1–13.

4 Text found in Mutō Sadao 武藤禎夫, comp. and annot. *(Manji eiri-bon) Isoho monogatari*（万治絵入本）伊曾保物語, Tokyo: Iwanami Shoten, 2000: 50–52.

riding it quite a distance when he encountered a samurai traveling alone. The samurai bellowed haughtily, "I hold the rank of samurai but here I am on foot while you are someone's menial underling. Now get down off that horse and hand it over for me to mount. If you don't, I'll slice through that scrawny neck of yours and toss your head away!" The groom thought to himself, "Out here in the middle of nowhere there is no one I can appeal to. If I try to resist, it's certain that my head will get lopped off." He thus had no choice but to dismount. The samurai then mounted it with an air of arrogance and, accompanied by the groom, arrived without incident at a place called San.[5]

The groom then shouted out, "This is my master's horse! I beseech you to return it!" The samurai, still on horseback, retorted, "You insolent knave! Raise your voice once more and your luck will be cut short, as well as your head!" Realizing that he had no further recourse, the groom called on the governor (J. *shugo* 守護) and pleaded his case. The governor in response sent soldiers to bring the samurai before him. One side followed the other with his claim, but to no clear result. At a loss to determine right from wrong, the governor summoned Isopo and ordered him to prosecute the case. Isopo heard the details and then pulled the groom aside, and warned him in a low voice, "By all means do not blurt anything out while I am examining the samurai." The groom humbly acquiesced.

Isopo then, according to plan, removed his outer garment and draped it over the horse's head. He then asked the samurai, "Which eye is this horse blind in?" The flustered samurai struggled to respond. At the end of his wits he finally replied, "It is blind in its left eye." At this Isopo pulled away the outer garment, revealing that the horse could see in both eyes. As a result, the horse was presented to the groom, and the samurai was left shamed, thus exposing right and wrong in this case.

The episode depicts "Isopo" (Aesop) as a clever defender of justice and compassionate protector of the weak. Having heard the testimonies of the two disputants, he instinctively understands that the groom has been robbed of his and his master's horse by the more powerful samurai. He then engages in a trick by which he uses his cloak (the text uses a generic word, *uwagi* うはき [in the 1659 woodblock edition], rendered

5 Identified as the island of Samos in the eastern Aegean, off the coast of what is now Turkey.

here as "outer garment") to hide the horse's eyes, and thereby force the samurai into an indefensible position. The fact that the samurai has been given an impossible choice, and that the reader is aware of this, provides the episode with humor and the satisfaction that justice will be done and the powerful will meet their downfall if they abuse their position.

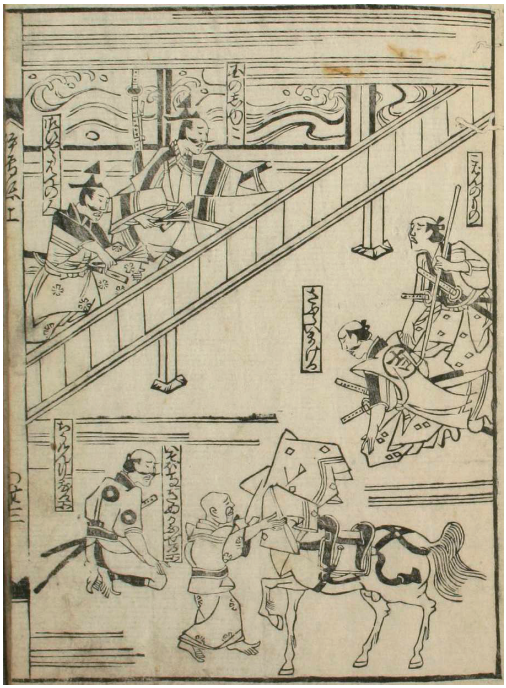


Figure 1

In his "additional note" to this episode Mutō Sadao provides an example from a source contemporary to the undated first edition of *Tales of Isopo*, the collection of humorous anecdotes, *Seisuishō* 醒睡笑 (pub. 1628), by Anrakuan Sakuden 安楽庵策伝. In Fascicle IV part 1, "Fair Judgments" (*Kikoeta hihan*), anecdote 10, the Bakufu Deputy for Kyoto, Itakura Katsushige 板倉勝重, judges a case in which two commoners dispute ownership of a cat. Itakura puts the two at opposite ends of a room, and sets the cat in the middle. Each party is provided with a shaving of dried bonito, and the cat, thus given an equal choice, goes to its rightful owner, who had fed it since birth.[6]

The Kyoto publisher of the 1659 woodblock printed edition, Itō San'emon 伊藤三右衛門, included illustrations to only twenty-four of the ninety-four episodes of the "Life of Aesop" and the fables in the collection. Apparently he found this episode of a dispute over the ownership of a horse to be striking enough to commission an artist to provide an illustration. (See figure 1, reproduced from the Waseda University

6 See Mutō 2000: 263–64. The full text is available in Suzuki Tōzō 鈴木棠三, ed. and annot. *Seisuishō*, vol. 1, Tokyo: Iwanami Shoten, 1986: 266–67.

Figure 2

Library digitized edition.[7]) The illustration depicts the samurai with a guard seated on the white gravel (*shirasu*) before the military governor. In the foreground Isopo is covering the horse's head with his outer garment, while the attendant sits to his left in the lower left corner of the image. The governor together with another official sit at the edge of a typical military court of judgment in the upper left of the illustration. Captions not only identify the figures portrayed, they also provide clues to the narrative itself. The captions are as follows (clockwise from the upper right): "A guard (*koban no mono*)"; "the samurai loses"; "Isopo covering the horse with a cloth (*kinu*)"; "the groom, gaining justice (*ri*)"; "a judge (*gohyōban no hito*)"; and "the governor of the land". While the text proper does not mention a presiding judge, but suggests to the reader that the governor is judging this case, the illustration includes an intermediate character performing the role of judge, presumably to make the scene closer to how an actual judgment would have been carried out at the time.

Another illustration, included in the illustrated manuscript handscrolls of *Tales of Isopo* in the collection of the Seimei Kaikan museum, Fukuoka, depicts the same scene, but this time in a Chinese geo-cultural context. (See figure 2.) In this image, which makes up the lower half of an illustration depicting this episode and the following episode (I-15) in the "Life of Aesop," the four characters and the horse appear together at the court of judgment. On the far right, facing the others, sits the governor of San. To his left, on the same tiled floor as the governor, sits Isopo, while on the

7 A digital copy of the work is found at http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he24/he24_00216/ and the illustration in question at http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he24/he24_00216/he24_00216_0001/he24_00216_0001_p0018.jpg

veranda area sits the samurai. The governor and the samurai are gesturing, with the samurai's left hand seemingly suggesting that it is the horse's left eye which is blind. On the ground in front of the structure sits the groom, and behind him stands a white horse with dark legs. The horse's head is shrouded in a light-green cloth of some sort, which is decorated with designs in gold pigment. While the 1659 woodblock printed illustration seems to depict the point at which the groom has won his suit against the samurai, the handscroll illustration (dating from ca. 1650–1680) presents the viewer with the point at which the samurai errs in his judgment of the horse's eyesight.

In terms of European-language sources, the various Steinhöwel-line of editions do not seem to include this; nor do the other widely disseminated collections of fables, exemplary anecdotes, and sermons from the 15th and 16th centuries. In an intriguing twist, however, two Spanish-language texts survive from the 17th century and include an anecdote that closely follows the early 17th-century Japanese *Tales of Isopo* text. Furthermore, both narratives are set in the New World, not in Europe or the Middle East, as one might expect.

The first, and perhaps most significant text is found in the work, *Virtudes del Indio* (translated by Nancy H. Fee as *Virtues of the Indian / Virtudes del Indio: An Annotated Translation*) by Juan de Palafox y Mendoza (1600–1659), and probably published ca. 1650.[8] Palafox was a Roman Catholic priest stationed at the cathedral at Puebla in present-day southeastern Mexico. He rose in rank to become bishop of the diocese of Puebla, and was recognized with the status of "Blessed" by the Holy See in 2011. Apparently concerned about the treatment of the indigenous Aztec people (whom he refers to as "Indio") on the part of the Spanish conquistadors, Palafox collected documents and oral testimony about the Indios and compiled them into a volume that he seems to have presented to the King Philip IV (Felipe IV) of Spain soon after Palafox's return in 1650.[9]

Chapter XV, "On the Wits and Promptness of the Indian," opens with praise for their ingenuity, and includes the following anecdote:

---

8 Fee's annotated English edition is Juan de Palafox y Mendoza (1600–1659), *Virtues of the Indian / Virtudes del Indio: An Annotated Translation*, ed. and trans. Nancy H. Fee, Lanham: Rowman & Littlefield, 2009, and a reprint of the original is *Virtudes del Indio por D. Juan de Palafox y Mendoza, Obispo de la puebla de los Ángeles*, Madrid: Tomás Minuesa, 1893.

9 See Alejandro Cañeque, "Palafox and the Virtuous Indian: An Introduction to *Virtues of the Indian*" in Palafox y Mendoza 2009: 77.

When they defend their arguments, they represent their reasoning with most ingenious discourses and insinuate in a way that convinces. I will herein propose to your Majesty a very odd case of this. An Indian was traveling and a Spanish resident too, both on horseback. They chanced upon one another in a barren, deserted plain. The horse of the resident was very sick and old and the horse of the Indian excellent. The man asked the Indian to exchange horses and the Indian refused because of what he would lose. However, as one man carried arms and the other did not, with the argument of power and the jurisdiction of force, he took the horse from the Indian. Passing his saddle to him, he resumed his journey, leaving the poor Indian behind with the bad horse. The Indian continued on, following the Spaniard and requesting that he return his horse to him, and the man denied that he had taken it from him.

2. They arrived with this complaint and quarrel to the whereabouts of the District Magistrate, who called to the man, at the request of the Indian, made him bring forth the horse, and asked him why he had taken it from the Indian. He responded and swore that he had not taken it from him and that all that Indian said was false because the horse was his and he had raised it from birth in his home. The poor Indian too swore that the man had taken it from him. As there were no more witnesses or proofs than the oaths sworn by the two parties and one possessed the horse and the other was asking for it, the District Magistrate told the Indian to be patient because it was not evident that that man had taken his horse from him. The Indian, finding himself without any recourse, said to the Judge: *I will prove that this horse is mine and not that man's*. He told him to prove it. After removing the *tilma*, which serves them as a cloak, that he was wearing, he covered the head of the horse that the other had taken from him and said to the Judge: *Tell this man, since he says he has raised this horse, to say then which of the horse's two eyes is blind*. The man, discomfited by the sudden question, responded doubtfully: *The right one*. Then the Indian, uncovering the head of the horse, said: *Well, it is not blind*. It seemed to be so and his horse was returned to him.[10]

10 Palafox y Mendoza 2009, 155, 157.

This anecdote shares several details with "An Attendant and a Samurai," including the difference in social status between the two parties, the threat of force in taking the horse, and the appeal to the district magistrate in order to resolve the conflict. On the other hand the two narratives differ in important respects. The samurai identifies the left eye as being blind, but the Spaniard identifies the right eye. Also, while the attendant is unable to come up with a solution to the problem at hand, relying instead on Isopo's mental acuity, the Indian defends himself, and singlehandedly tricks the Spaniard into revealing his guilt. Perhaps the most important detail, though, is mention of the *tilma*, a common Aztec garment at the time. The *tilma* (or *tilmàtli*) was a large piece of cloth tied over one shoulder (in the case of commoners), and used both as a kind of robe as well as a container for carrying bundles.[11] The fact that Palafox's anecdote provides a specific name for a crucial element of this narrative lends it particular significance. Even though Parafox's account postdates *Tales of Isopo* by at least three decades, it seems likely that the Jesuit translators from Spanish (and/or Latin) of *Aesop's Fables* would have been aware of a precursor to this narrative, and then adapted it to fit into the "Life of Isopo" in order to further support his quick wit and ingenuity.

Another New World Account

Surprisingly, another version of this anecdote exists in Spanish, this time set in Lima, Peru. The presumed author, Catalina de Erauso (c. 1592–c. 1650), was a Basque native who grew up in a convent, escaped dressed as a male, joined the Spanish military, and fought in the New World, Peru and Chile in particular. Known as the "*Monja Alférez*" or "Lieutenant Nun," Erauso has attracted the attention both of scholars in the field of gender studies as well as the general public, with numerous works of fiction, plays, and films appearing based on her memoirs. The autograph manuscript no longer survives, but evidence indicates that it was first completed in 1625 after Erauso's return to Spain the previous year. A copy dated 1784 survived in an archive in Madrid. The first printed edition, based on this copy, dates from 1829,

11 See https://aztlandevelopment.com/the-clothing-of-the-ancient-aztecs/ (accessed 18 Dec. 2018).

nearly two centuries after Erauso's death.[12]

In this work, the narrator describes an event that is strikingly similar to the case of the horse ownership in *Tales of Isopo* and *Virtudes del Indio* discussed above. The narration goes as follows:

> I stayed in Lima some seven months, getting by as best I could. I bought a cheap horse that suited me fine and I made the rounds on it for a couple of days, all the while turning over and over in my head whether I should head back to Cuzco. One day, when I'd just about made up my mind, I was passing through the plaza when a constable approached and told me that the mayor, don Juan de Espinosa, a knight of Santiago, wanted to see me. When I got to his honor's house there were two soldiers waiting there, and no sooner had I entered than one of them said, "This is the one señor. This is the missing horse, and we can prove it."
>
> The deputies surrounded me and the mayor said, "Well, what do we have here?" The whole thing was so sudden that I didn't know what to say, and there I stood, confounded and stammering, the very picture of guilt, when it suddenly occurred to me to take off my cloak and throw it over the horse's head.
>
> "Señor," I said, "I implore your honor, ask these gentlemen which is the eye the horse is blind in—the right or the left. It's entirely possible that this is another animal, and these gentlemen are mistaken."
>
> "Good idea," the mayor said. "You two, answer together, which eye is this horse blind in?" The two of them were confused now, and the mayor repeated, "Together now, at the same time."
>
> "In the left eye," one said, and the other said, "In the right—the left, I mean!" and the mayor said, "A fine story, you can't even get it straight!" and they came back at him, the two of them in unison now. "No, it's the left, the left, we both say so—no mistaking it." … "I was going to say left, but I accidentally made a mistake—but then I corrected myself. It's the left I tell you." … "They're

12 For the first Spanish-language edition, see Joaquin Maria de Ferrer, ed., *Historia de la Monja Alferez, Doña Catalina de Erauso*, Paris: Julio Didot, 1829. This work served as the source for Michele Stepto and Gabriel Stepto, trans., *Lieutenant Nun: Memoir of a Basque Transvestite in the New World*, Boston: Beacon Press, 1996. For further bibliographic information see Amy Cahill Williamson, "Searching for the Writing Subject in *La Vida de la Monja Alférez: Autobiografia Atribuida a Doña Catalina de Erauso*" (unpublished PhD dissertation, Tuscaloosa: University of Alabama, 2010), 3.

both lying. This horse isn't blind at all." The mayor got up and came over to the horse, and looked at it, and said, "Take your horse, *vaya con Dios*," and then he turned to the others and had them arrested."[13]

In this version of events, the narrator is accused of having stolen a horse from two individuals, rather than having the horse taken from her at the outset. A humorous touch is added when the two accusers declare the right and the left eye respectively as being blind, thus exposing their ignorance of the horse even before the judge learns that the horse is actually without any loss of sight. The narrator, dressed as a male, takes off her "cloak" ("*la capa*" in the 1829 Spanish edition: 83) and covers the horse's head with it. The account in *Virtudes del Indios* makes reference to the Aztec *tilma*, identifying a garment limited to the indigenous people of the region, while Erauso's *capa* seems more generic, as does Isopo's *uwagi*.

It is possible that the horse judgment story was added by a later editor to Catalina de Erauso's 1625 memoirs, but it definitely is included in the 1784 copy. If the horse account originally appeared in the 1625 autograph manuscript, then this would predate Juan de Palafox y Mendoza's work, and actually be only slightly later than the first Keichō-Genna (1596–1624) wooden moveable type edition.

One short study in English compares the Palafox and the Erauso versions of the horse account, referring to it as a "clever tale."[14] Here the author, Walter D. Kline, treats the account as an example of a folk motif and concludes that, while it "has been popular in European and Indian oral traditions, it was the Spaniards who first incorporated it into their literary prose productions."[15] Kline identifies a Peruvian scholar, Efraín Morote Best, who considers the account "both as a part of gypsy lore and as an element of the oral heritage of the Peruvian Indians."[16] While accepting Morote Best's Latin American oral identifications, Kline also suggests that other European oral traditions, such as German and Italian, possess this motif as well, and goes as far as to classify the motif as an example of the J1154 subdivision of the *Motif Index of Folk Literature*, Cleverness in the Law Court, "in which the witness is discred-

13 Stepto and Stepto, trans. 1996: 53–54.

14 Walter D. Kline, "A Clever Tale in Early Spanish Prose," In *Modern Language Notes* 76-1 (Jan. 1961): 25–29.

15 Kline 1961: 29.

16 Kline 1961: 28.

ited by his inability to tell details."[17]

In an intriguing twist, the two famous seventeenth-century travelers to the New World, Erauso and Palafox, were actually linked together upon her death. (Palafox was still alive at this time, though.) According to an entry in the *Encyclopedia of Women and Religion in North America* (in which the sobriquet of "Lieutenant Nun" is translated as "Nun Ensign"), "a 1653 Mexican broadside announces the Nun Ensign's death with an apocryphal account of the burial of her remains with the saintly Bishop of Puebla Juan de Palafox y Mendoza."[18]

The Jesuit compiler-translators of *The Tales of Isopo* had at their disposal one or more editions of *Aesop's Fables, with a Life of Aesop* from the Heinrich Steinhöwel line of translations from Latin into European vernacular languages, particularly Spanish. This edition or editions served as the core of the Japanese edition. However, in order to enhance the image of Isopo as a clever but just arbitrator of disputes, they had reason to supplement this text with material from other sources available to them, including a version of the account of the stolen horse that found its way into the works by Juan de Palafox y Mendoza and Catalina de Erauso's narratives. By adding the figure of Isopo to the dispute between the attendant and the samurai, the compiler-translators successfully demonstrate that a clever and objective third party can solve a difficult dispute, especially when it involves a great imbalance of power on each side. In this way, *Tales of Isopo* serves both to entertain readers, as well as to teach important social lessons.

(Senior Lecturer, The University of Auckland, NZ)

Works Cited

Cañeque, Alejandro. "Palafox and the Virtuous Indian: An Introduction to *Virtues of the Indian*." In Palafox y Mendoza 2009: 77–101.

Endō Jun'ichi 遠藤潤一. *Isoho monogatari daini-shu bon no honkoku to honmon kenkyū* 伊曽保物語第二種本の翻刻と本文研究. Tokyo: Kazama Shobō, 1993.

de Ferrer, Joaquin Maria, ed. *Historia de la Monja Alferez, Doña Catalina de Erauso*.

17 Kline 1961: 29.

18 Rosemary Skinner Keller and Rosemary Radford Ruether, ed., *Encyclopedia of Women and Religion in North America*, Bloomington: Indiana UP, 2006: 141.

Paris: Julio Didot, 1829.

Itō Hiroaki 伊藤博明. "Supeingo-ban 'Isoppu gūwa shū' to kokujibon *Isoho monogatari*" スペイン語版「イソップ寓話集」と国字本『伊曽保物語』(Aesop's fables in the Spanish version and "Isohomonogatari"). *Saitama Daigaku kiyō (Kyōyō gakubu)* 埼玉大学紀要（教養学部）53-2 (2018): 1–13.

Keller, Rosemary Skinner, and Rosemary Radford Ruether, ed. *Encyclopedia of Women and Religion in North America*. Bloomington: Indiana UP, 2006.

Kline, Walter D. "A Clever Tale in Early Spanish Prose." *Modern Language Notes* 76-1 (Jan. 1961): 25–29.

Mutō Sadao 武藤禎夫, comp. and annot. *(Manji eiri-bon) Isoho monogatari*（万治絵入本）伊曾保物語. Tokyo: Iwanami Shoten, 2000.

N.A. "The Clothing of the Ancient Aztecs." https://aztlandevelopment.com/the-clothing-of-the-ancient-aztecs/ (accessed 18 December 2018).

N.A. *Isopo monogatari* 伊曽保物語 (Tales of Isopo). 3 fasc. (Kyoto): Itō San'emon 伊藤三右衛門, Manji 2 (1659). Digital facsimile edition at Waseda University Library database. http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he24/he24_00216/.

N.A. *Isopo monogatari* 伊曽保物語 (Tales of Isopo). Illustrated manuscript handscroll in six scrolls. ca. 1650–1680. In the collection of the Seimei Kaikan 晴明会館 museum, Fukuoka.

Palafox y Mendoza, Juan de. *Virtudes del Indio por D. Juan de Palafox y Mendoza, Obispo de la puebla de los Ángeles*. Madrid: Tomás Minuesa, 1893.

——. *Virtues of the Indian / Virtudes del Indio: An Annotated Translation*, edited and translated by Nancy H. Fee. Lanham: Rowman & Littlefield, 2009.

Stepto, Michele, and Gabriel Stepto, trans. *Lieutenant Nun: Memoir of a Basque Transvestite in the New World*. Boston: Beacon Press, 1996.

Suzuki Tōzō 鈴木棠三, ed. and annot. *Seisuishō* 醒睡笑. Vol. 1. Tokyo: Iwanami Shoten, 1986.

Williamson, Amy Cahill. "Searching for the Writing Subject in *La Vida de la Monja Alférez: Autobiografía Atribuida a Doña Catalina de Erauso.*" Unpublished PhD dissertation, Tuscaloosa: University of Alabama, 2010.

韓国近代文学研究の現況
――2000年以後を中心に――

朴　眞淑

1. はじめに

韓国近代文学研究の現況を整理することは非常に難しい。ある研究者は、2000年代初め、先行研究が既に多すぎるため、大学院に進学する学生の研究が困難になっていると述べたことがあるが、2018年現在、研究の量はその当時よりさらに増加している。李光洙（イ・グァンス）小説についての研究史を整理した論文で博士号をとったケースも登場した（ファン・ジョンヒョン『李光洙小説研究史』高麗大学博士論文、2009）。これは李光洙に限ったことではないと見られ、研究の量がどれほど増加しているかを示す端的な事例だ。周知のように研究史は論文の序論で問題提起のために書くものであり、研究史だけで書かれた論文が博士論文として認められたことは一つの衝撃だった。李光洙研究に限らず、近代文学研究の量的増加はどこから始まったのだろうか。

韓国の人文学分野は総じてそうであろうが、近代文学研究が急増した契機は、①人文学危機論、②国家の研究管理体制の開始、すなわち1998年学術振興財団（現・韓国研究財団）学術誌の登録制度の開始、③研究費支援事業の実施――1999年に始まったBK21事業（Brain Korea 21 Project、頭脳韓国21支援事業）、2007年に始まったHK事業（Humanities Korea Project）――だ[1]。もちろん、同事業が成果を生み出して人文学分野の研究に活況をもたらした面は無視できないが、論文数という計量化された評価制度のために研究業績を多く生産せざるを得なくなった。研究者のこのような“論文機械化”は国家の研究支援事業の結果生じた副作用とみられるが、他方では多くの人文学アジェンダを生

1　金大中大統領期に、世界レベルの大学院中心の大学や特性化された地域優秀大学を育成するためにBK21事業が施行されることになった際、人文学界では論争が広がった。論争の末、ある大学は同事業に参加し、ある大学は参加しなかった。同事業に参加した大学に“研究費”という名の資本が投入された結果、研究の量的な成長とともに学界の地形図は変わった。2007年にHK事業が始まると、大学はもちろん研究者たちも、この事業に選定されるためにこぞって参加するようになった。

むことになり、人文学各分野の研究を推し進めた。韓国近代文学、特に小説分野は、このような環境の中で研究を蓄積してきた。

したがって、本稿はこのような韓国近代文学研究の環境を前提にして考えるしかない。2000年以後の近代文学研究の現況を体系的に整理することは不可能であり、筆者の本論考は、氷山の一角に過ぎないかもしれない。筆者は2000年以後、このような状況と研究に対する省察に基づいて韓国近代小説分野に関する研究の特徴的な点を主観的に捉えて整理したいと考えている。

2. 韓国近代小説の研究現況

(1) 文化論的研究の発生と拡張

1989年、越北作家の作品に対する解禁が行われた後、越北作家に関する研究は1980年代の社会運動の時代精神と出会って非常に活発に行われるようになった。1980年代の労働文学とリアリズムの興盛のなかで、1930年代のリアリズムとともにモダニズムに関する研究も同時に行われたが、これはモダニズム作家が越北作家だったため自然に行われた研究だった。リアリズムとモダニズム研究は1990年代まで韓国文学の主流研究として進められ、研究者は、今ここにいない越北作家に関する研究に邁進(まいしん)した。越北作家を中心とした研究は、その成果にもかかわらず、今後の研究では批判あるいは克服の対象になるだろう。それは実際のところ、韓国近代文学史をモダニズムとリアリズムという還元論的構図によって再編するのは困難であるという判断に基づくものである。

このような状況下、1990年代以後の韓国近代文学界では、大衆文化、風俗、日常、文化制度、受容者、ジェンダーなどに関する論議が行われ、それを通じて韓国文学の近代性を再び究明しようとする流れが生まれた。この議論は2000年頃に出版された二つの研究、すなわちイム・ジヒョンの『私たちの中のファシズム』(サムイン、2000)とキム・ジンギュン他著『近代主体と植民地規律権力』(文化科学史、2003)に負うところが多い。歴史学と社会学の分野で提起された両研究は、文学研究の次の段階の研究を助ける力になったのかも知れない。

ここで論じようとする文化論的研究[2]は、1990年代後半以降、韓国近代文学界に新しく登場した研究傾向である。それは、近代の克服のために近代性その

2　この分野の研究をどのような用語で表すか自体についても意見が分かれるが、ここでは「文化論的研究」を用いることとする。

ものに対する探索を自らの課題として設定し、理論よりは資料により同時代の感覚を通じて再構成し提示しようとする意志の所産だと言っても過言ではない。こうした研究は、文学に対する本質的な問題を提起し、文学の危機に対する学界の反応を探る契機ともなった。文化論的研究は、テキストに対して伝統的な文学研究とは明らかに異なる立場をとっており、文学主義者からは、社会学のような方式でテキストを扱っているという批判を主に受けた。実際、この文化論的研究の代表格とされるチョン・ジョンファン、クォン・ボドレや、韓国史学界のイ・ギフンは3年以上、1920～30年代の多くの資料を読みながら研究成果を生み出した[3]。1990年代後半、文化論的研究は、“文学の文化研究への転換”と歴史学の“言語への転換”という二つの新しい流れが遭遇する地点で生まれたのである[4]。

韓国近代文学界における文化論的研究は、チョン・ジョンファンの『近代の読書』（プルン歴史、2003）と、クォン・ボドレの『恋愛の時代――1920年代初めの文化と流行』（現実文化研究、2003）、イ・ギョンフンの『兄の誕生――韓国近代文学の風俗史』（文学と知性史、2003）から始まったとみるのが一般的だ。

『近代の読書』は、著者の博士論文を大衆読者のために大胆に編集した1920～30年代の読書の文化史である。近代の知と読書の歴史を究明することと、読者を中心に文学史を再構成する作業の一環として行われたことを著者自ら明らかにしているが、実際、この研究は膨大な資料に基づいた読書文化史の最初の試みという点で評価に値する。もちろんチャ・ヘヨンが指摘しているように、この本は「〔著者〕自らしばしば引用している前田愛の『近代読者の成立』（岩波書店、1993）から、その発想と近代へのアプローチを得ている」[5]。だからといって、この本の成果を否定することはできないが、文化論的研究に対する批判の底辺には、このような背景もあるといえる。『恋愛の時代』は「1920年代前半の文化と流行」という副題が示すように、恋愛と恋愛熱という概念を中心に1920年代初頭の文化を同時代の資料に基づいて提示している。直接この著書に対する批判ではないが、チャ・ヘヨンは、クォン・ボドレの前作である『韓国

3　文化論的研究の出発そのものが学制的という点も特徴的である。

4　チョン・ジョンファン「文化論的研究の現実認識と展望」『尚虚学報』19、2007.2、38頁。

5　チャ・ヘヨン「資料の海を泳ぐ2つの方式――チョン・ジョンファン『近代の本を読むこと』プルン歴史、2003／クォン・ボドレ『恋愛の時代』現実文化研究、2003」『民族文学史研究』24、2004.3、449頁。

近代小説の起源』（召命出版、2000）が「李孝徳の『表象空間の近代』（新曜社、1996）と鈴木貞美の『日本の「文学」概念』（作品社、1998）の発想と近代へのアプローチに負うところがある」[6] として、以下のように述べている。

> 二人の著者だけでなく、現在近代文学を研究するほとんどの研究者にとって、最近の多様な日本近代史研究の成果は、明らかに新しい可能性と突破口を提供している。そしてこのような現象そのものは、国粋主義的な見方によって排他視すべき性質のものでもないだろう。むしろ日本と韓国の近代が結んでいる「非常に明らかな連関関係」を考えると、他の理論的典拠――例えば、チョン・ジョンファンの場合、マングエルやシャルティエなどの著書――よりもっと生産的だろう。しかし、ここでの問題は、大部分の参照の方向が「日本近代史研究の発想及び方法論と韓国近代の資料」という関係設定から成っているということだ。これは最近韓国で生産されている近代史研究における「資料と研究との間の境界と分裂」、「研究への欲望と結果の解体化傾向」と無関係ではなさそうだ。[7]

チャ・ヘヨンのこのような指摘は、韓国の近代文学研究者なら誰しも深く考えてみるべき重要な問題だが、だからと言ってチョン・ジョンファンとクォン・ボドレの実証的作業に基づいた研究成果の意味を過小評価する必要はないと思う。彼らに対しては省察的自意識の存在可否、特別な理論的準拠枠不足、実証主義に埋没している[8] などの批判があるが、この二つの研究の影響力は、国文学界ではなお続いており後続の研究も現れている。個別に研究する研究者とは違って、彼らの研究は常に集団的であり議論を主軸にしているために、関心が集中したことも見落とせない。

文化論的研究に対する様々な批判にもかかわらず、引き続き研究は広がっていったが、その成果として、クォン・ボドレ、チョン・ジョンファン『1960 年を問う――朴正熙時代の文化政治と知性』（千年の想像、2012）、チョン・ジョンファン、ソ・ヨンヒョン、イム・テフン他『文学史以後の文学史――韓国現代

6　同上、449–50 頁。

7　同上、450 頁。

8　パク・ホンホ「文化研究の批判的な省察――“文化研究”の政治性と歴史性：近代文学研究の現況と反省」『民族文化研究』53、2010、162 頁。

文学史の解体と再構成』（プルン歴史、2013）がある。『1960年を問う――朴正熙時代の文化政治と知性』の筆者たちは、1960年に作られた制度と精神が、1960年以降、韓国の知性史と文学分野の新しい出発点となり、それがまだ生きていると考える。同書は、1960年の意味を、文化政治と知性という観点で探索したものである。そして、文学史は再び書かれうるかという問いとともに、詩・小説中心の主流文学史に反旗を翻して書かれた『文学史以後の文学史』は、副題のとおり、韓国現代文学史を解体し再構成することを提案する。この挑発は『文学を壊す文学たち』（クォン・ボドレ他、民音社、2018）に至ると、2018年の韓国社会における“MeToo”現象とともに運動としての性格がさらに強くなっている。

> 私たちが探求したかったのは既存の韓国文学（史）で「文学的なもの」と「非文学的なもの」、「男性的なもの」と「女性的なもの」、「政治的なもの」と「非政治的なもの」などを分ける規律が構成される原理だった。その原理が女性と性的少数者をはじめとする他者（性）に対するある種の排除と位階化を経由・承認することで成立してきたものであれば、新しい世代の文学主体によって到来する新たな「文学（性）」はそうした古くて非民主的な想像力を繰り返さないことを願った。[9]

同研究も、『文学史以後の文学史』がプルン歴史アカデミーで2011年11月末から講座後に出版されたように、2017年「フェミニスト視覚で読む韓国現代文学史」という講座の後に出版されたものだ。この本は上述の引用で提示されているように、フェミニズム的感受性と問題意識をもとに文学を再度読まなければならないという立場から、既存の文学を「壊す」文学の出発を告げる信号弾のようなものだ。これまで男性中心的に構成されて評価されてきた方式から脱却し、フェミニズムの視点で文学を解釈し評価する方法が必要であり、それを実現しようとしたものである。女性研究者の批評的自己決定権の宣言とも言えるこの研究は、多少荒削りだが、女性文学学会の業績を土台とした研究であり、次なる研究が待たれている。

1980年代の運動としての文学が、作品創作や批評を通じて行われたとすれ

9　クォン・ボドレ他『文学を壊す文学たち』民音社、2018、9頁。

ば、1990年代後半に始まったこの一連の文化論的研究は、実は、文学研究者による運動としての文学であると言っても過言ではない。彼らがテキストを扱う方法に絶えず問題を提起しつつ韓国社会の変化とともに歩もうとする鋭い問題意識のため、彼らの研究が発揮している力は無視できない。

一方、文化論的研究に属していながら学際的研究の一例を示した検閲研究会について言及する必要がある。検閲研究会は、国文学分野の韓基炯（ハン・ギヒョン、成均館大学）、韓萬洙（ハン・マンス、東国大学）、朴憲浩（パク・ホンホ、高麗大学）、東アジア言語文明学分野の崔敬姫（チェ・キョンヒ、シカゴ大学）、社会学分野の鄭根植（チョン・グンシク、ソウル大学）などが、純粋に検閲問題に関する学問的関心から始めた研究会だ。周知の通り、検閲研究は植民地文学研究はもちろん、植民地知識史と思想史の問題を扱う上で欠かせない課題だ。これまで様々な制約から、検閲がどのように行われたのか制度的実態や意味が具体的に解明されたことはなかった。パク・ホンホは検閲研究の成果と展望について次のように述べている。

> 検閲研究は、われわれがいまだに「朝鮮総督府」に対してさえ、全面的な知識を持っていないことを教えてくれたが、「朝鮮総督府研究」とは一研究者、一分野の研究だけでは成り立たない。検閲研究に限っても、検閲が与えた社会的規律の範囲と影響は広範なものであるため、必然的に学際間の研究が求められることになる。「検閲研究会」の第二次学術大会で、法、新聞放送、映画などの分野を取り上げたのは必然的なことだった。〔中略〕例えば、「植民地文化制度史学」あるいは「植民地学」という上位概念を提示し、これを具体化するための学際間研究が組織できる。研究者の共同研究により、一次的には植民地朝鮮における様々な文化領域を対象として現実を形式化する前提としての制度と、そうした制度が精神に与えた影響という問題を模索することができる。さらに世界中の2/3以上が植民地を経由して近代になったことを考慮すると、個別国家の植民地的特殊性を含む「植民地論」を構想することができる。[10]

10　パク・ホンホ「‘文学’‘史’がない時代の文学研究――韓国近代文学研究に対するある所感」『歴史批評』2006年夏号、109–111頁。

検閲研究の成果は、検閲研究会編『植民地検閲――制度・テキスト・実践』（召命出版、2011）、ハン・マンス『許された不穏――植民地時期の検閲と韓国文学』（召命出版、2015）と、チョン・グンシク他『検閲の帝国』（プルン歴史、2016）として出版された。特にハン・マンスの著作は韓国近代文学界に新たな覚醒の機会を提供している。ハン・マンスは検閲研究を通じて、「作家が「書こうとしたこと」は何であり、「書けたこと」、「書けなかったこと」、「書くべきだったこと」、「書こうとしたこと」の間の緻密な比較、対照、類推の過程を通じて、読解・解釈・評価する作業が行われなければならない」と強調した。実際、彼はテキスト内の検閲の様態を調べ、テキスト解釈を一層精密にすることにも貢献した。

近代文学界内部で「「文化研究」と称される様々な学問的試みは、他の分野を「侵攻」し、「内破」した」と言ったパク・ホンホの表現を借りて整理すると、文化研究は「文学研究ではなく社会学ではないかとされるような境界を行き来する研究」であり、「実感としての近代を復元しようとする流れと近代における主体形成メカニズムを追究しようとする流れを取り込んだ」研究だと言われる。チャ・ヘヨンはこれを「人文学研究の危機と選択」という言葉で表現しており、いかなる評価を受けているにしても、韓国近代文学研究において文化論的研究が一定の流れと影響力を持っていることは間違いない。

(2) テキストへの帰還

文学研究と文化論的研究の最も大きな違いは、テキストを扱う方法にあると述べた。文化論的研究が韓国の近代文学学界を「内破」しているという意味は、文化論的研究が「テキストあるいは文学自体を括弧で括ろうとする」からだ。文学研究者が文学テキストを分析したり解釈したりせず、社会学で扱う資料のように扱うなら、彼らが文学研究者なのかという質問が当然起こってくる。

リュ・ボソンは「だから問題は文学だ――最近の文化研究に対する批判的ないくつかの提言」で文化研究の意味を次のように書いている。

> 厳しい実証的作業を通じて、文化研究は恋愛の時代、大衆知性論、自殺論、スパイ論、スポーツ論、銃後婦人論、青年論、南方をめぐる議論、『開闢』などの雑誌、検閲、核問題、翻訳と翻案、比較文学、映画の影響、満州論、浮浪青年、風紀紊乱者、お手伝いさんの文学史、モダンガール、ア

プレゲール、ジェンダー論、探偵小説など、過去あまり注目されなかった議論を、韓国の文化史の主要トピックスとして説得力をもって召還し、これを通じて韓国文学研究がこれまで多くの社会文化的コンテクストを排除したまま、文学（作品）を読んできたかを如実に証明した。[11]

リュ・ボソンは、文化論的研究の成果によって従来の韓国文学（作品）分析が、あまりにも多くの社会文化的コンテクストを排除したまま作品を読んできたかを認めながらも「問題は再び文学だ」と主張する。文化論的研究の成果は、テキストを分析する別の視座を育てる土台としての役割を果たしたことにあるといえる。2000年以後のテキストを取り扱った研究のうち、文化論的研究成果が成し遂げた風俗論と同時代の社会風景に基づく精密な作品分析がなされたが、これは文化論的研究の間接的な波紋と言える。そのような意味で、リュ・ボソンが主張する「文学なき文化研究」から「文化ある文学研究」あるいは「文学ある文化研究」へとその中心を移さなければならず、文学の地位に対する真剣な考古学的な探査の上に、研究者自身が関心を持つ文化領域についての研究を比較、対照、類推する時にこそ、文化研究は、既存の象徴秩序を解体する文化研究本来の目的に到達できる[12]という判断は適切なものである。無論リュ・ボソンは文化ある文学研究、文学ある文化研究がどのような形になるのかについては具体的に提示していない。

筆者も「問題は再び文学」でなければならないということに同意するが、その「文化ある文学研究」、テキストへの帰還という問題意識を学会のテーマに反映させた事例をいくつか挙げてみたい。先に言及したが、韓国研究財団の登載学術誌評価制度のため、各学会は評価をもらうためにも、新しい問題意識と人文学的な見方を堅持せざるを得なかった。特に仇甫学会[13]の場合、最近になって登載候補学術誌、登載学術誌に選定されるにいたり、他の学会が企画しなか

11　リュ・ボソン「だから問題は文学だ――最近の文化研究に対する批判的ないくつかの提言」『敦岩語文学』32、2017.12、138頁。

12　同上、165–66頁。

13　個別作家の名前を掲げた学会で、最も古い学会は尙虛学会だ。尙虛学会は、尙虛李泰俊（イ・テジュン）についての研究結果も収録されているが、「尙虛研究のための学会」というよりは、韓国近代文学に問題提起をするという趣旨で、文化論的研究の前線に立った学術誌である。

った個別小説テキストに関する深層討論を学会誌に掲載している。対象作品は「小説家仇甫氏の一日」、「川辺風景」、「路地裏」、チェ・インフンの「小説家仇甫氏の一日」などで、この討論から論文研究テーマに発展していった事例も生まれた。仇甫学会のこの深層読解企画は、研究者がテキストを読む具体的な経路を共有し、文学教育にも還元される土台を築く必要があるという問題意識から始まった。具体的なテキスト分析がより精密に進められるべきだと感じたからである。文学においてまだ重要なのはテキストだ。仇甫朴泰元（パク・テウォン）に関する研究は、新進研究者が参入しにくいほどの研究レベルを確保した。

春園研究学報も昨年登載候補学術誌で今年になって登載学術誌になった。春園李光洙は韓国の近代文学史でとても重要な作家であるにもかかわらず、親日行為のために学会の創立が困難で学会が創立されたのは最近である。春園全集の出版プロジェクトも、春園研究学会が出版準備委員会を発起し、遺族、出版社、研究者とともに現在進行中であり、来年出版する予定だ。特に 2017 年は李光洙の「無情」の発表から百周年にあたる年であり、李光洙の「無情」だけを扱う学術大会も多く企画され、研究成果も蓄積されつつあった。春園研究学会で『春園全集』出版にあたる研究者が、解説の執筆以前に先に論文として発表する場合がしばしばあり、その成果が期待される。最近、筆者は『春園全集』出版のために現代語訳をしながら精読し、「李光洙の『土』に現れた農村振興運動と同友会」（『春園研究学報』13、2018.12）という論文を書いた。これまで見逃されていた同友会の協同組合運動と安昌浩の農村振興運動が小説の構造と関わっていたことを明らかにした。これにより日帝の農村振興運動に対する李光洙の現実認識の様子も具体的に立証した。これは筆者が日本の同化政策に関心を持っていたため可能なテキスト分析だった。今やテキスト分析は、これまで蓄積されてきた個別研究者の視野の拡大により、また、文化論的研究が広げた場において、刷新されねばならない。その点で、いまや再び文学でなければならない。

個別作家研究の他にも、韓国現代小説学会は、最近、「だから問題は文学だ――最近の文化研究に対する批判的ないくつかの提言」の執筆者が、学会の会長となり、再度小説とは何か、作家とは何か、読者とは誰なのかを点検する企画を立て学術大会を開き、学術誌に掲載した。

個別研究をここで一つ一つ扱うことは難しいが、豊富なテキストをきちんと読まなければならないということの重要性を直接示す著作として、バン・ミン

ホの『日帝末期韓国文学の談論とテキスト』（イェオク、2011）が挙げられる。バン・ミンホは文学が根本的に修辞学的であるという原論的な事実を思い起こさせ、特に日帝末期の韓国文学作品を正確に読むためには、テキストの中に現れる作家の演技および偽装を考慮しなければならないということを強調している。「この本全体を貫流しているコンテクスト構成の豊かさと相互テキスト性に則った「積み重ね読み」の立体感」[14] は評価に値する。これは脱植民地主義の理論に基づいている。特に「専有」（Appropriation）と亀裂、混種性に注目しながら、日帝末期の対日協力とかかわるテキストの中に描かれた苦悩と迷い、躊躇（ためら）いを読み取る著者の読解能力は卓越している。協力は演技であり、偽装された順応の裏面に隠された抵抗の契機を読み取ることこそ、文学研究が集中しなければならない作業だというのだ。このようにテキストの重要性を認識し、テキストから意味を抽出して解釈の幅を広げていく時、韓国文学史研究はさらに発展していくのではないだろうか。

3. 結　び

韓国の近代文学研究は、1989 年以後本格化した越北作家研究から 1990 年代後半以後文化論的研究へと進んだ。2000 年代初期から、文化論的研究は、批判を受けつつも拡大し、これに対して、再び文学へ戻らなければならないという声と研究も続いている。また、一方では 1990 年代後半の研究を振り返り、「なぜ、現在ここにいない越北作家研究を専ら行っていたのか」という問題提起をし、韓国（南韓）文学史を構築した越南文人に関するプロジェクトと研究成果も現れている。興味深いのは、起点となった越北作家の研究時期は 1980 年代だったが、今はその 1980 年代が研究対象になって研究されており、当時最も研究されたテーマ「KAPF」が再び脚光を浴びるとともに、社会主義文学についての見直しも行われているということだ。

文化論的研究によって、韓国近代文学研究が社会学、歴史学との間を往還しながら範囲を広げていることが一つの成果だと言ってよいのは明らかだ。文化論的研究の関連授業を主に受けていたある大学院生が、自嘲的に「小説が好きで文学を研究しに大学院に来たが、雑誌を読んでいたら勉強に興味を失った。

14　韓水泳「想か倫理か――日帝末の文学を認識するエピステーメー」『人文論叢』66、ソウル大学人文学研究院、2011、412 頁。

この２年間、小説を正しく読んだり研究したりする方法を習ったことがない」と述べたのは多くのことを示唆している。もちろん筆者は当時、「雑誌の研究をしておけば、小説を読むのに大いに役立つ」と話した。それは当然のことだからだ。

筆者は文学（小説）研究者である。文学が人生の全分野にわたる以上、すべての学問が文学に関連していると言っても過言ではない。文化全般について考えることは、文学テキスト分析を深めるために必要な作業だ。2000 年以後、韓国近代文学の研究で、文化論的研究は既存の主流研究に問題提起し、これを批判する伝統的な文学研究家にテキスト分析を深めることがより重要だという認識を持たせたことを考えれば、相互扶助的な関係にあるといえるのではないだろうか。彼らによって小説のテキストを読む方法も多様化し、刺激を与えられてきたことを思えば、これも韓国近代文学研究の推進力だったと言えよう。

ただし、「これまでの文学史が排除してきたすべてのものを、素晴らしいと言って済ませるのでなく、問題として俎上にあげる」ことで、「既存の文学史に十分に取って代わり、同時に現在の統治性を解体しうるようなものを選びとり証明する必要がある」という、『文学史以後の文学史』に対するリュ・ボソンの指摘に留意する必要がある。これは文化論的研究を主とする研究者に求めるのではなく、このような問題意識を持った他の研究者群が行うべきことではないかと思われる。

（パク ジンスク　韓国・忠北大学校 教授）

Japanese Studies at Miami University of Ohio

Noriko T. REIDER

Miami University

Founded in 1809, Miami University of Ohio is recognized as one of the most outstanding undergraduate public institutions in the United States. Miami University has a student population of 19,000 and effectively combines a wide range of strong academic programs with the personal attention ordinarily found only at much smaller institutions. The institution is widely recognized as a Public Ivy, a public university that provides "an Ivy League collegiate experience at a public school price."[1]

The city of Oxford, the hometown of Miami University's main campus, is located in the southwest corner of Ohio, one hour by car from Cincinnati or Dayton. Oxford was named the nation's Best College Town in a study conducted by WalletHub and cited by Forbes in December 2016 (https://www.forbes.com/sites/karstenstrauss/2016/12/13/the-best-and-worst-college-towns-in-the-u-s/#33031fc4eee1). While Oxford is a college town, Ohio has a variety of Japanese businesses. Chief among them is a large Honda plant (and just across the border in adjacent Kentucky there is a large Toyota plant). As the attached Appendix 1 provided by the Japanese Consulate in Detroit in 2017 reveals, Japan is Ohio's leading foreign investor with 484 Japanese owned facilities. "The majority of Japanese facilities (271) are manufacturers, 50% of which are automotive-related. There are 108 commercial trade operations, accounting for 22% of all facilities." These facilities provide 77,073 direct jobs in Ohio—the highest state total in the Midwest. 98% of jobs at Japanese businesses in Ohio are held by local residents, 57% of which are in manufacturing. Southwest Ohio houses Japanese businesses in a diverse range of sectors including chemicals, pharmaceuticals and rubber.

With that in mind, I will discuss below Japanese Studies at Miami University where I have been working since 1997 as an example of what I perceive to be recent trends in Japanese Studies in the U.S.

---

1 According to the 2018 *U.S. News & World Report*, for example, Miami University is the highest ranking public university in the U.S. in the category of "Strong Commitment to Undergraduate Teaching."

History of Teaching Japanese and the Department of German, Russian, Asian, and Middle Eastern Languages and Cultures (GRAMELAC)

The teaching of Japanese at Miami University dates back to 1942 and was originally a student initiative. The first Japanese courses were taught as non-credit courses by a Hawaiian student stranded in Oxford after the attack on Pearl Harbor. By 1964, Japanese language and literature courses were consolidated with the Chinese to form the East Asian Languages and Literatures Department. In 1972, the East Asian Languages and Literatures Department joined the German and Russian language and literature classes to form the Department of German, Russian, and East Asian Languages (GREAL). The Korean language was added to GREAL's offerings in 1988. In 2014 the department's name was changed to German, Russian, Asian, and Middle Eastern Languages and Cultures (GRAMELAC) to more accurately reflect its offerings. As of the fall of 2018 GRAMELAC offers seven languages: Arabic, Chinese, German, Hebrew, Japanese, Korean, and Russian, and houses three majors—East Asian Languages and Cultures; German; and Russian, East European and Eurasian Studies—plus one co-major—Critical and Classical Languages and Cultures.

The Japanese Program and Enrollment

The Japanese program serves Miami University in various capacities. The program enables a large number of students to complete their College of Arts and Science language requirement; plays an important role in the University-wide requirements; and offers a well-subscribed minor and major. The Japanese minor has been in existence since 1990, and in 2005 an East Asian Languages and Culture (EALC) major with a Japan concentration[2] was approved and the first EALC major students graduated in 2007. In the spring of 2018 we have approximately 35–40 EALC majors with a Japan concentration and over 60 Japanese minors. This is strongly related to a surge in Chinese students' taking Japanese language and culture courses.

Miami University accepts many qualified international students, including a large number from China. The growth of international students was gradual until 2008, when Miami saw a noticeable increase in international students and the

2 East Asian Languages and Cultures major has two options for focus: China or Japan. EALC had originally three foci: China, Japan, or China-Japan combination. But because the number of majors focusing on China-Japan combination was low, the combination focus was eliminated in 2014.

number has rapidly grown since then. A major factor may be China's fantastic economic growth. In 2010 China became the world's second largest economy, surpassing hitherto number-two Japan. Interestingly, we see the Japanese language classes at Miami have increased in part because Chinese students, the leading number of Japanese learners worldwide, are enrolling in Miami Japanese program. According to The Japan Foundation survey conducted in 2015, among the language learners of Japanese in the world, the Chinese people number the most, 953,283, followed by Indonesian, 745,125, and Koreans, 556,237.[3]

In 1997 when I arrived at Miami University, the Japanese program had two tenure-track/tenured faculty members and one part-time instructor offering 6–7 classes per semester with an annual enrollment of 167. With an augmentation of Chinese students in the Japanese language courses, we started to average 250 students per year in the late 2000s. First-year Japanese courses are particularly popular and the number of sections increased from 3 sections to 4 in 2012, and then to 5 in 2014. The Japanese program continues to attract many Chinese students, with an enrollment of 424 in the academic year of 2017–2018. As the attached Appendix 2 provided by the Japanese Consulate in Detroit shows, the number of Japanese learners at Miami University in the fall of 2018 was second highest among state universities and colleges in Ohio. In recent years, Miami University's Japanese program has regularly offered 11–13 classes per semester, taught by 4–5 faculty members. Currently it offers an average of five sections of first-year Japanese per semester that enroll an average of 23–25 students[4] and three sections of second-year Japanese per semester, with an average enrollment of 18, and starting in the fall of 2018, two sections of third-year Japanese per semester, with an average enrollment of 22. Below are the enrollment figures and course offerings in the last five academic years plus 1997–1998, the year I came to Miami University:

---

3 Kaigai Kōryū Kikin, ed., *Kaigai no Nihongo kyōiku no genjō: 2015 nendo Nihongo kyōiku kikan chōsa yori* 海外の日本語教育の現状　2015年度日本語教育機関調査より (Tokyo: The Japan Foundation, 2017), 12.

4 This number far exceeds the optimal class size of 15 for a foreign language course. The Association of Departments of Foreign Languages (ADFL), in its guidelines for second-language teaching, "reaffirms its position that the maximum class size for foreign language instruction in classes where all four skills are equally stressed should not exceed twenty. We hold that the optimum class size is fifteen." "ADFL Guidelines for Class Size and Workload for College and University Teachers of Foreign Languages," *ADFL Bulletin*, vol. 40, nos. 2-3 (Winter-Spring 2009): 92–92 (1).

Japanese Language and Culture Course Enrollment Figures by academic year
(see Appendix 3 for the entire figures and graph since 1997)

2017–2018	249	175	424
2016–2017	200	175	375
2015–2016	219	129	348
2014–2015	197	146	343
2013–2014	154	142	296
1997–1998	86	81	167

Japanese Language and Culture Course Enrollment Figures by semester & course

2017–2018 (*number of sections)

Fall		Spring	
JPN 101 First-year Japanese (5)	107	JPN 102 First-year Japanese (4)	69
JPN 201 Second-year Japanese (3)	51	JPN 202 Second-year Japanese (3)	47
JPN 301 Third-year Japanese	23	JPN 302 Third-year Japanese	22
JPN 401 Fourth-year Japanese	18	JPN 402 Fourth-year Japanese	17
JPN 231 Japanese Tales of the Supernatural	24	JPN 381 Intro. to Japanese Linguistics	20
JPN 260C Japanese Civilization	26		
Total	249		175

2016–2017

Fall		Spring	
JPN 101 First-year Japanese (5)	106	JPN 102 First-year Japanese (4)	72
JPN 201 Second-year Japanese (2)	37	JPN 202 Second-year Japanese (2)	37
JPN 301 Third-year Japanese	17	JPN 302 Third-year Japanese	12
JPN 401 Fourth-year Japanese	14	JPN 402 Fourth-year Japanese	8
JPN 231 Japanese Tales of the Supernatural	26	JPN 260E Japanese Pop Culture	28
		JPN 266 Survey of Japanese Cinema	18
Total	200		175

2015–2016

Fall		Spring	
JPN 101 First-year Japanese (6)	126	JPN 102 First-year Japanese (4)	52
JPN 201 Second-year Japanese (2)	36	JPN 202 Second-year Japanese (2)	29
JPN 301 Third-year Japanese	24	JPN 302 Third-year Japanese	15
JPN 401 Fourth-year Japanese	12	JPN 402 Fourth-year Japanese	12
JPN 255 Drama in Chinese and Japanese	18	JPN 260C Japanese Civilization	21
Total	216		129

2014–2015

Fall		Spring	
JPN 101 First-year Japanese (5)	96	JPN 102 First-year Japanese (4)	49
JPN 201 Second-year Japanese (2)	40	JPN 202 Second-year Japanese (2)	35
JPN 301 Third-year Japanese	23	JPN 302 Third-year Japanese	16
JPN 401 Fourth-year Japanese	13	JPN 402 Fourth-year Japanese	8
JPN 231 Japanese Tales of the Supernatural	25	JPN 260B Modern Japanese Literature	18
		JPN 279 Buddhism and Culture	20
Total	197		146

2013–2014

Fall		Spring	
JPN 101 First-year Japanese (3)	69	JPN 102 First-year Japanese (3)	56
JPN 201 Second-year Japanese (2)	38	JPN 202 Second-year Japanese (2)	37
JPN 301 Third-year Japanese	18	JPN 302 Third-year Japanese	17
JPN 401 Fourth-year Japanese	9	JPN 402 Fourth-year Japanese	10
JPN 279 Buddhism and Culture	20	JPN 266 Survey of Japanese Cinema	22
Total	154		142

1997–1998

Fall		Spring	
JPN 101 First-year Japanese (3)	54	JPN 102 First-year Japanese (2)	33
JPN 201 Second-year Japanese	8	JPN 202 Second-year Japanese	9
JPN 301 Third-year Japanese	15	JPN 302 Third-year Japanese	12
JPN 401 Fourth-year Japanese	4	JPN 402 Fourth-year Japanese	2
JPN 282 Japanese Language & Culture	4	JPN 260 Topics in Japanese Literature	25
Total	86		81

As the numbers above indicate, the retention rate from JPN 101 to JPN 102 is not very high. JPN 101 sections are overwhelmingly Chinese students and regularly start at over-capacity and force-add requests. Many Chinese students take Japanese language because they are interested in Japanese language and culture, but we believe that some students think Japanese may be easy for them because the Japanese written language uses *kanji* (Chinese characters). Upon enrollment, however, with quizzes and homework in every class plus exams and essays, drilling with the four skills of speaking, listening, reading, and writing, they find it otherwise. Further, when the program can offer two literature/culture courses compared with just one course, the enrollment increases. The Japanese pop culture course is particularly popular among learners of Japanese language. Indeed, many students of Japanese learners are interested in Japanese pop culture.

In the 1990's, many students taking Japanese language classes were interested in business, especially related to electronics and auto industries. Ezra Vogel's book *Japan as Number One* (1979) by Harvard University Press was still influential, even though by the 1990's Japan's economy had stagnated. Since then, however, the student interest in taking Japanese has shifted from business to Japanese pop culture. This is a nationwide trend. According to the survey in 2015–2016 by Amanda Rollins, Program Coordinator for Japanese language education programs at the Japan Foundation, Los Angeles, "Interest in Japanese pop culture (anime/manga) has become the most popular reason to study Japanese for learners, followed by interest in Japanese language and then in culture (history, literature, art)."[5] Many of our Japanese majors or minors want to be translators of anime, manga, and TV drama. Japanese soft capital greatly influences the number of enrollments.

Decreasing Number of Faculty Specializing in Japan at Miami University

While the increase in Japanese enrollment is heavily influenced by the Chinese students, China's economic power has had much stronger impact on the Chinese program, a partner of the Japanese program in the EALC major. It has grown significantly in the past 20 years. In 1997 there was only one Chinese faculty member who taught 6 courses a year with an enrollment of 60. Currently the Chinese Program consistently offers 14–15 classes taught by 5–6 faculty members with an enrollment of 240 per semester, but at its peak in the fall semester of 2013, the Chinese program offered 21 classes with an enrollment of 355.

In fact it was not only within the GRAMELAC Chinese program, but as a university-wide response to the expanding economic and political influence of China, hiring of faculty specializing in China occurred. This has had an interesting impact on the Japanese curriculum of EALC major with Japan focus. EALC major requirements in both the China and Japan concentrations, consist of three tiers: 1. language requirements; 2. literature and culture requirements offered by our programs (Chinese or Japanese) within GRAMELAC; and 3. related course hours offered outside of GRAMELAC. In the third tier, while the number of China-related courses has increased, that of the Japan related courses has steadily declined because departing or

5 *The Japan Foundation Survey on Japanese Language Education Institutions 2015: U.S. Data* (The Japan Foundation, Los Angeles, 2017), 10. Also see Richard Torrance, "Japanese Studies and Area Studies at the Ohio State University," in *Sekai no nihon kenkyū* 2017 世界の日本研究 2017, edited by Nanyan Guo 郭南燕 (Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 2017), 152.

retiring faculty specializing in either Japan or Japan and China have been replaced by either China or other specialty scholars—or not replaced at all.[6] Since mid-2000, professors who could teach Japan related courses in the departments of Sociology, Religion, Political Science, Art, and Architecture have retired and the number who could teach Japan-related courses was at one point reduced to one—a Chinese professor who can teach modern Japanese history. Depletion of the ranks of faculty simultaneously reduced the number of courses available to EALC majors with a Japanese concentration in the third tier. The Chair of GRAMELAC has been extremely supportive and responsive, and she has asked the Chairs of other departments to consider offering Japan-related courses. Fortunately, the Anthropology department responded to our pleas and created a popular course, "Pokémon: Local and Global Cultures." Now, however, we have learned the Chinese history professor retires at the end of Fall Semester 2018, heavily affecting not only the Japanese program but Chinese program as well. To sustain programs, university-wide curricular support is critical.

Future Plans and Prospects of Japanese Studies

In spite of a robust enrollment, the Japanese program can regularly offer only one (and a maximum of two) literature or culture courses (i.e., selected tier, selected courses), because the program has to offer a large number of language classes and staffing is limited. Bright news in this time of budgetary constraint is that the persistent effort of the Chair of GRAMELAC made it possible to obtain a lecturer position for the Japanese program. With a new continuing faculty who was formerly a visiting instructor, the Japanese program has secured a higher level of continuity and stability. Utilizing the lecturer's expertise, the program will be able to offer a Japanese course on business or business translation that will give our students an additional path for career/internship. As the number of Chinese students who want to major or minor in Japanese increases, so do the requests to study Japanese in Japan during the summer. The Japanese faculty members are working on the creation of a summer program in Japan to accommodate such students' needs.

---

6 Once Miami boasted small classes but currently a class with an enrollment less than ten is cancelled. It has become a new norm that once a faculty member retires, the line is not replaced unless the line has a dire need. Having said that, while a host of other state universities in Ohio have struggled in the face of budget cuts and elimination of departments, Miami University is doing well in spite of Ohio state funding being reduced to 10 percent of the whole university budget in 2017–2018.

Further, through the Office of Global Initiatives, Miami University is going to implement a dual-degree program with Kansai Gaidai University (KGU), one of Miami University's oldest official exchange programs. Miami University students who spend their junior year in Kansai Gaidai University studying Japanese and Japan-related subjects can earn both Miami University and Kansai Gaidai University credits towards graduation at both institutions. This dual-degree program would serve as an excellent opportunity for students who want to immerse themselves longer term in Japanese language and culture with broader Japanese related course options and seek employment globally with dual degrees from the two different countries. With these exciting plans and projects on hand, the Japanese program, though small, remains strong. The number of enrollment for Japanese courses is expected to stay healthy for a foreseeable future.

It is a general trend in higher education that high-demand career paths such as engineer and business are more emphasized. The humanities seem to take a back seat, even though "When you cut the humanities, what you lose is the human."[7] Miami University is fortunate to have an excellent Humanities Center in the College of Arts and Science, dispatching cutting edge intellectual trends in the humanities to faculty and students. We teach our students critical thinking, understanding context, engaging with other learners, and reflecting and action, core elements of liberal education. Having said that, as Richard Torrance of the Ohio State University says on the employment of possibilities for students of Japanese studies, "it is probably wise to advice undergraduates and graduate students to be flexible and attempt to master more than one discipline."[8] The majority of our Japanese majors have more than one major and we encourage our students to explore various opportunities. Miami University provides both career and internship counselling. By the time they graduate, students are equipped with language skills and cultural knowledge, and equally importantly skills of critical thinking and engaging with other people, ready to launch a career of their choice. Our alumni with Japanese majors and minors are active in the fields of education, government, and international business among others.

(Professor, Miami University, U.S.A.)

---

7 Cynthia Nazarian, "When you cut the humanities, what you lose is the human," *The Hill*, April 5, 2018. http://thehill.com/opinion/education/381677-when-you-cut-the-humanities-what-you-lose-is-the-human. Accessed June 17, 2018.

8 Torrance, "Japanese Studies and Area Studies at the Ohio State University," in *Sekai no nihon kenkyū 2017*, edited by Nanyan Guo, 157.

2017 Japanese Direct Investment Survey: Summary of Ohio Results
(as of October 1, 2017)

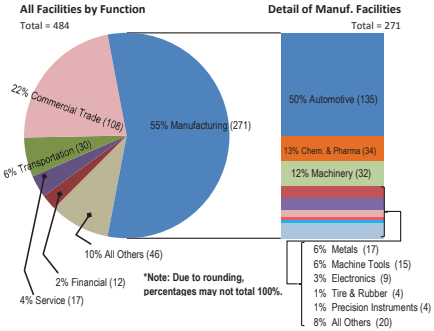
The Consulate General of Japan in Detroit annually surveys Japanese-owned facilities and Japanese nationals in Ohio. As the 2017 data indicate, Japanese investment contributes significantly to state and local economies

- 484 Japanese owned facilities in Ohio
- 77,073 direct jobs; highest total in the Midwest
- Annual employment growth since 2010
- Japan remains Ohio's leading foreign investor

FACILITIES

The majority of Japanese facilities (271) are manufacturers, 50% of which are automotive-related. There are 108 commercial trade operations, accounting for 22% of all facilities.

Figure 1: Japanese Facilities by Sector



GEOGRAPHIC DISTRIBUTION

Central Ohio's 139 facilities, which provide 31,415 (40% of total) jobs, are mostly automotive production related. Other areas of the state, such as the southwest and northeast, are home to Japanese businesses in a diverse range of sectors including chemicals, pharmaceuticals and rubber.

Figure 3: Japanese Investment by Region (Top Counties)

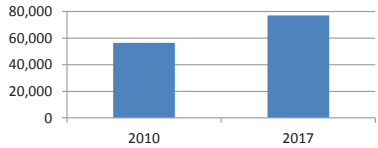
Region	Facilities	Total Employees	Manufacturing Employees
Central	139	31,415	14,655
・Franklin County	87	6,236	2,152
・Union County	15	10,185	3,380
Southwest	106	7,005	3,147
・Hamilton County	54	2,338	619
Northeast	100	8,033	3,390
・Cuyahoga County	42	2,137	425
Northwest	49	9,931	7,550
・Hancock County	10	2,553	1,784
Western	78	19,449	13,644
・Montgomery County	17	3,387	2,431
Southeast	11	1,222	648

*Note: Due to privacy requests, some facilities may not be included in this chart.

EMPLOYMENT

98% of jobs at Japanese businesses in Ohio are held by local residents, 57% of which are in manufacturing. Total employment has grown 36% since the Great Recession, surpassing the pre-recession peak in 2012 and continuing to grow in the years since.

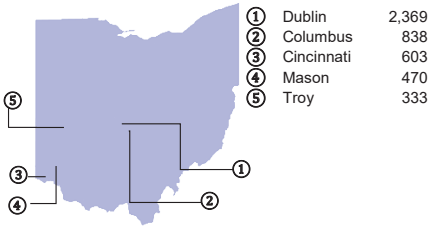
Figure 2: 2010 v. 2017 Employment Comparison



JAPANESE POPULATION

As of January 2018, there are 13,564 Japanese nationals in Ohio, most of whom reside in the central region of the state.

Figure 4: Japanese Population (Top 5 Cities)



Japanese Education in Ohio

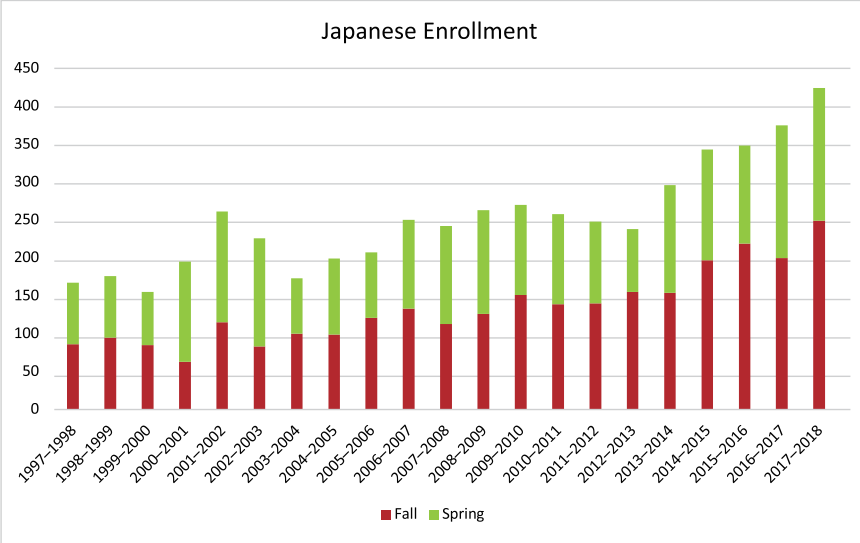
23 Universities and Community Colleges (Fall 2018)			
City	University	Japanese language courses	
		Total students enrolled	Total number of classes
Columbus	**Ohio State University**	365	24
Oxford	**Miami University**	210	11
Toledo	**University of Toledo**	178	15
Cincinnati	**University of Cincinnati**	171	11
Kent	**Kent State University**	158	10
Athens	**Ohio University**	140	8
Cleveland	**Case Western Reserve University**	133	11
Alliance	**University of Mount Union**	102	5
Oberlin	**Oberlin College**	95	9
Columbus	**Columbus State Community College**	87	4
Bowling Green	**Bowling Green State University**	85	4
Akron	**University of Akron**	80	4
Granville	**Denison University**	35	2
Cleveland	**Cuyahoga Community College**	34	2
Delaware	**Ohio Wesleyan University**	32	3
University Heights	**John Carroll University**	32	4
Gambier	**Kenyon College**	31	3
Cincinnati	**Xavier University**	29	2
Springfield	**Wittenberg University**	25	4
Findlay	**University of Findlay**	23	4
Dayton	**Sinclair Community College**	20	1
Dayton	**Wright State University**	15	1
Yellow Springs	**Antioch College**	9	2
	TOTALS	**2,089**	**144**

K-12 Schools (Fall 2018)		
	Total Number of **Schools**	Total **students** enrolled
	23	**1,168**
High School	14	773
Elementary and Middle School	9	395

Appendix 3

Japanese Language and Culture Course Enrollment Figures since 1997

	Fall	Spring	Academic year
2017–2018	249	175	424
2016–2017	200	175	375
2015–2016	219	129	348
2014–2015	197	146	343
2013–2014	154	142	296
2012–2013	155	83	238
2011–2012	140	108	248
2010–2011	139	119	258
2009–2010	151	119	270
2008–2009	126	137	263
2007–2008	113	129	242
2006–2007	133	117	250
2005–2006	121	86	207
2004–2005	99	100	199
2003–2004	100	73	173
2002–2003	83	143	226
2001–2002	115	146	261
2000–2001	63	132	195
1999–2000	85	70	155
1998–1999	95	81	176
1997–1998	86	81	167



中国における日本研究の現状
――歴史・文化を中心に――

孫　春日

日中関係の歴史的な特殊性のために、中国学術界において日本研究は一貫して極めて重要な位置を占めてきた。すなわち、研究者の多さ、研究分野の幅広さ、研究の歴史の長さといった特徴を有している。また全国的な学会や専門的な学術誌も存在する。中国の日本研究については、李威編『当代中国的日本研究〔現代中国の日本研究〕(1981–2011)』(中国社会科学出版社、2012年)に続き、中国社会科学院日本研究所『日本学刊』編集部編『中国的日本研究著作目录〔中国の日本研究著作目録〕(1993–2016)』(2017年)において、より詳細な紹介がなされている。本目録は中国社会科学院の重点プロジェクトの成果の一つであり、日本の歴史、政治、外交、経済、社会、文化、文学、芸術などの研究に関する4716冊の著書目録を作成し、検索の便宜を図っている。本稿では先行研究との重複を避けるべく、主として歴史と文化に関する中国学界の日本研究について紹介したい。

現在、中国には「中国日本史学会」という全国的な日本史研究の学会がある。1980年に設立された本学会は、中国における日本史研究者の唯一の学術団体として、300人以上の正会員を有している。学会設立の趣旨は、中国における日本史研究者を結集し、日本史研究を幅広く推進し、より多くの研究成果を生み出し、日中双方の相互理解と交流に寄与する、となっている。本学会には、古代史委員会、近代史委員会、戦後史委員会、政治社会科学委員会、経済技術委員会、対外関係専門家委員会、中国思想文化史専門家委員会、青年研究者交流委員会など9つの専門委員会と、海外連絡部、書籍出版情報交換部の2つの部署が設置されている。

中国の日本史研究者は、主に北京、上海、天津、吉林、遼寧、延辺などいくつかの省と都市に分布している。なかでも、中国社会科学院の近代史研究所と世界史研究所、および北京、上海、天津、吉林、遼寧各省、市所在の社会科学院には専門の研究者が集中している。そして、北京大学、南開大学、天津大学、

遼寧大学、吉林大学、東北師範大学、延辺大学、浙江工商大学をはじめとする数多くの大学にも多数の日本史研究者が在籍している。それらの大学のうち、南開大学日本研究院は中国で唯一の研究院レベルの総合的な日本研究機関として、ハイレベルな人材を育成し、これまで多くの研究成果を発表し、中国における日本研究の中心的な役割を果たしてきた。現在、中国の各社会科学院は主として日本史研究に従事する専門研究者を集めているのに対して、これらの大学では研究のみならず、博士課程・修士課程の大学院生を育成している点も指摘しておきたい。

なお、中国における日本研究の専門学術誌として、中国社会科学院日本研究所が主管する『日本学刊』という刊行物と、同近代史研究所が主管する『抗日斗争研究〔抗日闘争研究〕』という刊行物がある。これらは中国における日本の歴史・文化研究に大きな影響力を持つ専門学術誌である。このうち『日本学刊』は総合学術誌として、日本の政治、文化、経済、歴史などに関する幅広い主題を掲載しているのに対して、『抗日斗争研究』は主として日本の中国侵略戦争の歴史や、中国の抗日闘争に関する研究を発表する場となっている。この他にも、『世界史研究』、『中国近代史研究』、『社会科学战线〔社会科学戦線〕』といった全国レベルの学術誌にも、日本研究に関する論文が掲載されることがある。さらに、日本史研究に関する論文を最も多く掲載している刊行物は中国各大学の紀要類であり、重要な役割を果たしている。例えば、南開大学日本研究院が発行する『南开日本研究〔南開日本研究〕』は、中国の日本研究に大きな影響を与えている。

具体的な研究成果について見よう。中国の改革開放以来、少なくない日本の歴史と文化に関する研究が発表されてきた。例えば、中国社会科学院が主管し編纂した『中日历史研究中心文库〔日中歴史研究中心文庫〕』というシリーズでは、これまで 67 冊に上る著書が出版され、南開大学日本研究院が編纂した『南开日本研究丛书〔南開日本研究叢書〕』では 37 冊の著書が出版された。復旦大学日本研究中心の『日本研究丛书〔日本研究叢書〕』でも 20 種類以上の研究成果が発表された。とりわけ、社会科学文献出版社が 2001 年から出版し始め、2016 年に完結した『中日历史研究中心文库〔日中歴史研究中心文庫〕』は、中国各地の社会科学院、大学から著名学者を結集して、日本の歴史と文化に関する研究を進め、これまでの中国における最も代表的な日本研究の成果と言えよう。このように、中国の改革開放以来、中国学界における日本研究はすでに多大な成

果を挙げてきたことは疑いないと思われる。そこで、それらの研究成果をより詳細に検討すれば、以下の三つの特徴を指摘しうる。

まず、中国の改革開放後しばらくは日中関係が良好だったこともあり、通史的な著作が継続的に出版され、中国人学者が日本の歴史を研究する基礎が確立された。代表的な著書としては万峰『近代日本史』（中国社会科学出版社、1978年）、王金林『簡明日本古代史』（天津人民出版社、1984年）、呂万和『簡明日本近代史』（天津人民出版社、1984年）、趙建民・劉子葦『日本通史』（復旦大学出版、1989年）などが挙げられる。これらにより中国本土の学者による一般的な日本通史、各時代史が揃ったと言えよう。

この時期は、日中関係が順調に発展し、両国の学界間の交流も活発化したことで、日本史を研究する研究者の数も、その研究成果も漸増していった。このような状況のなかで、中国歴史学界の第一世代ともいえる研究者のなかから、今後の中国における日本史研究に対する注目すべき史学理論と研究方向について、いくつか意見が提示され、日本人学者の歴史観と学派に関する紹介と評価が始まった。その代表的な論文としては、北京大学歴史学部の沈仁安と宋成有による「明治维新与近代日本史学〔明治維新と近代日本史学〕」『世界歴史増刊・明治维新再探讨』（1981年）、「近代日本的史学和史观〔近代日本の史学と史観〕」『国外史学動态』（1983年第8期）、沈仁安訳「数量方法与美国历史学〔計量分析と米国の歴史学〕」『国外社会科学動态』（1983年第8期）、沈仁安「日本史学新流派分析〔日本史学の新学派分析〕」『歴史研究』（1983年1月）、同「日本史学流派的现状与趋势〔日本史学の学派の現状と動向〕」『国外史学動态』（1983年第14期）、「现代历史学与数量方法〔現代歴史学と数量方法〕」『国外社会科学动态』（1984年第8号）などがある。また沈仁安は「新的社会科学方法及其特征〔新しい社会科学の方法とその特徴〕」『国外社会科学动态』（1984年第1期）、同「开展日本史学史研究的几点意见〔日本史学史研究の展開に関するいくつかの意見〕」『史学史研究』（1985年第2号）、「历史学的思索〔歴史学の思索〕」『史学理論』（1988年4月）などの論文を通じて、日本の歴史学理論と研究方法の現状、および発展動向について評価した。

これらの論文で、沈仁安らは中国学界において日本史を研究する場合、中国の特徴を備えた研究体制を構築し、中国史学界の独自の立場、視線を確立することについていくつかの提案を行っている。すなわち、第一に、中国での日本史研究は、必ず中国の大地に立ちながら東隣の日本を見、中国人としての視点

を持ったものでなければならないこと、第二に、中国人の伝統的な「全方位的思考」方法を遵守し、中国人学者の独自の研究理論と歴史観に立脚して日本史を研究し、中国人学者の度量と分析能力を発揮すべきこと、第三に、日本史研究に対する中国人独自のメリットを活かすべきこと、例えば、中国には2千年間にわたる歴史史料が蓄積されているとともに、考証学などの伝統的な研究方法がある。第四に、研究と応用を組み合わせて、外国の歴史の経験を学び活用すべきこと、第五に、日本語の漢字の語彙をそのまま模倣するのではなく、流暢で正確な中国語で論文を書き、論文に“外国語”が溢れることを避けるべきこと、などである。

次いで、小泉純一郎、安倍晋三が相前後して首相に就任すると、日中関係は悪化したが、これにともない、中国史学界の日本史研究は、それまでの古代の文化交流や一般的な通史から、日中関係上のデリケートな問題となっている南京大虐殺、七三一部隊、性奴隷（いわゆる慰安婦問題）、日本の政治家の靖国神社参拝、釣魚島をめぐる領土権問題などへとその焦点を移していった。

この時期の研究の特徴は、幅広い領域にわたり、研究成果の量も膨大であるが、そのほとんどが日本の中国侵略の歴史を明らかにすることを目的としている点で共通している。例えば、近年発表された代表的な成果だけ見ても、史桂芳『同文同种的骗局〔同文同種の欺瞞〕』（中国社会科学文献出版社、2002年）、史丁『日本关东军侵华罪恶史〔日本関東軍の中国侵略罪悪史〕』（中国社会科学文献出版社、2005年）、王希亮『战后日本政界战争观研究〔戦後日本政界の戦争観研究〕』（中国社会科学出版社、2005年）、步平『跨越战后日本的战争责任〔戦後日本の戦争責任を越えて〕』（中国社会科学出版、2011年）、殷夏『伪满历史文化与现代中日关系〔偽満歴史文化と現代日中関係〕』（商务印书馆、2014年）、戚其章『甲午战争史〔日清戦争史〕』（上海人民出版社、2014年）、李継鋒『中国抗日战争全记录〔中国抗日戦争全記録〕（1931-1945）』）（21世紀出版社、2014年）、上海市档案馆『日本侵略上海史料汇编』全3冊（上海人民出版社、2015年）、王暁峰『伪满时期日本对东北的宗教侵略研究〔偽満時期日本の東北に対する宗教侵略研究〕』（中国社会科学文献出版社、2015年）、張国通『二战时期日本强征“慰安妇”罪行采访纪实〔第二次大戦期日本強制慰安婦罪行インタビュー〕』（中華書局、2015年）、王向遠『日本对中国的文化侵略〔日本の中国に対する文化侵略〕』（昆侖出版社、2015年）、陸奥宗光『日本侵略中国外交秘史』（龔徳柏訳、河南省人民出版社、2016年。原著は陸奥『蹇蹇録』）、江口圭一『日本十五年侵略战争史：1931–1945』（楊棟梁訳、江蘇

人民出版社、2016年。原著は江口『十五年戦争小史』)、何建明『南京大屠杀全纪实〔南京大虐殺全記録〕』(江蘇教育出版社、2016年)、朱新偉『绝对欲望，绝对奇异：日本帝国主义的生生死死〔絶対的欲望、絶対的奇異：日本帝国主義の生と死〕1895–1945』(中央编訳出版社、2017年)などが挙げられる。中国人歴史学者のこれらの成果は、中国に対する日本の侵略過程を総合的に研究したものであり、中国社会における抗日の記憶を喚起することに相当の役割を果たした。

最後に、日中関係の影響を受けて中国学界における日本研究の焦点がどのように変化したとしても、ある一貫した特徴を有していることを指摘しなければならない。それは日本の思想と文化に対する研究は中断されたことがなかったという点である。また、他の分野に比べ、これらの分野は学術的に良質の成果をあげたといえる。例えば、王金林『日本天皇制及其精神结构〔日本天皇制とその精神構造〕』(天津人民出版社、2001年)、同『日本人的原始信仰〔日本人の原始信仰〕』(寧夏人民出版社、2005年)は、豊富な資料によって多面的に日本人の精神世界を提示することに成功した。また、宋成有『新编日本近代史』(北京大学出版社、2006年)は、可変性と連続性という観点から、近代日本の発展に影響を与えた多様な問題について新たな解釈を試みている。周松倫『近代日本社会转型期研究〔近代日本社会の転換期研究〕』(東北師範大学出版、1998年)、李文『武士阶级与日本的近代化〔武士階級と日本の近代化〕』(河北人民出版社、2006年)は、日本の近代化に対する独自の見解を提示した研究といえよう。また楊棟梁『日本现代化历程研究丛书〔日本近代化過程研究叢書〕』(世界知識出版社、2010年)は、近代化論の観点から、全体性、体系性、学術性の結合の原則に基づき、より豊富な史料を活用して経済、社会、文化、外交の諸側面から、19世紀以来の日本近代化の内部要因と外部要因について検討した。韓東育『日本近世新法家研究』(中華書局、2003年)は、日本近世の儒学を東アジアの視点から考察し、主に日本の「脱儒入仏」の過程について論じている。また、李卓『“儒教国家”日本的实像〔「儒教国家」日本の実像〕』(北京大学出版社、2013年)、劉金才『町人伦理思想研究：日本近代化动因新论〔町人倫理思想研究：日本近代化動因新論〕』(北京大学出版社、2001年)、叶渭渠『日本文化史』(広西師範大学出版社、2010年)、叶渭渠・唐月梅『日本文学史　近古卷上・下』(昆侖出版社、2003年)、趙徳宇『西学东渐与中日两国的对应〔西学東漸と日中両国の対応〕』(世界知識出版社、2001年)、劉岳兵『日本近代儒学研究』(商務印書館、2003年)などの著書も学界に大きな影響を及ぼした。

以上のように、中国学界による日本の歴史研究は、全体的には一定の成果を挙げているといってよいが、見過ごせない問題も多い。例えば一部の研究には研究者の問題意識や、独自の研究視角が明示されているのに対して、少なくない著書、論文がなお単なる日本の研究の紹介ないしは模倣にとどまっている点である。また、壮大な研究テーマに比して具体的な研究内容に乏しいものや、緻密な論証に欠けるものも存在している。特に、早急とも思われる各種「叢書」のなかには、質的に問題を残した研究も散見される。したがって、今後、何よりも必要なのは研究者の問題意識が深度ある実証研究をともないつつ、現在の中国の特性に適合した日本史研究の方法と理論を構築することを通じて、研究の質を向上させることであろう。それこそが現代中国の日本研究者が直面している長期的な課題である。

（そん しゅんじつ　中国・延辺大学人文学院 教授）

中国における日本古代史研究の現状と課題

王　海燕

中国の日本史研究において、古代史とは従来から古代と近現代の二区分法によって、広く原始から江戸時代までを含める歴史、すなわち前近代史を指すものとして定義される傾向が根強かったが[1]、最近では、日本の時代区分の影響を受け、原始から平安時代にかけての歴史として限定されることもある。本稿では、筆者自身の研究分野に基づいて、古代を3世紀から11世紀後半までの時代としたい。

現在の中国では、日本の歴史や文化に興味を持つ人が、とりわけ若者に増えつつあるが、近現代史の研究に比べると、日本古代史は研究者の人数も活躍も低空飛行となっていると言える[2]。しかしながら、少人数でも研究が進んでいる。本稿では、中国の日本古代史研究の現状と課題について述べてみたい[3]。

1　例えば、2006年12月から2009年12月にかけての日中共同歴史研究は前近代と近現代という二つの時期に分けて行われていたが、2014年に中国で出版された『中日共同歴史研究報告』は、中国の学界の習慣的な観念に関する編集者の考慮によって、「古代史巻」と「近代史巻」という2冊に分けられた（歩平・北岡伸一編『中日共同歴史研究報告』社会科学文献出版社、2014年）。

2　注1に述べた日中共同歴史研究を例としてあげると、2006年12月に両国の研究者（各々10名）で構成された共同委員会には古代・中近世と近現代という二つの分科会が設けられたが、その中で、古代・中近世分科会における中国側のメンバーは4人しかおらず、かつ全員が近現代史の研究者である。その後、共同研究者として外部執筆者11名が加えられたが、前近代史の分野の研究者は二人しか招かれなかったのが現実である。この状況は、共同委員会メンバーが双方の各政府に選ばれたという事情に理由があるのみならず、中国における日本古代史研究の不振をも裏付けるであろう。

3　最近、中国の研究者の著わした日本語の日本古代史論文は日本で刊行されたことも少なくないが、言語によって研究の手法などがある程度異なるので、ここでは中国で発表された中国語の日本古代史の研究成果のみを基に述べることにしたい。また、台湾と香港の研究者の研究成果について、筆者の参照できる資料は限られるので、敢えて触れない。

1. 1980年代の日本古代史研究

1980年代は中国の日本古代史研究がもっとも勃勃たる時期であった。この時期の成果に関しては多く紹介されているため、ここでは簡略に触れよう[4]。

周知のように、中国史学界においては、長い間にわたって、マルクス主義歴史学が主流を占めており、生産力と生産関係との関係や階級間の関係を軸として国家の形成や社会制度の変化を解釈する研究が中心であった。その結果、1980年代、日本古代史研究者は主に、日本列島の国家形成および3世紀から7世紀までの社会の性格に注目し、邪馬台国、部民制、大化改新、班田制などのテーマを中心に、日本列島の国家起源や奴隷制・農奴制・封建制の時代区分をめぐって、論著や研究会を通じて学術的な議論を行い、数々の研究成果を上げた[5]。

中国の日本史研究者のほとんどは大学系と社会科学院系という二つの組織のいずれかに所属している。1980年代には、関連史料の所蔵地の関係で、日本史研究も日本古代史研究も、その研究拠点は、ほぼ北京・天津・瀋陽・長春にある社会科学院や大学に置かれていたため、研究者の分布も北京・天津・東北地方に集中した。例えば1988年から1990年にかけて、中国の研究者たちが著して日本で出版された『東アジアのなかの日本歴史』シリーズ（六興出版社）は、執筆者15名が全員北京・天津・東北地方の研究者であった。ちなみに、このシリーズ全13巻の中に古代史は2巻（沈仁安『倭国と東アジア』、王金林『奈良文化と唐文化』）ある。執筆者二人は当時の中国における日本古代史の中堅研究者であり、この二人が執筆したことは当時の日本古代史研究の活況を反映したものと言えるが、その書名からは、古代日中関係や日中文化交流も中国の日本古代

4　1980年代の中国の日本古代史研究に関して、日本語の紹介や評論には、武光誠「中国人の日本古代史研究の歩み」『明治学院論叢』375号、1985年3月、徐建新「1978年以来の中国における日本古代史研究の成果と課題」鈴木靖民訳『国学院雑誌』89-6、1988年6月、李卓「近年中国学者の日本古代史研究」『史苑』50-2、1990年5月など、中国語で論及されたものには、李玉ほか編『中国的日本史研究』世界知識出版社、2000年、徐建新「30年来的中国日本古代中世紀史研究」『日本学刊』2011年第3期、王金林「六十年来中国日本史研究的回顧」李卓編『南開日本研究2013』世界知識出版社、2013年などがある。

5　例を挙げると、汪向栄『邪馬台国』中国社会科学出版社、1982年、王金林『簡明日本古代史』天津人民出版社、1984年、禹碩基『日本大化革新』商務印書館、1985年などがある。

史研究者に注目されていたことが窺われる[6]。

この時期の古代日中交流に関する研究は主に鑑真と遣唐使という二大テーマを軸に展開した。その中には、唐文化に対する日本の受容の姿勢を強調しながら、鑑真、阿倍仲麻呂、吉備真備、藤原清河、最澄、空海、円仁などの人物像を描出したものも少なくない[7]。

2. 1990年代以来の日本古代史研究の特徴

1990年代以後、中国の日本史研究は新しい段階に入り、日中学術交流の繁栄とともに、日本学界の研究視点や研究方法の影響を徐々に受けるようになった。これによって古代史研究のテーマは、国家形成、身分制、律令制、天皇制から都城制、儀礼、婚姻、信仰、技能、人と物の移動などさまざまな分野に及んだ。多くの研究成果が刊行されているが、その特徴は大きく下記のようにまとめることができる。

第一に、日中関係史または日中文化交流史の研究が多いこと。

古代の日中関係史は、従来から日本史研究の中でも重点が置かれ、邪馬台国・曹魏関係や遣隋使の国書問題や日唐関係などは、日本史研究者のみならず、中国史研究者にも関心が高い。1990年代に入ると、単なる日中関係の論述に限らず、朝鮮半島の情勢をも考慮しつつ、東アジアの視点で古代日本の内政や国際的環境との連動性なども視野に入れながら、遣唐使の派遣や白村江の戦いや日宋関係などが検討されている[8]。

渤海国史研究においても、日本と渤海国の関係が唐日・唐渤関係の延長線として、特に中国の東北地方の研究者に注目され、日渤両国それぞれの外交的思

6　『東アジアのなかの日本歴史』シリーズは日本語版だけで、中国語訳版はない。

7　夏応元「対清代以前中日関係的研究」李玉ほか編『中国的中日関係史研究』世界知識出版社、2000年参照。

8　夏応元「遣唐使初期倭国的対外政策」王金林・湯重南編『走向国際化的日本——国際学術研討会論文集』天津人民出版社、1995年、沈仁安「唐日関係的若干問題」前掲『走向国際化的日本——国際学術研討会論文集』、韓昇「白江之戦前唐朝与新羅、日本関係的演変」『中国史研究』2005年1期、劉恒武「五代時期呉越国與日本之間的「信函外交」」『社会科学戦線』2009年第1期、王小甫「七世紀東亜国際秩序的創立」前掲『中日共同歴史研究報告』古代史巻、馬雲超「高麗文宗「請医事件」與宋日関係——11世紀後期日本外交的一個側面」『世界歴史』2017年第1期など参照。

惑や経済的・文化的交流などについての研究が進んでいる[9]。

また、1980年代から、中国の日本古代史の研究者も高句麗好太王碑（広開土王碑）に目を付け、4世紀末から5世紀初の倭国と朝鮮半島の関係を分析した[10]。とりわけ好太王碑の拓本に関する徐建新氏の研究は特筆に値する[11]。

1990年代以降、日中文化交流史の研究は著しく発展してきた。1996年、周一良・中西進編『中日文化交流史大系』シリーズ（全10巻、中西進・周一良編『日中文化交流史叢書』の中国語訳）が中国で出版されて以来、思想文化交流、人物往来、中日の習俗比較などの側面から、各時代の中日交流史の研究が進んでいる。古代史の分野では、日本文化の独自性を論じた研究もあるが、古代の日本文化における中国文化の影響及びその変容を論じる傾向が強いと言える[12]。

なお、2004年に日本の遣唐留学生あるいは官吏だった井真成の墓誌が発見され、中国の学界においてもこれに関連する研究が一時的に盛んになった。しかし、唐代史の研究者に比べると、日本古代史の研究者による研究成果は少ない

9　馬一虹「浅論渤日邦交的歴史条件」『日本研究』1993年第4期、孟東風「古代渤海與日本的文化交流」『吉林師範学院（哲学社会科学版）』1994年第4期、任鴻章・馬一虹「渤日関係論――「属国」？「与国」？」『日本研究』1995年第2期、魏国忠「論渤日関係中的対等外交」『日本研究』1996年第1期、王承礼・王巍「従朝貢外交看渤海和日本的関係――以国書体例和聘使往還年限之争為中心」『北方文物』1996年第4期、田玉娥・劉舜強「従「和同開珎」銭談渤海国与日本的経済往来」『中原文物』2012年第1期など参照。

10　沈仁安「倭国の発展」『倭国と東アジア』六興出版、1990年。

11　王培真・徐建新「好太王碑原石拓本的新発現及其研究」『世界歴史』1993年第2期、徐建新「関於北京大学図書館所蔵好太王碑原石拓本」『世界歴史』1995年第2期、同「高句麗好太王碑早期墨本的新発現――対1884年潘祖蔭蔵本的初歩調査」『中国史研究』2005年第1期、同「高句麗好太王碑拓本的分期與編年方法」『古代文明』2009年第1期などを参照されたい。

12　例として挙げれば、呉廷璆・鄭彭年「隋唐時代日本與中国文化」『世界歴史』、1992年第6期、王金林『漢唐文化與古代日本文化』天津人民出版社、1996年、劉曉峰「日本冬至考――兼論中国古代天命思想対日本的影響」『清華大学学報（哲学社会科学版）』2007年第3期、王海燕「古代日本五月五日礼儀中的中国因素」『古代文明』2008年第1期、閻華芳「日本平安前期釈奠対唐礼的継承和本土化」『古代文明』2018年第4期などがある。

のである[13]。

第二に、個別具体的なテーマより通史的研究が重視されていること。

前述したように、現在にいたるまで中国の研究者は多様な側面から日本古代史の研究を行っているが、中国における日本史は世界史の一分野として設けられており、従来から国内に向けて日本の歴史を紹介するという役割が与えられるため、古代史のみならず、日本史研究全般も日本のように個別具体的なテーマに関する実証研究は多くないと言わざるを得ない[14]。

1994 年に出版された呉廷璆編『日本史』（南開大学出版社）は中華人民共和国成立以来、原始時代から現代までの日本列島を語っている最初の通史で、南開大学と遼寧大学の研究者を執筆者として、1982 年から 1993 年までの 11 年にわたって完成されたものである。3 巻 36 章の構成の中で古代は 5 章あり、マルクス主義的史観における原始社会から奴隷社会・封建社会への変化を軸に、古代日本の展開を説明している。

その後しばらく、通史の形での出版はほとんどなかった。2000 年代に入ると、中国の研究者の著わした日本の通史は何部か刊行されたが[15]、近現代史の著者が多いので、古代に関しては漠然たる解釈が少なくないと言える。しかしながら、古代史の研究者が著わした時代史も出版され、東アジアおよび王権や都城などの視点から、上古ないし古代の歴史の展開が語られている[16]。

さらに、通史的なプロジェクトは国家によって推進されており、国家重大プ

13　賈麦明「新発見的唐日本人井真成墓誌及初歩研究」『西北大学学報（哲学社会科学版）』2004 年第 6 期、栄新江「従「井真成墓誌」看唐朝対日本遣唐使的礼遇」『西北大学学報（哲学社会科学版）』2005 年第 4 期、王子今「井真成墓誌文試補釈」『西北大学学報（哲学社会科学版）』2005 年第 4 期、王義康・管寧「唐代来華日本人井真成墓誌考辨」『中国歴史文物』2005 年第 5 期、馬一虹「日本遣唐使井真成入唐時間與在唐身份考」『世界歴史』2006 年第 1 期、韓昇「「井真成墓誌」所反映的唐朝制度」『復旦学報（社会科学版）』2009 年第 6 期などを参照されたい。

14　ただし、日本向けの論文の場合は、特定の史料の紹介や個別具体的な研究が比較的多いことも事実である。

15　王新生『日本簡史』北京大学出版社、2006 年（2013 年第 2 版、2016 年第 3 版）、同『日本史随筆』江蘇人民出版社、2011 年、王仲涛・湯重南『日本史』人民出版社、2008 年（2014 年修訂版）、馮瑋『日本通史』上海社会科学院出版社、2008 年（2012 年再刷）などがある。

16　沈仁安『日本起源考』崑崙出版社、2004 年、王海燕『日本古代史』崑崙出版社、2012 年。また、1980 年代に出版された王金林『簡明日本古代史』天津人民出版社、1984 年は時代史として有名な著作で、原始時代から江戸時代までの歴史を論述したものである。

ロジェクトとして2013年に「新編日本史」（担当機関：南開大学日本研究院）、2017年に『中日文化交流史叢書』（中日合作版。担当機関：鄭州大学）がそれぞれ国家社会科学基金に採択され、それらの構成には古代史も含まれた。また、江蘇人民出版社の企画で進んでいる『日本通史』（全6巻、未刊行）の中にも、原始巻と古代巻が設けられた。

第三に、実証的な研究が少ないこと。

前述した通史が重視されているという特徴とも関連しているが、実証的な研究は多くないと言える。近年、中国の日本史研究者のなかで、日本に留学した経験者が多くなり、日本の研究方法による実証的な研究は以前より増えてきている。一方で、特に日本の古代史について関心を持っている者が少ないことと、古代の全体像を把握しきれない者も多いことにも理由があるかもしれないが、ミクロ的視点のみの論文は中国の雑誌に掲載され難いのである。そのため、筆者を含めて日本から中国に帰国した研究者は、人によって程度は異なるが、国内の状況に合わせているのが事実である。ただし最近は、もっと基礎的・実証的な研究を行うべきという声も上げられている。

3. 日本古代史研究の展望

周知のように、中国には、国家社会科学基金（以下、社科基金と略称）があり、人文科学・社会科学の研究を助成している。日本の科学研究費助成事業に相当するものである。この基金に採択された日本古代史にかかわるプロジェクトは多くないが、今後の研究の動きが窺えるため、社科基金のデータベースに基づいて、中国の日本古代史の研究動向について述べてみたい。

まず、東アジアの視点が注目されている。社科基金に採択された研究課題のデータによれば、東アジアの視点は、世界史の分野では2008年から、中国史の分野では2012年から重視され、「東アジア」を冠したプロジェクトが徐々に増えつつある[17]。そのなかで、日本古代史にかかわるプロジェクトが2012年に2本立てられた[18]。

17　世界史の分野と中国史の分野と合わせて東アジアの視点からの社科基金の研究課題は2007年までに1本（1996年）しかなかった。しかし、2008年から2018年にかけて、世界史の分野に15本、中国史の分野に11本採択された。

18　「日本古代貨幣制度変遷と東亜貨幣文化圏的興衰研究」（周愛萍、2012年）、「中国古代時間体系対東亜地区的影響研究」（劉暁峰、2012年）。

次に、史料の編纂や研究において変化がみられる。現在まで、日本史の史料編纂はほとんど近代史・現代史の分野で行われていたが、2011年以来、歴史学の分野全体で文献史料の収集・整理と研究のような研究課題が多く採択されており、中国政府の方針が窺える。日本古代史の史料編纂に関するプロジェクトはまだ立てられていないが、「日韓朝三国出土漢文典籍簡牘整理研究」（葛継勇、2016年）という研究課題があることから、文献のみならず、木簡にも注目する流れが窺える[19]。

第三に、社会史や災害史など多様な視点からの研究が推進されている。前述したように、1980年代以前、中国の日本史研究はほぼマルクス主義的な歴史学の方法論で行われていたが、1990年代以後、アナール派歴史学などの流行思潮の影響を受け、新しい方法論で日本史を研究すべきという認識が徐々に現れている。その結果、社会史的視点からの研究プロジェクトとして「中日両国歴史都城遷徙与社会形態転変」（韓賓娜、2005年）や「中日古代社会結構比較研究」（李卓、2012年）が社科基金の助成を受けた。

また、東日本大震災が起きた2011年以降、古代の災害や環境が歴史の進展に如何なる影響を与えたのかが関心を集め、「日本古代災害社会史研究」（王海燕、2013年）が社科基金プロジェクトとなった。

以上に加えて、「中日関係史（894－1170）」（郝祥満、2012年、後期資助）、「日本遣唐使研究」（李広志、2017年）、「中日古代抜牙風俗比較研究」（何星亮、2017年、後期資助）、「古代中日仏教外交研究」（江静、2019年、重点）のような、日中関係・交流や文化人類学の立場から検討する研究課題も採択された[20]。

19　日本古代史の文献史料を中国の国内に紹介するという計画も進んでいる。王勇編『歴代正史日本伝考注』上海交通大学出版社、2016年、王金林編『日本歴史基本史料集』第1巻、人民出版社、2017年が次々と出版された。

20　社科基金プロジェクトに限らず、2000年以降の研究成果からみても、研究テーマが多様化していることが分かる。例えば、徐建新「古代日本律令制国家的身分等級制」『世界歴史』2001年第6期、王金林『日本人原始信仰』寧夏人民出版社、2005年、王海燕『古代日本的都城空間与礼儀』浙江大学出版社、2006年、劉琳琳「日本古代国家疫病祭祀中的鬼神観念」『世界歴史』2010年第2期、王玉玲「災異思想在日本律令時代的発展及影響」『日本問題研究』2014年第1期、郝祥満『奪然与宋初的中日仏教交流』商務印書館、2012年、葛継勇『七至八世紀赴日唐人研究』商務印書館、2015年、官文娜『日本家族結構研究』社会科学文献出版社、2017年などがある。

おわりに

以上、中国の日本古代史の現状について述べてきた。今後の課題は次の通りである。

まず、個人より研究チームとしての研究が重視されていることである。近年の中国では、国家社会科学基金の重大・重点プロジェクトの申請に際しては、個人より研究チームでの研究が重視されており、これにともなって、北京大学の江戸時代研究、南開大学の日本現代化研究、東北師範大学の近世東アジア思想史研究、浙江工商大学の文化交流史研究が顕著な成果をあげている。しかし一方で、研究チームの研究テーマに沿って論文・著作を執筆しなければならないので、研究者個人として自身の関心に従った研究をなかなか深められないという問題も存在する。

次に、研究テーマの多様化とともに、日本の古代史研究と対話できるようにするため、研究方法としては実証を行った上で、マクロ的視点をも用いて、日本の研究成果を把握しながら、異なる視点や側面から研究を行い、通史的な研究が多い現状を改善することである。

第三に、現在の古代史の研究者の研究分野からみれば、政治史、対外関係史、文化史の研究が多い一方で、財政史、経済史、地方史の研究は極めて稀である。さらに、摂関政治や院政に視線を向ける研究者も少ない。これらの分野についても研究者を育成していくことが必要であろう。

（おう かいえん　中国・浙江大学 教授）

中国の社会学領域における日本研究

楊　春華

1. 中国社会学と日本との関わり

中国の社会学の創設は、日本と深く関わり、「社会学」という言葉も、日本から伝わってきたと言われている。韓明謨の『中国社会学史』が日本で出版される際、著者は「日本語版への序文」に、「中国社会学は早期の萌芽期には、日本と一定の親しい関係があった。本書のなかで、日本に留学した多くの中国人学者のこと、日本の社会学の著作を翻訳して中国にもたらした状況のこと、さらに「社会学」という名称も日本から導入したもののであることを指摘した」と述べていた（星明訳 2015：4–5）。

中国の社会学は、厳復がイギリスの社会学者スペンサー（Herbert Spencer, 1820–1903）の著作 *The Study of Sociology*（1873）を訳してから始まったと言われている。厳復は、英語の Sociology を「群学」と訳した。だが、岸本能武太『社会学』（1900、大日本図書）が章太炎によって中国語へと翻訳された後、「社会学」という言葉が用いられるようになったことは事実である。章太炎訳の『社会学』（1902、上海広智書局）は、厳復訳の『群学肄言』（1903、上海文明編訳局）より早く社会に知られ、中国の社会学に大きな影響を与えたと言える。

星明「社会学にみる日本と中国の関係について」（2015）は、「中国には 1900 年前後に日本を経由して社会学が伝播した」とする。中国の社会学の創設初期に、日本から帰ってきた留学生によって日本の社会学に関する多数の著作が中国に紹介され、社会学の中国での定着に大きな役割を果たしたことなど、資料を通して中国の社会学と日本との関係を明らかにしている。しかし、近代、特に 1949 年以後は、他の研究分野に比べて中国の社会学における日本研究は多くない。これは、中国における社会学の発展の歴史と関係している。

1949 年以後、新中国政府は大学改造に取り組み、1952 年に大学の学部の再編成によって、社会学部が廃止され、社会学の授業も大学のカリキュラムから姿を消した。これを背景に、中国における社会学研究は、1978 年に研究活動が再開するまで、27 年間の長い停滞期に落ち込んでいた。韓明謨は、中国社会学の

発展過程を以下の五つの時期に分けている。第一段階は発足期（1891 ～ 1910 年）、第二段階は萌芽期（1911 ～ 1927 年）、第三段階は成長期（1928 ～ 1951 年）、第四段階は停滞期（1952 ～ 1978 年）、第五段階は回復期（1979 ～現在）である（韓 1996：2）。

27 年間の空白期が生じたため、中国における社会学の研究は、1978 年にまったく新しいスタートを切った。中国の社会学は、激動する社会とともに展開し、これまでの 40 年間で多くの実績が得られた。そのなかで日本研究も増加していった。特に、日本の家族や日本の社会福祉、日本の文化などに関する日本研究は、より重要な地位を占めるようになっている。以下の部分で、中国の社会学における日本研究について検討していこう。

2.『日本学刊』からみる日本研究の全貌

社会学における日本研究を検討するまえに、まず、中国における日本研究の全貌を少しみてみよう。中国では、「日本」を誌名に取り入れた学術誌は、主に三つがある。すなわち、『日本学刊』（1985 年創刊、中国社会科学院日本研究所刊行）、『日本問題研究』（1964 年創刊され、1987 年公開発行、河北大学刊行）、『日本研究』（1972 年創刊、遼寧大学日本研究所刊行）のである。そのうち、『日本学刊』は、もっとも知名度が高く、社会から高く評価されている。

『日本学刊』は、1985 年に創刊され、日本研究領域では最も早く出版された学術誌の一つであり、日本研究において重要な役割を果たしてきた。現在、中国の大学においては、『日本学刊』がより重要視され、多くの研究者に認められている。したがって、『日本学刊』を通して中国における日本研究の全貌を知ることができると思われる。

1985 年 5 月 20 日に、中国社会科学院日本研究所によって『日本問題』という学術誌が創刊され、隔月に発行する形式が定められた。1991 年に、『日本問題』は、民間組織である中華日本学会の機関誌として、中国社会科学院日本研究所と中華日本学会が共同で刊行することになったのと同時に、誌名も『日本学刊』へと変更された。『日本学刊』には、主に政治、外交、経済、社会文化、歴史といった項目が設けられているほか、専稿（現地調査特集）、人物（日本の政治家から文学者までの著名人の紹介）、書評（中国人また日本人によって書かれた日本に関する研究著作についての紹介）また学術信息（学会総括情報）という項目

もある。『日本学刊』が、1985 年から 2014 年までの 30 年間[1] に項目ごとに発表した文章総数は、表 1 に示した通りである。九つの項目があるが、前の五つのセクションは研究論文で、専稿、人物、書評と学術信息は、紹介の記事にすぎないものである。

表 1　1985–2014 年『日本学刊』の各セクションによる文章総数（単位：篇）

雑誌項目	政治	外交	経済	社会文化	歴史	専稿	人物	書評	学術信息
1985–1994	68	89	244	171	28	31	79	41	56
1995–2004	107	120	193	158	37	27	46	55	96
2005–2014	114	132	193	140	34	47	10	7	136
合計	289	341	630	469	99	105	135	103	288

注：(1)『日本学刊』の 1985 年から 2014 年までの総目録より、筆者作成。
(2) 1985 年第 1 号～ 1990 年第 6 号は、誌名『日本問題』、1991 年第 1 号～ 2014 年第 6 号は、誌名『日本学刊』である。

まず、表 1 にみたように、各項目のなかで経済関係の論文総数は、630 篇であり、最も多くを占めていた。これは、中国の経済発展を反映して、社会のニーズを表している。次に、外交と政治の論文数は、2 位と 3 位を占めている。政治領域の論文では中日両国の関係に言及するものが多く、日本研究において、中日関係が重要な研究課題であることが示されている。社会文化の項目には民族（民俗を含む）、文学、哲学などが含まれたため、論文総数は 469 篇だが、そのうち社会学の論文は少なかった。

その社会学論文の研究内容は、キーワードでみれば、主に日本の家族（特に、家族制度、家父長制、家族に存在する問題など）、高齢者社会、日本の青少年と教育、日本の女性、日本の社会に集中していることが分かる。これは、中国の研究者が、日本の家族社会学に最も関心を注いだことを物語っている一方、中国の社会学研究領域における家族社会学の地位も表している。

1985 年第 1 号から 2014 年第 6 号の『日本学刊』に公表された論文をみると、

1　2015 年以後、『日本学刊』の項目は合併したため（例えば政治と外交が「政治　外交」になり、社会文化と歴史が「社会文化　歴史」になった）、掲載論文を分類しにくい。このため、1985 ～ 2014 年の期間を対象とした。

以下の特徴がある。第一に、研究課題から言えば、日本経済、日本の家族また日本の社会まで、日本に関する研究が、幅広く行われていたなかで、中日関係は最も重要な研究課題である。第二に、研究内容から言えば、日本人研究者の研究成果、また日本の社会における問題を紹介するものが多く、自分なりの分析を行ったものは少ない。第三に、研究方法から言えば、一国（日本）研究が多く、中日比較研究は極めて少ない。また国際比較研究も少ない。

『日本学刊』は、創刊から 34 年間の歴史を持ち、中国の日本研究領域において、重要な役割を果たしてきたことは確かである。しかし、研究課題は社会の要請に影響されて偏りがあり、日本研究の発展を阻害したという傾向もある。

3. 社会学における日本研究

『日本学刊』を通して、中国における日本研究の全体状況をみることができるが、社会学に関する論文が少ないため、その研究の様子を知ることは難しい。中国の社会学領域における日本研究は、いかなる状況であるのか、以下で検討してみよう。

本論文では、中国の社会学研究領域でトップレベルに立つ三つの社会学の学術誌を選び、そこで発表された日本に関する研究論文を通して、社会学領域における日本研究の動向を明らかにする。その三つの雑誌は、『中国社会科学』[2]（1980 年 1 月創刊、中国社会科学院主宰の社会科学の総合学術誌）、『社会学研究』[3]（1986 年 1 月創刊、中国社会科学院社会学研究所主宰の社会学専門誌）、『社会』[4]（1981 年 10 月創刊、上海大学主宰の社会学専門誌）のである。現在中国では、雑誌の知名度では、『中国社会科学』、『社会学研究』、『社会』という順番になっている。この三つの学術誌は、中国の社会学研究のレベルを代表していると言える。

まず、1990 年[5] から 2018 年まで、『中国社会科学』、『社会学研究』および『社

2　中国社会科学雑誌社ホームページ：http://sscp.cssn.cn/zgshkx/zgshkx201812/. 2018 年 12 月 15 日最終アクセス。

3　社会学研究ホームページ：http://www.shxyj.org/. 2018 年 12 月 15 日最終アクセス。

4　社会ホームページ：http://www.society.shu.edu.cn/CN/volumn/home.shtml. 2018 年 12 月 15 日最終アクセス。

5　中国の社会学研究は、1980 年代に復活してから少しずつ展開してきた。1990 年に入ってからは、安定期に入り、研究レベルも上昇した。これが 1990 年以後の社会学研究を選んだ理由である。

会』の三つの学術誌によって発表された日本に関する研究論文の総数は、表2[6]に示した通りである。なお、『中国社会科学』には、経済学、政治学、法学、文学また言語学も含まれているが、社会学と関わっている論文を社会学の論文として数えた。

表２　三つの雑誌における日本研究の論文数（単位：篇）

雑誌名	中国社会科学	社会学研究	社会
1990–1999	22	19	35
2000–2009	10	10	19
2010–2018	10	7	5
総計	42	36	59

注：中国のCNKI（China National Knowledge Infrastructure）のデータベースで、「日本」をキーワードで検索した結果である。

三つの学術誌とも、1990～1999年に発表された論文数が一番多かった。その後、2000～2009年には、日本研究の論文総数は大幅に減少した。一見すると、日本研究が急に減少したと思われるが、それぞれ雑誌に掲載された内容をみると、これは1999年以前の雑誌の内容構成と関わっていることが分かる。

1990～1999年の間に、社会学研究領域には、日本を紹介するものが多かった。例えば、『社会』を例としてみれば、『社会』の雑誌内容のセクションに「海外からの情報」（中国語：「海外伝真」）という欄がある。日本に関する研究は、ほとんどこのセクションで発表されていた。これらは、厳格には研究論文とは言えず、エッセイあるいは報道記事に過ぎないものである。だが、その時期の学術論文の定義は厳密ではなく、これらの文章も研究論文として載せられていた。2000年以後、学術論文への認識が高まり、これらのエッセイまたは報道記事のようなものは、学術論文のセクションから少しずつ姿を消したため、論文総数に差が生まれたと思われる。

次に、1990年から2018年までの日本についての研究内容をみると、主とし

6　中国のCNKI（China National Knowledge Infrastructure）のデータベースを利用し、「日本」をキーワードとして『中国社会科学』、『社会学研究』と『社会』を検索した結果から、学会開催情報、学会記事また非社会学研究論文（主に『中国社会科学』に含まれた法学、文学などの論文）を除いた数字である。

て以下のキーワード[7]に集中している（表3）。

表３　三つの学術誌における日本研究のキーワード

雑誌名	中国社会科学	社会学研究	社会学
1990–1999	日本経済、産業技術、企業文化、日本留学生	夫婦関係、家庭教育、人口、養老、社会福祉、日系企業、青年、自治会	家庭教育、主婦、結婚、出生率、高齢化、日本産業文化、コミュニティ
2000–2009	宗教、中日関係、民主制	東アジア家族、家族介護、職業評価	熟年離婚、主婦階層、少子化、単身赴任
2010–2018	社会福祉、アジア政治、南京大虐殺	恥文化、明治維新、知識共同体	戦争記憶、未成年者

1990年から2018年までに、多くの研究成果が発表された。これらをすべて取り上げることはできないが、以下で、各時期の代表的な論文を取り上げ、当時の研究状況をみることにする。

1990～1999年の期間は、ちょうど中国の高度成長期であり、この社会背景のもとで、日本経済に関する研究が盛んになった。いずれの学術誌においても、日本の企業文化、産業発展などについての研究は目立っている。例えば、孟宪忠（1994）「论社会主义市场经济的文化精神（社会主義の市場経済における文化精神）」という論文は、日本の経済発展における文化的要素に注目した意義深い研究である。また、日本の経済発展がもたらした環境問題を一つの教訓として中国の経済発展における環境問題を重視するよう呼びかける研究があった。すなわち、何祚庥「对“地大物博、人口众多”的再认识」（「広大な面積、豊かな資源および人口が多いという認識に関する再思考」）である。この論文で、著者は「我が国の基本政策は、資源を節約し、生活環境を厳格に守り、適当な消費方針を提唱し、人口を抑制すると同時に、長期発展戦略を制定すべきだ」と指摘し

7　キーワードがついていない論文がある。こうした論文の場合は、研究内容をみて、筆者がキーワードを抽出することにした。1990～1999年に発表された論文は、三つの学術誌ともキーワードがなかった。2000～2009年には、『社会』は論文のキーワードがついていない状態であった。『社会学研究』は、期間の後半から論文にキーワードをつけ始めた。『中国社会科学』は、この段階ですべての論文にキーワードがついていた。2010年以降は、三つの学術誌に発表されたすべての論文にキーワードがあった。キーワードの側面からも中国の社会学領域の研究論文の進展過程を知ることができる。

た（何祚庥 1996：44）。現在、環境問題が最も深刻な社会問題になった現実のなかで、22 年前の研究者の提案は重要視すべきであると思われる。

2000 年以後、中国の社会学研究の水準が全体的に上昇したのにともなって、日本研究も研究内容から研究方法まで発展した。そのなかで、次の論文を代表的論文として取り上げてみよう。葛兆光（2004）「谁的思想史？为谁写的思想史？：近年来日本学界对日本近代思想史的研究及其启示（誰の思想史、誰のために書かれた思想史――近年日本の近代思想史に関する研究および示唆）」は、近年の日本における近代思想史の研究が、日本の社会状況とともに周辺諸国の日本研究を反映していることは、中国の思想史研究においても参考にされるべきだと指摘した。

2010 年以後の日本研究は、より印象深い研究が多い。例えば、高蕊（2015）の論文「记忆中的伤痛：阶级建构逻辑下的集体认同与抗战叙事（記憶のなかの苦痛――階級構築のもとでの集団認識と抗日記述）」は、文化的外傷（cultural trauma）の理論を用いて、1949 年以後の抗日戦争に関する記述において中国の社会に文化的記憶喪失という現象が発生した要因を分析した。また、翟学偉（2016）の論文「耻感与面子：差之毫厘，失之千里（恥と面子――わずかな差で巨大な格差が生じる）」は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』の概念を用いて、恥の文化における中日両国の行動差異を明らかにしたものである。

近年、中国では急速に高齢化社会へと進んでおり、社会福祉に関する研究はますます増えてきた。東アジア諸国において、日本の社会福祉における対応措置への評価は高く、社会福祉の研究論文については、多かれ少なかれ日本の社会福祉に触れる研究が多かった。だが、社会福祉に関する専門誌の増加によって、これらの論文は、社会福祉の専門誌に掲載されるようになり、社会学の学術誌にはこれらの論文が少なくなってきた。

社会科学分野においては中日関係をめぐる研究が依然として主流である。一方、社会福祉、社会文化、家族問題などの分野において、日本に関する研究論文の総数およびレベルはともに上昇していることは事実である。だが、国別での外国研究をみると、日本研究に従事する研究者の人数、また研究論文の発表総数などにおいて、日本研究の影響力はまだ弱い傾向があると言わざるを得ない。

4. 中国の社会学における日本研究の問題点

飯田哲也は、1996年第2号の『社会学研究』で「対当前日本研究中国社会的方法的反思（現在の日本における中国研究に対する反省）」という論文を発表した。この論文で、飯田は日本の中国研究における問題を以下のように指摘した。すなわち、「今まで、日本の社会学の研究領域で行われた国際研究は、欧米の国々との比較研究が多いため、欧米の視点に偏る傾向がある。同じアジアの国である中国との比較研究を通して、欧米に偏る傾向を解決できる方法を見つけられる可能性があり、同時に日中両国の社会学研究を推進できると思う」（飯田 1996：92）。

実際に、中国の社会学研究領域における日本研究は、飯田に指摘された日本の中国研究と同様の問題が存在している。すなわち、欧米の研究理論、欧米の研究方法に頼りすぎるということである。これは、一つの要因は、社会学の研究方法と研究理論が、最初に欧米から伝えられたものであるため、欧米の社会学を一つのモデルとしていることにあるだろう。中国の日本研究は、日本語学部、日本研究センターあるいは日本研究所で行われるのがほとんどである。このために、文学、歴史学領域の研究成果が最も多いのである。社会学についていえば、日本より欧米を研究対象とする研究が圧倒的である。

中国社会学学会の会長李友梅は、2018年6月28日に発表した「40年来中国社会学的成长发展（40年間の中国社会学の成長と発展）」に、今後の中国社会学の発展目標として次の3点を掲げた。第一に、中国の社会発展規律に相応しい社会理論を抽出し、中国研究を世界に理解できる形で伝えることである。第二に、社会学研究全体の水準を上げるために、研究を促進する体制を整える必要があることである。第三に、社会学研究の枠を突破し、多くの研究領域との連携で社会学研究を充実し、また国際研究を通して、中国の社会学研究を促進するという認識の確立が重要である。

ここで、李友梅会長は、中国の社会学研究の促進と国際研究との関係を明確に示し、今後の社会学研究における比較研究の重要性を示した。中日の国交関係の改善によって、中国の社会学における日本研究のさらなる発展が期待できると思われる。

5. 今後の日本研究

日本研究の重要性は、ますます認識されている。これにともなって、中国の研究者は、日本研究をいかに促進できるのか、という問題についても検討してきた。

2011 年 5 月 18 日に、中国社会科学院日本研究所創立 30 周年および中華日本学会の研究大会[8]が開催された。その会場で、日本研究領域の 10 名の専門家は、中日関係、日本政治、日本外交、日本経済、日本社会、日本文学、日本文化、日本思想史、古代史、近代史という 10 の側面から 30 年間の日本研究を総括した。そのなかで、日本社会研究[9]については、(1) 反響のある研究が少ない、(2) 研究者の人数が少ない、(3) 研究者のネットワークが弱い、(4) 中国の社会ニーズに応じた研究が少ない、と指摘されている。

いかに日本研究を進展させることができるかは、常に研究者の注目を集めている。2016 年 11 月 19 ～ 20 日、「“中国的日本研究－歴史与未来”学術研究会」[10]が中国の南開大学で開催された（鄧之湄 2016）。この大会では、日本研究の実績が認められた一方、日本研究における問題点も指摘された。すなわち、(1) 研究の問題意識が弱い、(2) 社会の流行に研究が左右される傾向がある、(3) 日本の現代の問題を重視し、総合的な研究が少ない、ことである（楊牧・常紅 2016）。今後の日本研究について、大会から出された提案は、第一に、よい研究環境を提供し、研究者の研究レベルを上昇させること、第二に、研究者のネットワークを広げ、共同研究を強化し、国際研究を目指すこと、第三に、研究環境の改善、重要な研究の展開を保障できる環境づくりに力を入れること、などである。

以上に取り上げた二つの研究会は、日本研究において重要な意味を持っている。にもかかわらず、これらの研究会の主催者と参加者は、歴史学、文学、言語学などの専攻に偏る傾向が強く、社会学を専攻する人が少ないという弱点がある。それでも、この状況を改善する動きがすでに表われてきている。

8　『日本学刊』編集部「30 年来中国的日本研究概況：中華日本学会 2011 年年会暨学科総述検討会発言摘要」『日本学刊』第 3 号（2011）。

9　王偉「歩入発展時期的日本社会研究」『日本学刊』第 3 号（2011）、37–42 頁。

10　鄧之湄「“中国的日本研究—历史与未来”学术研讨会在天津举行」中国社会科学院、2016 年 11 月 25 日（http://cass.cssn.cn/keyandongtai/xueshuhuiyi/201611/t20161125_3289518.html）。

2018年9月14日、中国社会学会“東アジア社会研究専門委員会”が、吉林大学で成立した。多くの社会学の専門家から形成されている“東アジア社会研究専門委員会”は、東アジアの社会学研究を一層推進させることを目指している。今後、この専門委員会は、日本研究を含めた東アジアの社会学研究を導く役割を果たすことが期待される一方、社会学領域における日本研究の新たな展開も開いていくだろうと思われる。

参考文献

高蕊 2015「记忆中的伤痛：阶级建构逻辑下的集体认同与抗战叙事」『社会』第35巻（2015年3月）

葛兆光 2004「谁的思想史？为谁写的思想史？－近年来日本学界对日本近代思想史的研究及其启示」『中国社会科学』第3号

韓明謨 1987『中国社会学史』行路社（星明訳、天津人民出版社、2005）

韓明謨 1996「中国社会学一百年」『社会科学戦線』第1号

星明 2015「社会学にみる日本と中国の関係について――清朝末期から民国末期までを中心に」『仏教大学社会学部論集』第60号

何祚庥 1996「对“地大物博、人口众多”的再认识」『中国社会科学』第5号

李友梅 2018「40年来中国社会学的成长发展」『中国社会科学网』2018年6月28日（http://ex.cssn.cn/zx/bwyc/201806/t20180628_4484501.shtml）

孟宪忠 1994「论社会主义市场经济的文化精神」『中国社会科学』第6号

『日本学刊』編集部 2011「30年来中国的日本研究概況：中華日本学会2011年年会暨学科総述検討会発言摘要」『日本学刊』第3号

落合恵美子 2017「日本研究をグローバルな視野に埋め直す――「日本」と「アジア」の再定義」『日本研究』第55集（国際日本文化研究センター）

鄧之湄 2016「日本研究五十載結果日本研究五十载结碩果：回顧、総括、再出発」『社科院専刊』2016年11月25日（総第368期）

飯田哲也 1996「对当前日本研究中国社会的方法的反思」、『社会学研究』第2号

楊牧・常紅 2016「学者探讨中国日本研究的历史与未来」『人民网』2016年11月22日（http://world.people.com.cn/n1/2016/1122/c1002-28886311.html）

翟学偉 2016「耻感与面子：差之毫厘，失之千里」『社会学研究』第1号

（よう しゅんか　中国・南開大学周恩来政府管理学院 准教授）

悠久なる故郷の響き
――黄檗声明の中国的要素――

周　耘

研究の動機

もう何年も前のことになりますが、筆者は日中仏教音楽比較研究のため京都へ留学した時に、黄檗宗の大本山萬福寺へ訪れる機会がありました。黄檗宗は、日本の禅宗三派のうちのひとつです。初めて萬福寺を訪れた際、「不許葷酒入山門」（葷酒山門に入るを許さず）という漢語の刻まれた石碑が目に留まり、その瞬間、かすかな郷愁を覚えました。そして、これはどのような寺院なのだろうか、大陸の仏教寺院の雰囲気が色濃く感じられるのはなぜだろうか、とこの寺院の儀礼音楽に強い関心を抱きました。

その後、黄檗宗宗務総長の乾隆俊和尚、文華殿田中智誠和尚のご協力のもと、筆者は何度も萬福寺を訪れ、法要儀礼を現地調査させていただきました。この文章を借りて、乾和尚、田中和尚、そして萬福寺の皆様に心よりお礼申し上げます。

1. 黄檗宗の歴史

（1）日本に伝わる珍しい禅寺

萬福寺は京都府宇治川のほとりにある寺院ですが、中国明朝の仏教寺院の建築様式で建てられています。そのため、奈良時代や平安時代初期に建てられた古風な寺院とも、またその後に日本化された洗練された寺院とも異なります。木造の殿堂を主としたつくりに瓦の屋根がついた建物で、青々とした松と柏が美しく映えていました。殿堂が整然と並び、殿堂の名称を記した漢字が高々と掲げられ、また入口の両側には大きな柱があり、そこに漢詩が掲げられています。

萬福寺で行われる大小の法会に行きますと、中国の寺院で聞かれるような音に出会います。また、中国の寺院でよく見るような普茶料理や、中国式の寺院庭園など、寺院全体の至るところで中国の寺院のような風情が感じられます。故郷を異にする華人が入寺した際の喜びと慰めを数百年後に追体験しました。郷愁を感じさせられました。

(2) 黄檗宗を創立した大陸の高僧

萬福寺を創建したのは、隠元隆琦という僧侶です。彼は1592年（万暦20年）に中国福建の、林という姓の名家に生まれました。29歳の時、福建の萬福寺で得度し、46歳の時、師である費隠通容から臨済宗の一派である楊岐派の衣鉢を受け継ぎ、楊岐派の正統な継承者となりました。

その後、隠元は福建の黄檗山萬福寺の住職となり、1654年に、日本からの招きで教えをひろめるべく来日しました。来日にあたって、日本での滞在は3年とし、期限を迎えたら帰国して再び故郷の黄檗山に戻ってくることが福建の萬福寺と取り交わした約束でした。

しかし、隠元は徳川幕府から京都に土地を賜り、そこに新しく寺院を建てて「黄檗山萬福寺」と命名しました。俗に京都の萬福寺を「新黄檗」と呼び、福建の萬福寺を「古黄檗」と呼びます。新黄檗は寺院建築から法要の式次第、僧侶の生活習慣に至るまで、明朝禅宗のやり方を規範としているため、日本人にとっては、異国情緒あふれる寺院となりました。こうして、隠元が日本で創立した黄檗宗は臨済宗、曹洞宗とともに日本の禅宗の三大流派となりました。

2. 黄檗声明の中国的要素

(1) 臨済梵唄から黄檗声明へ

私の音楽学者としての関心は、自然と黄檗宗の儀礼音楽へ、そして声明の特徴に向けられました。そこで、ここからは黄檗声明の中国的要素とその現象について、社会的、歴史的文化要因に着目して分析を進めます。

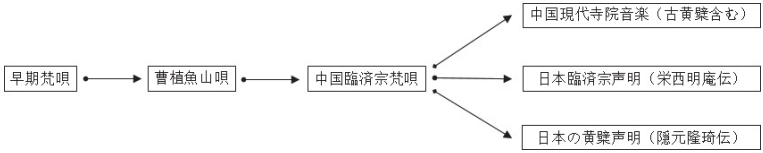
仏教儀礼に用いられる音楽を、中国では梵唄と呼び、日本では声明と呼びます。声明とは梵語（即ちサンスクリット語）のSabda-vidyāを漢語に訳したもので、本来、古代インドの学問分野、五明（声、因、内、医、工）のひとつである文法および音韻学を指し示すものです。しかし、日本仏教の用語である声明は、仏教音楽を指します。この名称の変化は、日本の僧侶の知恵を反映しています。インドから来た梵唄は中国に伝わった後に中国化されていますので、中国から日本に伝わった仏教音楽を梵唄と呼ぶのはあまり適当ではありません。

中国の仏教音楽（梵唄）は隋唐代（奈良・平安時代）に大陸より日本へ伝来し、千年あまりの間に、天台声明、真言声明、臨済声明、曹洞声明、黄檗声明などを形成しました。

そのなかで、中国から日本へ最後に伝来した黄檗声明は、伝来して364年に

なります。そのため、日本化した部分もありますが、多くの中国的要素と明清仏教音楽の名残を色濃く残しています。

黄檗声明源流の図

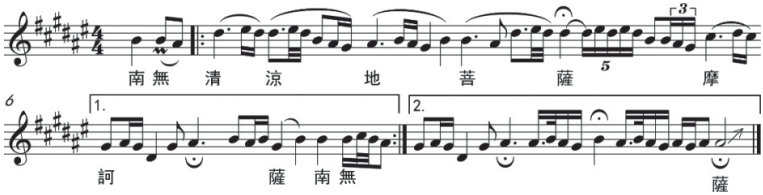


(2) 黄檗声明の中国音楽的要素

黄檗声明は日本的特徴と中国的要素の両方がみられます。時間に限りがありますので、ここでは、旋律に焦点をあてて説明します。

まず、日本的特徴として、都節音階を基礎とした旋律が挙げられます。これを私は和風旋律と呼んでいます。

【楽譜】和風旋律「潔壇浄水賛」

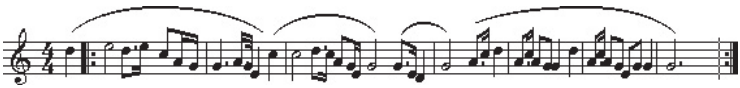


（萬福寺中元法要 周耘採譜）

都節音階は、隣り合う音の関係が短二度と長三度とからなる五音音階で、江戸時代の音楽によくみられる音階です。これが、黄檗声明に日本的な響きを加えています。

一方、黄檗声明にみられる中国的特徴の旋律を、筆者は中華風旋律と呼んでいます。

【楽譜】中華風旋律「拝懺」



（萬福寺中元法要 周耘採譜）

中華風旋律は中国の伝統的な五音音階を基礎とします。その特徴は、隣り合う音の関係が長二度と短三度からなる、半音を含まない五音音階です。黄檗声明の多くがこの音階を使用しており、中国的特徴といえます[1]。

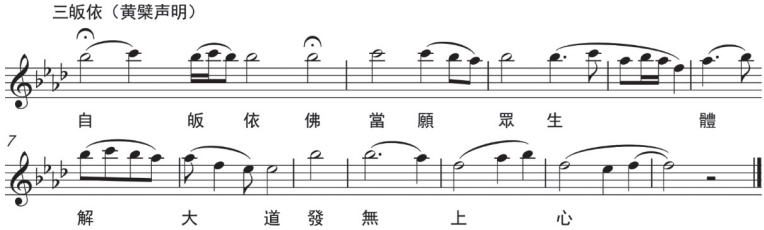
(3) 黄檗声明に見る明清仏教音楽の痕跡

次に、中国と日本で共通して伝承されている曲を比較してみましょう。

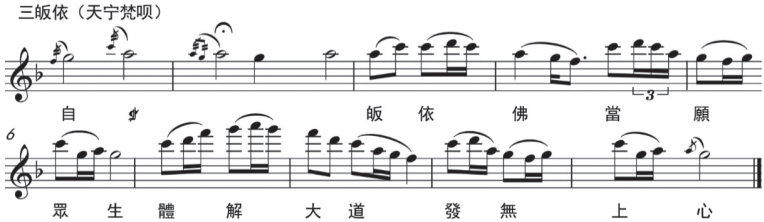
以下の譜例は、「三帰依」という曲です。前者は日本黄檗山萬福寺で唱えられている黄檗声明の「三帰依」で、後者は中国のある禅寺で唱えられている梵唄の「三帰依」です。

このふたつの譜例を比較すると、多くの共通点が見受けられます。中国の伝統的な五音音階で、旋律の形がよく似ており、リズムも緩やかで自由、清麗高雅な曲調です。

【楽譜】「三帰依」二曲



（萬福寺中元法要 周耘採譜）



（天寧寺水陸会 周耘採譜）

1　日本ではこの音階は律音階といい、よく使われています。律音階を陰旋化したのが都節音階と考えられています。おそらく、中国から梵唄を黄檗宗が取り入れたときに、日本の音楽にもある律音階と共通しているので、江戸時代の流行を取り入れて陰旋化しやすかったのではないかと思われます。ちなみに、律音階は田舎節といわれる音階と使用音が共通しています。日本人の耳には律音階は田舎風、都節音階は都風に聞こえたからです。

これらの共通点は、明清時代の仏教音楽の痕跡です。この他にも、重複変化の旋律構造[2]、経文の唱え方とその内容、拍節やリズムの様式、「金属的」な音色を求める傾向、口頭伝承の方法など、様々な点で明清時代の仏教音楽の痕跡を見ることができます。

このように、黄檗声明は多くの中国的要素を継承していますが、いかにして、360余年もの間、中国的な要素を保つことができたのでしょうか。

3. 望郷の念と永遠の故郷の響き

(1) 郷愁が故郷の響きを留める

隠元は日本へ渡る際、3年で帰るという約束をしました。しかし、日本での布教が大成功したため、隠元は二度と帰ることはありませんでした。きっと、彼は、故郷やかつての仲間たちのことを、いつも想い、夢に見るほど恋しく思っていたでしょう。異国の地へたどり着いてから他郷（異郷）で入寂する日まで、隠元は故郷、福建の黄檗山萬福寺、すなわち古黄檗を忘れたことはありませんでした。

故郷を思うあまりにホームシックとなってしまった隠元が隠居して以降、隠元とともに日本へ渡来した数名の中国僧は「古黄檗」に伝わる規律を模して「黄檗清規」を制定しました。この制度をもって黄檗禅の純粋性と正統性を守ろうとしただけでなく、何代にもわたって黄檗禅僧が「古黄檗」への敬意と感謝を保ち続けるよう、願ったためです。

> ……老僧自甲午歳，于古黄檗受請東來，……辛醜蒙上賜地，重開黄檗。……老僧雖老朽無似，忝爲一代開山，不得不重立規制以曉後昆。……凡我後昆，宜遵我法。庶叢林不混，而祖道可振。（「黄檗黄檗清規・序」より）

こうして、隠元が宇治に寺院を建立して以降、第21代住職の大成照漢の時代まで、第14、16、17、19代を除くその他すべての住職は、いずれも「唐僧」と呼ばれる来日中国僧が住職を務め、黄檗宗の一大特色である黄檗禅の純粋性と正統性を形成してきたのです。また、住職だけでなく、大眉性善、東皋心越な

2　旋律を繰り返しながら少しずつ変わっていく、という意味です。

どの来日僧も大いに活躍し、黄檗宗の興隆に重要な貢献を果たしました。

非常に長い年月にわたって、黄檗宗の法要は中国の高僧を中心に行われました。異国に身を置く同郷の来日中国僧たちは、隠元が手塩にかけて作り上げた故郷の情緒溢れるこの寺院で、生活を共にすることで、異国での寂しさを乗り越え、精力と思慮のすべてを尽くして、黄檗宗の教えを守り、日本の萬福寺における中国的な特徴を保ってきたのです。

1723年を最後に中国僧の来日は途絶え、1784年に第21代住職大成照漢が入寂すると、日本の黄檗宗は中国僧を中心とした歴史に幕を閉じ、中国僧の姿は寺院から消えていきました。ここから、隠元の黄檗禅法と黄檗声明が固定化し、日本僧がそれを習わしとして勤めるようになったのです。

(2) 高貴な僧侶が守り続けた故郷の音色

来日中国僧の郷愁や深い情緒が、黄檗声明に、明清時代の仏教音楽の痕跡を残しました。さらにその痕跡が残った理由には、隠元と黄檗宗が来日後、すぐに日本で高い地位を得たことで、社会的に認められ受け入れられたことも付け加えられるでしょう。その例をいくつか挙げます。

① **禅宗の正統的な継承者**：隠元は、臨済宗の第32代目であり、既に中国で高僧大徳の地位を得ていた。

② **道俗二衆の至尊的な崇拝者**：長崎で興福寺が開山し、布教が始まると、民衆数千人がその教えを聴聞（ちょうもん）しに訪れ、昼夜を問わず高僧隠元を参拝するために長い行列をつくった。また、高槻の普門寺では、日本人僧侶が続々とやってきて、隠元の仏様のような姿を拝謁し、感激して涙を流して喜んだという。

③ **幕府と朝廷による高い関心**：隠元は、萬福寺を建立するために徳川家綱から土地を下賜されるほどの信頼を得ていたが、同時に後水尾法皇の信頼も得ていたため、入寂後には朝廷から「仏慈広鑑国師」「径山首出国師」「覚性円明国師」「真空大師」など多くの称号を与えられた。

このように、隠元の永遠の郷愁は変わらない故郷の音色を求め、彼の高い社会的地位によってその音色は守られたと言えるでしょう。

(3) 江戸初期の伝来

黄檗宗は、日本伝統仏教の各宗派のなかでは最も遅れて中国大陸から日本に伝えられました。日本に伝来してからの期間が比較的短いので、中国仏教音楽の様式と風格をよりよく保存することができています。

黄檗宗：隠元が 17 世紀中頃に創立、1661 年萬福寺を創建、約 350 年前。
曹洞宗：道元が 13 世紀中頃に創立、1243 年福井に永平寺を創建、約 800 年前。
臨済宗：栄西が 13 世紀初めに創立、1202 年京都に建仁寺を創建、約 800 年前。

このように、黄檗声明が明清時代の仏教音楽の特徴を色濃く伝え、黄檗宗が中国的要素を色濃く保つことができた要因は、複雑な要素が絡み合っており、単純ではありません。

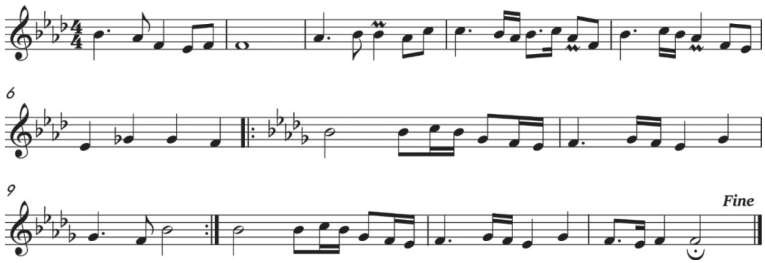
4.「郷に入れば郷に従え」響音の変容

(1) 静かに万物を潤す——声明の日本化

黄檗宗の日本伝来から 360 余年の間、黄檗声明が全く変わることなく原型を保つことは不可能であり、次第に日本化し、最終的には日本の声明の一つとして位置づけられていったことは、自然な流れであったと言えます。「拝懺」という曲の譜面をご覧ください。

「拝懺」の前半で使用されているのは、中国の伝統的な五音音階で、転調後、都節音階が用いられています。第六小節が調の転換部にあたり、前の調に対して「sol ^{b}si ^{b}si la」となっており、これが後続の調「re fa fa mi」にあたります。短二度を使用し、転調が速やかに行われています。

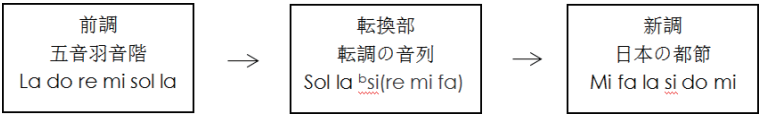
【楽譜】「拝懺」



（萬福寺中元法要 周耘采譜）

黄檗声明の類似の転調例を見てみると、いずれも、短二度音程を媒介の同主音として転調を行っています。

【図】転調



この例はいずれも、先行する調である中国の伝統五音音階の主音の上に、短二度音程を挿入することによって、「短二度＋長三度」の旋法を絶え間なく強調し、都節音階への転調を可能にしています。転調の性質としては、中国風から和風への転換と言えます。

この転換のなかにある、抗うことのできない時間と空間の圧力には驚嘆の念を感じざるにはいられません。そしてこの圧力のなかで転換を成し遂げた、黄檗禅僧の音楽的なテクニックをどのように賛美したらよいか言葉が見つかりません。中国風から和風へのこのような転換が行われ得たのは、熟練した技巧はもちろんのこと、黄檗禅僧が中国と日本の二つの音色への深い理解をもっていたからこそであり、そのような禅僧でなければ、この旋律が心の底から自然に流れ出ることもなかったでしょう。

(2) 日本化を促した主な要因

① **時間的経過**：隠元が日本で開山して３世紀半、そして、日本僧を中心とする寺院運営から２世紀半が経ち、声明は時代とともに変遷を重ねてきました。

② **楽譜によらない口伝心授（口頭伝承）**：明清時代の仏教音楽は楽譜を用いません。黄檗声明も楽譜を用いず、口伝心授（口頭伝承）で伝えられたために変化したと考えられます。

③ **日本に根付く独特の島国風土**：中国には「風土が人柄を育てる」ということわざがあります。日本と中国では風土が異なるために、そこで育まれた民族性や美意識も異なります。中華民族の美意識は「雄大かつ壮絶にて濃厚に奇艶でいる」ものと言えますが、日本民族の美意識は「静寂かつ淡白にして幽玄を極めている」と言えるもので、黄檗声明の日本化は美意識の違いを具現化していると言えます。

まとめと考察

(1) 永遠の郷音、変容する郷音

来日中国僧の郷愁と情緒によって、黄檗声明は、多くの中国的要素を継承し、明清の時代的特徴を色濃くもつ音色を生み出しました。その一方、日本の風土に融合した黄檗声明は日本化し、新たな日本の音色を生み出したのです。

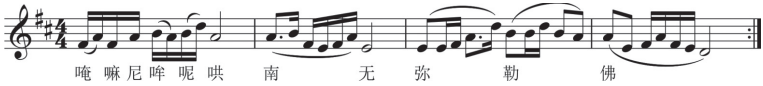
黄檗声明の将来を考える時、永遠の故郷の音は「永遠」であり得るのか。変容するこの音は最終的にはどこへたどり着くのか。非常に興味深い問題です。

(2) 大陸仏教音楽への恩返し

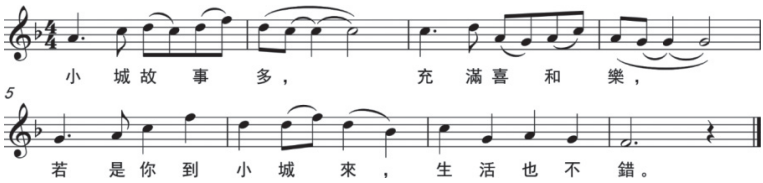
① **驚くほどの速さで進んだ中国における仏教音楽の世俗化**：歴史上、仏教音楽の世俗化の歩みは一度も止まったことがないだろうと考えられますが、20世紀1950年代以降、中国大陸の仏教音楽が急速な世俗化の変遷を辿ったことは驚くべきことでして、現代の流行曲さえも寺院の儀式音楽として使われました。例一の仏曲「六字真言」はテレサ・テンが歌った流行歌「小城物語」のメロディーを採用しています。例二の仏曲「菩薩聖号」は大衆歌謡曲「蘇武牧羊」のメロディーを採用しています。

例一：仏楽曲「六字真言」と「小城故事」との比較

【楽譜】「六字真言」

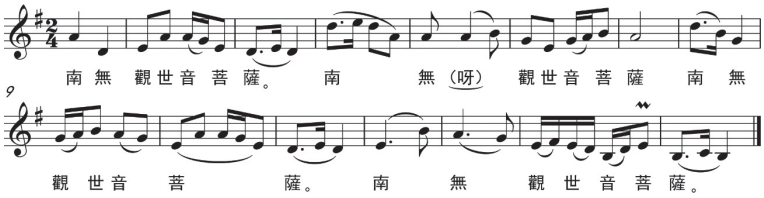


【楽譜】「小城故事」

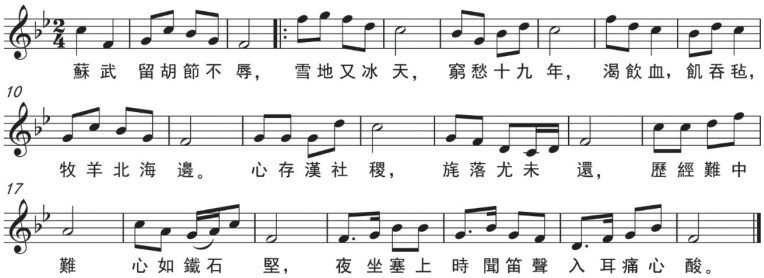


例二：仏楽曲「菩薩聖号」と歌謡曲「蘇武牧羊」との比較

【楽譜】「菩薩聖号」



【楽譜】「蘇武牧羊」



上記の例をみると、現代の中国において、仏教音楽の世俗化が日に日に増していることがわかります。

② **有識者による「古質」の復興**：仏教音楽は音楽芸術であり、また仏教儀礼の一要素でもあり、仏教文化を構成するものであると言えます。中国における仏教音楽の急速な世俗化は学術界の注目を集めていますが、仏教界を悩ませる種でもあります。このようななか、有識者らは梵唄の古い特徴の復元の必要性を訴えていますが、そもそも、梵唄の古い特徴とは一体どのようなものでしょうか。黄檗声明と日本の伝統的な仏教各宗に伝わる声明が、その問題を考える際に大きな手がかりとなると筆者は考えます。

（しゅう うん　中国・武漢音楽学院 教授）

編集後記

ウイルスひとつでかくも簡単に日常は変わるものなのかと思い知らされる日々が続いている。政治・外交も社会も経済もウイルスに翻弄され、世界は急速に萎縮し断片化している。グローバリゼーションの顕著な現象が展開するなかで、国際協力――ウイルスという共通の敵に対する――と同時に主権の強化によってしかこの事態に対抗できないという皮肉を前に、人間の知恵が試されていると感じる。

日本研究はグローバリゼーションの波のなかに放り出されている。今回ご執筆いただいた10名の方々の論考は、多かれ少なかれその事実を物語るものとなった。人文学・社会科学に対する風当たりの強さは米国をはじめ多くの国でみられる現象であるし、国際社会における日本の経済的プレゼンスの相対的低下は、世界の日本に対する関心を低下させ、大学・研究機関での日本研究の維持を困難にしつつある。日本研究が人文学・社会科学の発展にどのように貢献するのか、そもそも「日本」がどこまで自明の存在なのかを問わなければならないことを、あらためて痛感した。

末筆ながら、お忙しいなかを編集作業に快くご協力くださった執筆者の先生方、編集に際して貴重なご助言をいただいた松田利彦・海外研究交流室長、そして業務過多のなか丁寧に作業を進めてくださった出版編集係の皆様に心から感謝申し上げます。

楠　綾子

執筆者一覧

［編者］

楠 綾子（KUSUNOKI Ayako） 国際日本文化研究センター 准教授

［執筆者］（執筆順）

ジラルデッリ青木美由紀（Miyuki Aoki GIRARDELLI）
トルコ・イスタンブル工科大学 准教授補

鄭 炳浩（JUNG Byeongho）韓国・高麗大学校日語日文学科 教授

金 容儀（KIM Yongui） 韓国・全南大学校 教授

ローレンス マルソー（Lawrence MARCEAU）
NZ・オークランド大学 Senior Lecturer

朴 眞淑（PARK Jin Sook） 韓国・忠北大学校 教授

リーダー津野田典子（Noriko T. REIDER） 米国・マイアミ大学 教授

孫 春日（SUN Chunri） 中国・延辺大学人文学院 教授

王 海燕（WANG Haiyan） 中国・浙江大学 教授

楊 春華（YANG Chunhua） 中国・南開大学周恩来政府管理学院 准教授

周 耘（ZHOU Yun） 中国・武漢音楽学院 教授

表紙図版

Nedzumi no Yome-Iri, Kobunsha, 明治 18［1885］表紙より。
国際日本文化研究センター所蔵「ちりめん本データベース」
（http://shinku.nichibun.ac.jp/chirimen/）

世界の日本研究 2019

非売品

編　者　楠 綾子
発行日　2020年3月31日
発　行　大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター　海外研究交流室
〒610-1192　京都市西京区御陵大枝山町3-2
tel. 075-335-2222（代表）

表紙デザイン　完倉正師

© 2020 International Research Center for Japanese Studies

ISBN 978-4-901558-97-6